
魔法少女リリカルなのは～悠久の吸血鬼～

いつでもどこでも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜悠久の吸血鬼〜

【Nコード】

N6270S

【作者名】

いつでもどこでも

【あらすじ】

悠久の時を生きてきた吸血鬼、
人々から忌み嫌われ、拒絶されながらも彼は人間が好きだった、
そして彼は1人の少女と出会い一時の幸せを手に入れた・・・

魔法少女リリカルなのは〜悠久の吸血鬼〜初まります。

この作品は私の処女作となります、
アニメを見て、こうなって欲しかったな〜と思ったものを再構成し

ます、

色々おかしな・・・いや、かなりおかしい所があると思いますが
生暖かい目で見てください〜(^ - ^) /

あと感想を宜しければ頂きたいです、
それだけで自分は頑張っ て行けます

主人公設定

主人公説明

種族

真祖の吸血鬼

名前

レイ・D・クロムハイツ
ドラクル

魔力ランク

SSS（デバイスを持っていない為ほぼ無意味）

容姿

髪は腰まで届き、色はまるで夜そのものであるかのような漆黑、眼は満月のような金色

肌は白色人種と黄色人種の中間

顔はモデルより遥かに整っておりカツコイイというよりも美しいや綺麗と言った表現が正しい

そのせいで女性と間違われることがしょっちゅうだが本人はあまり気にしていない

好きなもの

人間／甘い物／新しい事／平穩

嫌いなもの

怠惰に生きる者／大切な人を平気で傷つける人／無意味な闘争

構成

1800年の時を生きた不老不死身の真相の吸血鬼
ある時に一族と対立し一族全てを皆殺しにして滅ぼした
人間を劣等種や餌という考えはせず限られた時の中で生きる彼らを
好ましく思い、決して下に見る事は無い
寧ろ自分達が上位種だと思っっている吸血鬼達の方が劣等種だと思っ
ている

基本人間大好き主義だが只怠惰に生を浪費する者は酷く嫌悪する

能力：一族と対立した際に様々な能力を持った者を吸血し吸収して
手に入れた

【吸血】

吸血鬼の吸血鬼たる能力

血を吸う事によって相手を下僕にしたり同じ吸血鬼として繁殖する
事が出来る

更に血を吸った者の能力や記憶を全て吸収出来る

そして自分の命として命をストック出来る

この命のストックは他の吸血鬼の命のストックまで吸収するのでレ
イの命のストックは計り知れない

本人曰く、「一国に住む人間よりも多いかも知れません」とのこと
レイ自体がこの能力を酷く嫌っており同族以外にはまず使わない

【吸血鬼の肉体】

これも吸血鬼として馴染みの能力

ただ単純に肉体のありとあらゆる部分が強化される

普段は人並みに加減されているがレイが本気を出した場合

なのはのデイベインバスターを遙かに凌駕する威力を誇る

満月の場合スターライトブレイカーをも超える

本来は太陽や銀、流水等の弱点があるが

レイ自身真祖なのと1800年の時間と合わさり

弱体化のペナルティーすら発動しない本人が言うには「落ち着きません」程度らしい

【肉体年齢操作】

文字通り肉体の年齢を操作できる

町とかに住むときはかなり重宝する

だがこの能力は元の肉体を変えるだけで変身ではないので
レイが女性として間違われることに変わりないのだ

【無限の夜羽】

自分の体や血を蝙蝠に変える能力

体だけでも千匹以上の蝙蝠になり

血を使えばまさに無限の蝙蝠が出来る

蝙蝠からの情報収集や

相手の影に入りパスを結ぶ事が出来る

ちなみにレイはデバイスを持っていないので

羽を生やして飛ぶことが出来る

【精侵の魔眼】

この眼を視た者の精神に干渉する魔眼

使い方次第で相手を意のままに操り人形として操れるが

レイ自身が嫌うため精々悪人に真実を喋らせる自白剤程度しか使わない

【有償の奇跡】

自らの身を犠牲にしてこの世界に超常の力、魔法奇跡を呼び起こす力

レイだけが使えるオリジナルの魔法、真の等価交換

魔法奇跡を使うかわりにその分の代償を支払う、物によっては命すら出さねばならないが

レイには膨大なストックがあるのでほぼノーリスク

条件が揃えば死者すら蘇生できる

【影の王】

影を操り使役するレイの本来の能力

この能力は影を媒介に様々な能力を発揮する

例えば影から影へと転移する【影渡り】

無機物の影なら制限は無いが

他人の影はパスを繋ぐ必要がある

影に様々な物を保管できる【影の宝物庫】

自身の影に質量をもたせる【影の尖兵】

影を使い機械類のハッキングをする【隠者の賢者】

そして超広範囲に影を展開し相手を飲み込む【深影の晚餐】

この能力は【吸血】と同じ効果があるのでまず人間には使わない

【????】

レイの持つもう一つの本来の能力だが

その全てが謎に包まれている

基本チートですがレイ自身が使いたがらない為殆ど全力で戦いませんはてさて彼がなののような「全力全開」で戦うことがあるんでしようか？

まあ、長い目で見てあげてください

プロローグ

昔々あるところに吸血鬼の一族がいました

その吸血鬼の王様と王妃様の間に一人の男の子が生まれました

そして生まれた男の子は【真祖の吸血鬼】として

一族の皆んなにそれはそれは喜ばれましたが

彼は吸血鬼がととても嫌いでした

只々怠惰に生き何ら向上心を見せない彼等を

酷く嫌悪してました

逆に彼は人間がとても好きでした

限られた時間の中で生きて

自分達の生活を豊かにしようと

様々なものを創り出しそれを次の人が引き継ぎ

更により良いものを創り出す

こうして進化を続けてきた人間達が

とても眩しく見えました

しかしそれが原因で彼は同族の吸血鬼に

【裏切り者】として一族は

彼を抹殺しようとしてました

レ「これはどういうことですか？父上」

城の大広間にて王に向き合うレイ

周りには沢山の吸血鬼の殺気が睨んでる

王「それは貴様が一番知っているだろう

人間如きを庇護するとは一体どうゆうつもりだ？」

レ「如きと言いますが彼等の生はとても尊いものです

彼等は新しき物を創造し素晴らしい世界を創り上げてます
それを無闇に捕ることを反対しているだけです」

彼の言葉に周囲の殺気が濃くなる
だが彼は何も無いかの様に受け流す

王「尊いだと？フツ、バカバカしい
奴らはタダの餌にすぎぬのだぞ
そんな劣等種風情など
吐いて捨てるほど居るではないか」

レ「ならば私達吸血鬼は何を生み出せるんですか？
破壊と殺戮しか生み出せない私達の方が
よっぽど劣等種じゃないですか？」

王「劣っているだと!？」

我等吸血鬼が人間風情に劣っているだと!!
一族を侮辱した貴様を今此処で処刑する!!!」

王がレイに向かって飛びつき爪で引き裂こうとしたが・・・

「ガシッ」

「なっ・・・に!」

誰が言ったのか、もしかしたら全員が言ったのか
そんな呟きが聞こえた
なんとレイの影が実体化して
王の腕を掴んでいたのだ

王「貴様ツ、何なんだその能力は！」

王は驚いていた

吸血鬼は稀に特殊能力をもって生まれる

だがレイはその様な能力は持っていなかったのだ

レ「【影の王 影の尖兵】

影に質量を待たせ使役する私の能力です」

王「馬鹿な！

貴様は能力は持っていないはずだ！！

そんなはずは・・・」

レ「当たり前ですよ、使う機会もありませんでしたし
なんで貴方達に見教える必要があるんですか？」

レイは溜息を吐きながら

呆れた様子でそう言う

それが王のプライドを傷つけ

ついに怒りだし

王「こいつを殺せ！今すぐに！！

皆でこいつを八つ裂きにしろ！！」

王の命を聞き他の吸血鬼が飛び掛ろうとするが・・・

「ゲムウ」

何時の間にか沼のような影が
辺り一面に拡がっていた

「なっ、なんなんだこれは!!」
「身動きが取れん!!」

吸血鬼は謎の影に捕まれ混乱していた

王「貴様ツ、我等に何をした!!」

レ「【影の王 深影の晚餐】

この影に捕まった者は飲み込まれ
私に吸収されます

さらにこの影に捕まったら脱出不可能です」

そしてどんどん吸血鬼達は影に飲まれ

「嫌だ! たすけっ、たすけて!!」

「そんな! おっおれは死にたくない!!」

一瞬にしてこの世界から消滅した

レ「さようなら、みなさん」

レイはまるで何もなかったかのように
1人呟いた、すると奥の方から...

「カツッ、カツッ、カツッ、カツッ」

靴音が響き現れたのは...

レ「...貴女でしたか、母上」

金色の美しい長い髪と

真っ赤な瞳を持った美しい女性でした

母「やはりこうなりましたか・・・」

レ「その様子、やはりこうなる事を知っていましたか」

2人の中に敵意の視線は無かく
いつも通りの自然体の様子だった

母「ええ、いつかはこうなるだろうと思っていました
勿論貴方の能力の事も知っていますよ」

レ「意外でしたね、母上なら
止めるだろうと思っていましたよ
母上の能力【有償の奇跡】なら
不死の私でも殺せますからね」

母「確かに私なら止めれたでしょう
しかし、ここら辺が
私の終末じゃないかと思ってね」

レ「終末・・・ですか？」

意味が分からず首を傾げるレイ
母は疲れた表情で

母「そう終末

私は数百年生きてきたわ

でも人を殺すのも日光に怯えて暮らすのも
好い加減疲れてしまつてね．．．」

レ「そうですね．．．」

それで、私に最期を頼むと？」

母「ええ、お願いできるかしら？」

レ「．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．」

レイは眼を瞑り、深く思考した
そして数分考えゆつくりと．．．

レ「．．．分かりました」

短く、そしてはっきりと告げ
母の元に歩き、そして．．．

レ「ハアアア」

母「ウツ！．．．アア．．．」

首元に牙を突き立て

辺りには血を吸う音が響いていた

こうして彼を除いた

吸血鬼はこの世界から完全に滅びました
そして彼は様々な国を渡り

幾千幾万の出会いと別れを繰り返しました
それでも彼は心折れることなく歩き続けました
その身に数えきれない希望と絶望を抱えながら
・・・

第1話 夜天の少女との邂逅

あの【裏切り者】の一件以来

私は様々な国を観て来ました

やっぱり人間は素晴らしいですね

あの創造性には大変驚いています

特に素晴らしいのはあの「パソコン」というやつですね
調べ物にも便利です

今度じっくり弄りたいですね

それに比べて「核爆弾」は最悪ですね

なんですか？あの破壊力

私でもあの威力を出すのは骨が折れるのに

あれ全部撃つたら地球3〜4回は滅びますよ

まあ、撃とうとしても撃てませんけどね

え、何故かって？

私の能力【隠者の賢者】によって

世界中のコンピューターは全て抑えていますし

例え撃とうとしてもロックが掛かり

撃てないようにしています

さて、話が変わりますが

今私は日本にいます（外見は20代になっています）

いやあ、日本って良いですよ〜

季節のバランスが非常に良くとれ

凄く暮らしやすい

そしてこの「海鳴市」というのは

綺麗な海と豊かな自然があり

今まで観て来た中で五本の指に入ります
いつそのこと別荘でも建てましょうかね？
おや？気付いたら大きな建物が
何々、「海鳴図書館」・・・
何！？こんな大きなものが図書館！？
本好きの私としては見過ごせませんね
一体どんな本があるかたのしみです
さあ、まだ見ぬ本を目指して行きましょ

結果は大満足でした

蔵書数、広さ、どれをとっても最高です
思わず何十冊も見えてしまいました

周りから「綺麗すぎて声かけられない・・・」
「同じ女なのになんで・・・あんなに・・・」

とか聞こえてましたが図書館では静かにするのが
マナーですよ？（本人は全く気付いていません）
おや？あれは発刊停止になった稀少本！？

こんな所にあつたなんて、
いやあ、この図書館最高です
そんなこんなで図書館内を巡っていると・・・

？「うんっ届かへん、もうちょいなんやけど」

車椅子に乗った女の子が居ました、
どうやら本が取れなくて困って居るみたいですね、
周りの人達も見えて見ぬ振りをしていますし

全く大の大人が情けない、
生憎私は目の前で困っている人を
見捨てることはしませんからね
そう言つて女の子の近くに行き

レ「取りたいのはこの本で良いですか？」

女の子に本を渡す、
これが後に夜天の主と呼ばれる少女と、
悠久の吸血鬼との邂逅であつた

第2話 少女の悲しみ

???視点

「レイとの邂逅から数分前の事」

「うん、これは困ったな」

私は誰に言うのでもなく1人呟いてた、

いつもは近くにある本を読んでたんやけど今日は偶々高い所にしか本が無くて困っていた・・・

でもこのまま本が無いと只でさえ寂しい家をもっと寂しゅうなっつまう、

私は腕に力を入れて伸ばしたんやけど・・・

「うんっ届かへん、もうちょいなんやけど」

もちょっとの所で届かんかった・・・

立つことのできない自分の足を恨めしく思いながら本を諦めようとしたら・・・

「取りたいのはこの本で良いですか？」

綺麗な声の人が本を取ってくれた、

私はお礼を言おうと思って振り返ってみると・・・

？「・・・・・・・・・・・・・・・・」

あまりの綺麗さに言葉を失ってもうた・・・
腰まで伸び、まるで夜を写したような真っ黒い髪、
眼は満月のように金色の輝きを放ち、
御伽噺に出て来そうな神秘的な美しさを持った女性（男性です）が
いた

？？？視点終了

レイ視点

？「・・・・・・・・・・・・・・・・」

本を渡そうとしましたがけど車椅子の女の子は固まってしまった・・・
うーん、なんか怒らせることしましたかね？

もしかして取る本を間違えた！？

いや、ちゃんと確認したはずですし・・・

・・・そうか！私としたことが名乗っていないじゃ無いですか！
そうですね、いきなり知らない人に話し掛けられたらそうなりま
すよね（全然違います）

レ「あつと、いきなりすいません、
私の名前はレイ・D・クロムハイツと云います、
気軽にレイって呼んでください」

は「あつ私は八神はやて云います
私もはやてって呼んでください」

レ「はやてさんですね、

さつき取るうとしたのはこの本ですか？」

は「はい、それです、

どうもありがとうございます！」

そう言つて本を受け取り頭を下げる、
中々礼儀正しい子ですね

レ「いいんですよ、気にしないで下さい、
他にも取りたい本はありますか？」

は「いいんですか？それならあの本と・・・
あとあつちの本をお願いします」

レ「ハイハイ」任せてください」

それから暫くはやてさんと本を読んだりお喋りをしてたら閉館時間
になってしまい、

名残惜しいですが図書館を出ました、
そして今はやてさんを家まで送っている最中です

は「今日はホンマにありがとうございます、レイさん」

レ「いえいえ気にしないで下さい、

同じ本好きですし、困っている人はほっとけないんです」

は「それでもや、それにしても日本語上手やな」

レイさん外人さんやろ？」

レ「以前日本に滞在してたことがあったんでそのときに覚えました」

は「もしかして海鳴市に住んどったんか？」

レ「いえ、基本同じ場所に行かないので、

海鳴市は初めてですね」

は「そうなんか、泊まる所とかどうするん？」

レ「今日はホテルに泊まって明日どこかマンションでも借りる予定です」

は「そうなんか……………」

するとはやてさんは急に何かを考えだし、突然……

は「レイさん、ウチの家に泊まらんか？」

とんでもないことを言い出しました・・・

レ「はやてさん、お気持ちは嬉しいんですが、
今日初めてあつた人にそんなこと言つてはダメですよ？」

そう言つてやんわりと断ろうとしましたが・・・

は「レイさんはウチの家に来たないんか？」

ウツ！！涙目＋上目遣いのコンボをされてしまいました、
こんなことされたら断れないじゃ無いですか

レ「分かりました、

はやてさんのお言葉に甘えさせて頂きます」

は「ヨッシャ！それなら早う帰つて準備せな、
久々のお客さんやから腕がなるで〜」

あれ？はやてさん、さつきと全然態度が・・・
まさかさっきのは演技だったんですか！？
そう思つているとはやてさんが振り向き、

「クスツ」と微笑っていた、
はやてさんに狸の耳と尻尾が生えてる様に見えました・・・

さて、来る途中色々ありましたが、
はやてさんの家に着きました、
中々広くていいお家なんです・・・

レ「はやてさん」

は「なんや？」

レ「誠に失礼なのですが、その、ご両親は・・・」

は「両親は私が小さい頃に死んでしまったんや、
だから今は私1人で暮らしてるんや」

やはり・・・

家に来た時から彼女以外の気配がしないと思ったら、
やっぱりそういうことでしたか・・・

レ「すみません、辛いことを聞いてしまって」

は「ええよ、気にせんで、

それに、1人なんはいつものことやし、
もう、慣れとるから」

そう言つて笑つてゐるがあれが嘘の笑顔なんて誰が見てもすぐ分かる、
大人でも耐えられない孤独をこんな小さな女の子が耐えられる筈がないのだ

は「え？」

私ははやてさんを優しく抱きしめ、
語りかけるように呟く

レ「よく一人で頑張つてきましたね、
でももう大丈夫です、私が傍にいます、
泣きたいときに泣いてもいいんです」

は「ウツグ．．．ヒツグ．．．」

はやてさんの目から涙が流れてきた、
辛かったこと、寂しかったこと、
今まで溜め込んできたものを吐き出すように、
少しずつ、そして段々と大きくなり．．．

は「うつつわああああああん！！！！
ホント．．．は．．．辛かつ．．．たんや．．．！！！！

1人は・・・とつても・・・寂し・・・かった!!
でも・・・でも・・・、
誰も・・・助けて・・・くれないから・・・
だから・・・1人で・・・頑張ろつて」

はやてさんは叫ぶように泣いた、
私ははやてさんを抱きしめ、
はやてさんの言葉を黙って聞いていた

は「えっと、その・・・ありがとうございます／＼／」

あれから少し時間が経ち、
はやてさんは落ち着きを取り戻した、
少し恥ずかしかったのか顔が赤くなっていた

レ「いえいえ気にしないで下さい、
元はと言えば私が聞いた事が発端なわけですし」

は「でも、レイさんのお陰で私は救われたんや、
あのままやったら私、いつかペシヤンコになつてもうたわ、
だからお礼を言わせてな、
私を助けてくれてありがとうございます」

レ「そこまで言われたら仕方ありませんね、
こちらこそ、どういたしまして」

こうして少女は孤独と悲しみから解放された、
そして悠久の吸血鬼は新たな出会いをした、

無限の時間を生きる吸血鬼、

悠久の時の中で彼は、悠久、に思えるひと時の幸せを手に入れ
た、

願わくはこの幸せがいつまでも続くように、
無理だと分かりながらもそう願わずにはいらなかった。

第3話 料理とお風呂（前書き）

もう少し字数多くした方が良いですかね？

第3話 料理とお風呂

レイ視点

は「そや！レイさんにお礼としてご馳走したるわ！」

はやてさんはそう言う嬉しそうに台所に行ってしまった、私も誰かと料理を食べるのも久し振りだったので言葉に甘えた、それにはやてさんも誰かと料理を食べるのは久し振りなのか、

はやてさんのあの表情、本当に嬉しそうでしたね、

私ははやてさんの料理が出来るまでリビングで待っていた。

それにしても、最初は気付きませんでした、

二階から人とは違う妙な気配と、外からの2つの視線が気になりますね・・・

まあ、何かあっても私は大丈夫ですが、

はやてさんの為に用心でもしておきますか・・・

はやて視点

は「さてと、レイさんの為に美味しい料理でも作るで！」

そう言って私は気合いを入れる、

それにしてもレイさんは不思議な人やな

あの綺麗な顔もビックリやけど、

初めて会ったのに凄く安心出来るあの雰囲気、
まるでお姉さん（レイは男です）が出来たみたいやった、
それに私の事を抱き締めてウチのことを励ましてくれた、

.....

私あんな綺麗な人に抱き締められたんやノノノ
同じ女性なのに（本当は男です）凄くドキドキしてまうノノノ
そういえばレイさんに抱き締められたときレイさんあんま胸無かつ
たな
胸があつたらもつと良かったのにな
惜しい人やで。

おっと、つい考えこんでしまったわ！
レイさんも待つとるし、早う作らんと、
何作ろうかな、レイさん、喜んでくれるかな？

はやて視点終了

レイ視点

は「レイさん、お待ちせ」

台所からいい匂いと共にはやてさんが料理を運んできた、

レ「ハイハイ、おや？、いい匂いですね」

は「そやる〜、私の自信作やで、
今料理並べるからレイさんは座ってな」

レ「何言ってるんですか、私もそれ位手伝いますよ」

そう言うってはやてさんの料理をテーブル並べる

は「レイさんはお客さんなんやからゆつくり座って〜な、

それにこれは、私のお礼でもあるんやから」

レ「お礼なんていいですよ、私は大したことしてませんから、

それでも言うなら、料理を早く食べたかったから、したんですよ」

は「む〜、それは屁理屈や」

そんなやり取りをしてはやてさんの料理が並び終えた、
私達はテーブルに向かい合って座り、両手を合わせて

「いただきます!!」「」

挨拶をして料理をいただく、

料理はオムライスにサラダ、

そしてオニオンスープ、

バランスのとれた良いメニューです、

は「ジーーーーー」

はやてさんは料理に手を付けず、私の事を見ている、
どうやら私の感想を聞きたい様だ、
取り合えずオムライスに手を伸ばす、

レ「ッ!!!」

は「ど、どうや?」

はやてさんは恐る恐る感想を聞いて来る、
私はゆっくりとオムライスを味わい、
飲み込み、感想を言う・・・

レ「とても美味しいです!!」

は「ホンマ!?嘘やない?」

レ「嘘なもんですか、

ライスの絶妙な炒め具合が
半熟の卵と素晴らしく合いますね、
下手なレストランよりずっと美味しいですよ」

は「そ、そうか、良かった」

はやてさんは安堵の溜息を吐き、
ようやく自分の料理を食べ始める、
この後サラダとスープを飲みましたが、
2つ共とても絶品でした

こうして楽しい食事の時間が終わり、
後片付けをしようとしたら、

「レイさんは座ってテレビでも見ててください」
とはやてさんが言っていました、
なんとかテーブルだけは拭かしてもらいました

片付けが終わり、はやてさんとテレビを見てると・・・

は「レイさん、その、お願いがあるんやけど・・・」

はやてさんが恐る恐る聞いてきた

レ「はい？どうしました？」

私はそう言って水を飲もうとしたら・・・

は「その．．．一緒にお風呂に入ってほしいんやけど」

レ「ブハッ！！！」

盛大に吐き出した．．．

レ「ゴホッ！！！！．．．カハッ！！」

はやてさん、突然何言い出すんですか！？」

は「だって1人で入るのは寂しいし、

何よりレイさんみたいな綺麗な人と入りたいんや！」

はやてさん、さっきから鼻息荒いですよ、
それに目も輝いてますし、

私は溜息を吐きながら．．．

レ「確かにはやてさんは9歳ですが、
もう少し恥じらいを持たないと」

は「ええやん別に、同んなじ女同士、
一緒にお風呂に入っても」

レ「何言ってるんですか、私は男ですよ」

は「．．．．．え？」

レ「はやてさん、ちょ、待つ・・・
せめて1人で脱がせて・・・」

は「問答無用や～～～!!!!」

レ「ぎゃあああああ!!!!」

こうしてレイははやてに脱がされ、お風呂に一緒に入る事になった、
「ここからは音声だけでお楽しみください

は「レイさん、良い体しとるな」

レ「あの～はやてさん？さっきから目が血走ってますよ？
それになんでヨダレとか垂らしてるんですか？」

は「私は今から狩人や～!!!!」

レ「ちょ、待つ、ぎゃああああ!!!!」

は「そらそら～!!!!胸も行くで～!!!!」

レ「アッ、はやてさん、そこ・・・
くすぐった・・・はづっ

は「なんや～？急に甘ったるい声だして」

レ「そっそれは、はやてさんが・・・ンッ

は「そら、もつと行くで〜!!!!」

レ「ああああああああ!!!!!!」

こうして2人（主にはやて1人）の楽しい入浴タイムが終わった

レイ視点終了

はやて視点

は「ふ〜、いい湯やった〜」

いやあ〜ホンマに楽しかったな

レイさんは「もうお嬢さんにいけないorz」て落ち込んだけど
そうなれば私が貰えばいいだけや、

．．．そうや！ここまですればもう1つ我儘を言ってみよ

は「レイさん、私なんか眠たくなってきたわ〜」

そう言つとレイさんはorzの状態から立ち上がり

レ「まあ、あれだけ騒げばそうなりますよね」

と若干溜息混じりにジト目で睨んできた、

それでも私は引かんで！！

は「それでな、私を部屋まで運んでほしいんや」

私はレイさんに両手を広げて、「抱っこ、の姿勢を見せる
それを見てレイさんは

レ「まあ、それ位ならお安い御用ですよ」

そう言って私を抱き抱える、
膝裏と背中に手をおいて俗に言う、「お姫様抱っこ、や、
うーん、レイさんっていい匂いをやな」

そうしていると何時の間にかウチの部屋についてもった、
レイさんと一緒に寝よう思ったけど、
ベッドが狭くて無理やった、ちよっと物足りんけど別の手や！！

は「レイさん、私が眠るまで手繋いでほしいんやけど」

レ「まあ、それ位なら構いませんよ」

そう言って私の手を優しく握ってくれる、レイさんはホンマに優し
いな、

は「レイさん、今日はホンマありがとうな」

レ「この位、私で良ければ何時でも良いですよ、

ただ、もうお風呂と一緒に入るのは駄目ですけどね」

む、もっと一緒に入りたかったんやけどな、

まあ、仕方ないから程々にするわ（全然分かってない）

．．．そんなこと思っている最中、

段々瞼が重くなり、はやての意識は夢の中に落ちていった

はやて視点終了

レイ視点

は「．．．．．．．．．．」

はやてさんはベッドに入ってすぐに眠りに着いた、
それにしても今日は大変でした、

いきなりはやてさんに脱がされ風呂に入れられ、

拳胸を揉まれるなんて．．．

1800年の中で初めての出来事でした．．．

将来とんでもない子になりますね、

なんとか矯正出来ないものでしょうか？

は「巨乳は．．．揉むために．．．あるんや〜」

．．．無理ですね、
今の内に被害者の方に哀悼の意を捧げましょう．．．
そうだ、今ならはやてさんも寝てるので、
【有償の奇跡】ではやてさんの足を治せるかもしれせん、

この能力は命のストックを使えば様々な事が出来ますが、
1つ欠点があり起こす事象を理解しなければいけないのです、
例えば水を出すときは水素2つと酸素が必要なように、
原理を私が構築し、足りないエネルギーを命で補う、
それがこの能力の正体なんです、
私はこの身に数億の命を持っています、

お陰で魂に関しては無条件で原理が構築され、
体に関しては思っただけで能力が使えるのです、
これではやてさんの足が治る筈です、
そう言つて足に手をかざし白い光が輝きだし光が足に吸い込まれよ
うとしたが．．．

《バチイイイ！！》

何かに阻まれ閃光が走った、
幸いはやてさんには何も外傷が無かった、
私の手は酷く焼けただれていたがすぐに治った、
それにしても何故私の能力が効かなかったのか、
それにあの現象は原理を構築せずに能力を使ったものに似ていた、
治療に関しては絶対に成功するのに何故．．．

そうして考えていると1つの本が目に残った、
タイトルが書いておらず黒い表紙に十字架の装飾をあしらった
鎖を巻かれている、まるで、封印、されているみたいだった、

だがそれ以上に気になるのがこの禍々しい気配、

家に来たときの気配と同じだ、

私はそっとはやてさんから手を離してもう1つの能力を発動する、

【隠者の賢者】は機械類のハッキングをする能力だが、

もう1つの能力で文書の中を瞬時に見る能力なのだ、

私は影を伸ばし本を解析しようとしたが・・・

「ッ！！！！！」

私は即座に本を離れた、

吸血鬼の直感がこの本に手を出してはならないと警告してきたのだ、

・・・

手を出せば取り返しのつかない事になると・・・

このときレイはこの本に持ち主以外の干渉があれば持ち主を取り込み
転成するシステムを直感で読み取ったのだ、

私は何も出来ない状況に歯痒かった・・・すると、

は「レ・・・イさん、何・・・処や？」

はやてさんが苦しそうにうなされていた、

私はもう1度はやてさんの手を握ると、

は「うん、レイさん」

はやてさんは再び安心して寝息をたてた、

レ「はやてさん、貴女は私の正体を知ったらどうするんでしょうね、

私を化物と言い拒絶するんですかね？それとも・・・

いや、それはないですね、私を受け入れるなんて・・・

それでも・・・

もし叶うなら本当の私を受け入れて一緒に暮らしていきたいで

すね、」

レイは叶わないと知りつつ願いを口にする、

だが彼は知らない、その願いがかなうということに・・・

第4話 新たな家族と秘密（前書き）

デステイニーさん、感想ありがとうございます！(^o^)
初めての感想だったのでとても嬉しいです(^-^)
これを糧に更なる精進を続けたいと思います、
皆さんに飽きられないように頑張ります(^-^)
／

第4話 新たな家族と秘密

はやて視点

昨日は素晴らしい出来事があった、

図書館で本を取ってくれた優しい人、

まるで御伽噺から出てきたようなめっちゃ綺麗な人やった、

名前はレイ・D・クロムハイツさん、

その後本について色々とお喋りした後私の家に招待したんや、

その時に家族の事を聞かれたけど

大丈夫って笑ったらいきなり抱きつかれた、

一瞬何があつたか分からなかったけど、

レイさんは優しく私が頑張ってきたことを褒めてくれて、

その後泣きたいときに泣けばいいって言うてくれた、

私はたくさん泣いた、今まで溜め込んだもんを全部流した、

レイさんは只優しく抱き締めて背中をさすってくれた、

その後私はお礼の意味も兼ねて料理をご馳走した、

レイさんはとっても美味しいって褒めてくれた、

何より誰かと一緒にご飯を食べるのもかなり久し振りやった、

その後一緒にお風呂に入ろうとしたらレイさんが男ってことが分かった、

あんな綺麗な人が男なんて信じられなかった、

何よりあれは女の自信をバッキリ折るもんや、

私はレイさんを無理矢理お風呂に入れた、

そしてあんなことやこんなことをした、

あんときのレイさん可愛かったな〜
アレだけでご飯三杯はイケるで！！

その後レイさんにお姫様抱っこをしてもらい部屋に連れてってもらった、

そしてレイさんは私が寝るまで手を握ってくれた、まるで本当におねえちゃ・お兄ちゃんが出来たみたいやった、本当にお兄ちゃんになってくれへんかな〜？
ウチはそう思いながらゆっくりと体を起こした、

は「う〜〜〜〜ん」

微かに差し込む日の光、朝を告げる雀の鳴き声、
そして……………

レ「お早ございいます、はやてさん」

私の手を優しく握っているレイさんがいた」

レイ視点

私はあの後やる事が無かったのですっとはやてさんの手を握っていた、

基本私は眠ることを必要としない生き物です、
暇でしたが苦にはなりません、

それに手を離してしまうとはやてさんがまたうなされる様な気がしたので、

そして朝日が登り、鳥の鳴き声が聞こえると、

は「う~~~~ん」

はやてさんが目を覚ました、

レ「お早うございます、はやてさん」

私は朝の挨拶を言う、

はやてさんはまだ寝ぼけているのか、
ポカンと惚けていた、

そして次第に頭が覚醒して私がいることに気付いた、

は「お早うレイさん、もしかしてずっとそうしてたんか？」

レ「いえ、早く起きてしまったので、

それにやることも無かったので、」

正直に言うと、優しいはやてさんの事だからきつと気に病むので、
少し嘘をつく、はやてさんは「ふーん」と特に気にせず頷く、

は「そうか．．ありがとな、レイさん」

レ「どういたしまして」

とりとめの無い会話をした後、

はやてさんと一緒に一階へ降り、

はやてさんは朝食を作り、台所に向かった、
さて、今日は何をしますかね？

はやて視点

レ「いえ、早く起きてしまったので、

それにやることも無かったので」

そう言ってレイさんが笑ってたがあれは嘘やな、
レイさんは夜からずっと手を握ってたんや、
ちよつと申し訳ない気持ちになったが
それ以上に嬉しかった、

は「そうか．．ありがとな、レイさん」

レ「どういたしまして」

私がお礼を言うとレイさんは、
嘘がばれなかったと安心しとったが

ばれとるで？レイさん、

その後レイさんにお姫様抱っこしてもらい、
一階に降り、朝食を作る、

は「よし、レイさん為に美味しいモン作るで」

私は気合いを入れて朝食を作り出した

レイ視点

は「お待たせやくレイさん」

朝食が出来たのか、嬉しそうな声が部屋に響く、

レ「ハイハイ」今いきますよ」

私は昨日と同じく料理を並べる、

昨日は一悶着あったが今日は特に何も無かった、
やがて料理が並べ終わり、
お互いに椅子に座り、

「いただきます」

幸せな朝の時間が始まった

はやて視点

「「いただきます」」

レイさんと一緒に挨拶を言う、

昨日は慌ただしくて意識しとらんかったけど、

誰かと一緒にご飯を食べる、

ずっと諦めとったささやかな、

いつもど通りの日常の「コマ、

それがとても幸せやった、

レイさんはウ私の料理を食べ「美味しい」と言って褒めてくれる

いつもと同じ出来なのにもより美味しかった、

みんなと一緒に食べれば美味しくなるって聞いたけど、

まさか本当だったとは思わなかった、

何時の間にか料理をキレイに食べてしまった、

レイさんも食べ終えたらしく一緒に両手を合わせて、

「「ごちそうさまでした」」

お互いに挨拶を言い、

朝食の時間に終わりを告げた

レイ視点

朝食が終わりはやてさんは後片付けをし、
私はリビングでニュースを見ていた、
丁度今は国際関連のニュースのようです、

レ「へ〜、イギリス王室の結婚式ですか・
暇だったら行ってみましようかね？」

あのウイ アム坊やも立派になりましたね、
教育係の記憶が懐かしいですね〜、
おや、次のニュースは・・・

レ「北 鮮が物騒ですね〜、
確か、金・・・なんとかでしたっけ？
何を考えているのやら・・・

ちよっと国のコンピューターをクラッシュさせましよう」

等とおかしな事を言っていた、
するとそこへ・・・

は「レイさん、何しとるんや〜？」

片付けが終わったはやてさんがやってきた

はやて視点

私は片付けが終わりレイさんのいるリビングにやってきた、
レイさんはどうやらニュースを見てたようや、
なんか「コンピューター・・・クラッシュ」
って言っとなんか何の事なんか？

は「レイさん、何しとるんや〜?」

ウチが声をかけるとレイさんは振り向き、

レ「イギリスの王子が結婚するみたいでしてね、
暇だったら見に行ってみようかと」

そんな事を言ってきた、
あれ？確か旅行の予約はもう取れないってニュースで言っとなんか、
レイさん、どうするんやろ？
っと、今はそれより大事な事を思い出した、

は「レイさんはいろんな国に行ってるんやろ？」

レ「ええ、まあ」

は「それじゃあ、日本からも離れるんか？」

そう、これが問題なんや、

レイさんはいろんな国を回っている、

と言う事は日本を離れると言う事や、

それにレイさんは同じ街とかには行かないって言うとした、

これが意味するんは即ち……

レイさんと二度と会えないと言う事や……

レイさんは口を開き、

レ「直ぐに、とは言いませんが、

多分10年以上は居るつもりです」

と言いつた、確かに短くは無い、

が、それでもレイさんが離れる事に変わりはないんや、

は「嫌や……」

私は絞り出す様に声を出した、

そして段々感情が大きくなり……

は「嫌や!!、レイさんが居なくなったら私はまた1人になってま
う、

確かに10年は長い、それでもレイさんが居なくなる事に変わ
りは無いんや、

私は、レイさんに一緒に居てほしい!!!」

あらん限りの大声で叫んだ、

レイさんは何が起こったの分からん様な表情やった、
ここまで来たらもう感情の制御なんか出来ひん、

は「私と家族になってください!!!」

私は自分の想いを素直に告げた・・・

レイ視点

何が起きたのか分からなかった、
突然はやてさんが大声で叫びだし、

は「私と家族になってください!!!」

と言って来たのだ、
何を言ったか理解できる、
だが言葉の意味が分からなかった、

今まで「家族になってください」なんて言ってきた人は誰1人居な
かった、

私が吸血鬼であると言う事を除いてもだ、
だが彼女も私が吸血鬼であると知れば直ぐに私を拒絶する、
確かに正体をバラさずにいればはやてさんは受け入れるだろう、
だが正体がバレれば確実にはやてさんを傷つける事になる、

レ「分かりました」

は「ホンマかー」ただし、「」

私は意を決して語りだす、

レ「はやてさんに私の正体を話しましょう」

自分が「化物」であると言う事を・・・

レ「私はね、吸血鬼なんですよ」

はやて視点

レ「私はね、吸血鬼なんですよ」

は「え？」

何を言ったのか分からなかった、

レイさんが吸血鬼！？

それ以前に吸血鬼なんて実在したなんて・・・

は「・・・吸血鬼？」

レ「はい、吸血鬼です」

聞き返すように質問する、

帰ってきたのはさっきと同じ言葉、

は「でも、吸血鬼って、架空の存在じゃ・・・」

レ「実在しますよ・・・ほら、」

そう言って口を掴み上げる、

そこには鋭い犬歯が伸びていた

は「でも、日の光とか、レイさん、日光浴びとるし」

レ「普通の吸血鬼はね、でも私は真祖の吸血鬼なので問題は・・・
その前に吸血鬼の事を説明しましょう」

そう言つて吸血鬼の事を説明しだす

レ「まず、皆さんの知っている吸血鬼は【贗血鬼】と言つて、

人間と吸血鬼のハーフとなります、

こちらは太陽や銀、十字架が弱点になります、

それに比べ私は【真祖】と呼ばれ、

純粹な吸血鬼です、

太陽とかは最初弱体化のペナルティーとかありましたが、

1800年生きてきたのでそれももう無いですね、」

は「ちよつと、待つ、1800年!？」

レイさんそんなに生きとるんか!？」

レ「ええ、約、ですが、

いまだに落ち着きませんけどね」

驚いた・・・

レイさんそんなに生きとるや・・・

想像も出来んかった・・・

レ「続けますよ」

私を考え込んでいると、
レイさんが次を言う・・・

レ「そして、吸血鬼の繁殖ですが、
これは吸血鬼が人の血を吸った時に運良く生きてれば吸血鬼になります、

もう1つは吸血鬼同士の性行為です、
ですが子供が生まれても親のどつちかの人間の血が混ざり、
その子も【贖血鬼】となってしまうのです、
ですが私は両親のどつちとも人間の血を受け継がなかったので、
純粋な吸血鬼、【真祖】となつたのです、
そしてさつきも言ったように【真祖】は日の光では死にません、
これが先程の質問の答えです」

は「そ、それじゃあ、レイさんは何か出来るんか？
蝙蝠になつたり、壁をすり抜けたり・・・」

レ「壁をすり抜ける事は出来ませんが、
蝙蝠になる事は出来ます」

そう言ってレイさんは左腕を伸ばした、
するとそこから・・・

《キキキキキキキッ》

10匹程の蝙蝠が出てきた

レ「これで信じてくれましたか？」

は「わ、分かったは・・・」

ちなみに、その、レイさんって不老不死なんか？」

レ「はい、【真祖】は不老不死です、

【殭血鬼】不老長寿ですけど」

は「そうか・・・」

さつきから話に出とったけど、

他の吸血鬼もこの世界に居るんか？」

レ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

レイさんは急に黙ってもうた、

何か聞いてはいけない事を聞いたんかな、

レ「他の吸血鬼は・・・私が全て殺しました」

耳を疑った、

まさかあんな優しいレイさんがだれかを殺すなんて、

は「何か理由があつたんか？」

私は理由が聞きたかった、

レイさんが理由も無くそんな事するわけ無い、

そしてレイさんは口を開いた・・・

レ「私はね、吸血鬼が大嫌いなんですよ、

ただ怠惰に過ごしていく彼等がとても嫌いだった、

そしていつしか私は一族から【裏切り者】と呼ばれるようになった、
りました、

そして王・・・父上が私に抹殺令を出しましてね、

その時に一族全てを殺したんですよ」

レイさんはそのまま言葉を続ける

レ「私は親を殺し、

同族まで殺した正真正銘の化物です、

そんな私を家族にしたいのですか？」

は「それでも・・・」

私は間を置かず答える、

そうや、元からこの人が何者かなんて関係ないんや、

優しくて、綺麗で、暖かくて、

そして何より私を孤独から救ってくれた、

それだけで充分や、それだけでこの人がどんな人か分かる、だから私は嘘偽り無く、この想いを伝える、

は「ウチの家族になってくれませんか？

レイ視点

は「ウチの家族になってくれませんか？

レ「.....」

信じられなかった、

私の正体を知った者は全て私を拒絶した、

中には武器を持つ者もいた、

でも彼女は、はやてさんは違った、

真っ直ぐ私の目を見据えて答えてくれた、

レ「ハハッ.....」

どうやら私ははやてさんを見誤っていたようだ、

まさか受け入れて欲しいと思っていた自分自身が諦めていたなんて、思わず笑ってしまった、

まさか1800年生きてきた私が10歳にも満たない女の子に心で負けてしまうとは、

いや、これが人間の持つ素晴らしい輝きなのだ、

は「む〜、何が可笑しいんや？」

私が笑った事に気に入らなかったのか、
頬を膨らましむくれるはやてさん、

レ「いえいえ、何でもありませんよ」

は「それならいいんやけど、

それで、返事を聞きたいんやけど？」

はやてさんが返事を聞いてくる、

私も嘘偽り無くはやてさんの目を見据えて答える、

レ「私の方こそ、はやてさんの家族にさせて下さい」

こうして両者はお互いに欲していた、
家族、
を手に入れた、
だが彼等は知らない、

これから一か月後に新たな家族が出来る事を・・・

後日談

は「そうや！せっかく家族になったんやからお互いに呼び方変えんと、」

レイさんの事はレイ兄いって呼んでええか？」

レ「ええ、構いませんよ、」

私のはやてって呼ばせてもらいますけど、いいですか？」

は「もちろんや！これからよろしくな、レイ兄い」

レ「ごちそうさ、はやて」

第4話 新たな家族と秘密（後書き）

やっと終わった〜、

iphone書きづらいッす〜、

あと一話書いたらヴォルケンリッターを出すつもりです、
取り合えず頑張るぞ〜

第5話 病院と仮面の戦士（前書き）

自分で読んでみてキャラの心理描写が読み辛かったので、

文の構成を変えました、前の方が良いと言っ方は言っして下さい（＾

- ｾ ） /

あと漸く来ましたバトルシーン、そこまで激しくないけど初めてだから上手く書けるかな？取り合えず頑張ります（^^） /

第5話 病院と仮面の戦士

レイ視点

はやてと家族になって一週間が経ちました、この一週間は1800年の中で最も楽しかった、はやてと買い物に出かけたり、本について語り合ったり、はやてが風呂に乱入してきたり、
．．．最後のは要らなかったですね、

そして今、私は台所にいる、
実は今まで料理ははやてが作っていたんですが、はやての料理を見て私も作りたくなってしまいました、自慢じゃないですが、私の腕はかなりのものですよ？伊達に1800年も生きてはいないですし、以前三ツ星料理店で料理長を務めていたんですから、

レ「~~~~、~~~~」

久しぶりの料理に思はず鼻歌を歌ってしまっ、
そして次々と食材が切られてゆく、

レ「さて、下ごしらえも終わりましたし、後は．．．」

下ごしらえが終わり私は台所を離れる、
向かうは新しくできた家族、
妹、はやての所に・・・

はやて視点

は「ん~~~~~っ」

私は体を思い切り伸ばし体を目覚めさせる、
私は最近、何時もより早い時間に起きている、
その理由は・・・

レ「おや、お早うございます、
もう起きてたんですか」

新しくできた私の家族、
私のお兄ちゃんのレイ兄いや、

は「早く起きんとレイ兄いや私が起きるまで手を繋ぐから早く起きてるんや」

そう、レイ兄いや私が寝ていると起きるまで手を握って来るんや、

レイ兄い言うには「以前はやてがすぐくうなされていて私の事を呼んでいた」って言った、
うゝゝゝ／＼／寝言とは言え、凄く恥ずかしい／＼／
それからレイ兄いは私が寝ている時にこうして手を繋ぐとして来るんや、
決して嫌と言う訳やないんや、
寧ろ嬉しいんやけど、それ以上に恥ずかしいんや／＼／
だって朝起きたら目の前に凄く綺麗な人がいるんやで、
それで物凄い笑顔で、

「お早うございます、はやて」

て言うんやで、
それにレイ兄いは男やから何か胸がスゴイドキドキするんや、
何なんやろ？この気持ち、
私がそんな事考えていると・・・

レ、フフ、すみません、今度から気を付けます」

レイ兄いが微笑みながら言ってきた、
レイ兄い直す気ないな、
その後色々話して私らはリビングへ向かった、
その時にお姫様抱っこしてもらったけどやっぱり恥ずかしいな／＼／

は「何や・・・これは・・・」

私はリビングについた瞬間声を漏らした、

レイ兄いが「今日のご飯は私が作りました」

って言つとたから「どんなモンかな」って思つとたけど、

これは予想を遙かに超えとつた、

料理はまるで生きてるみたいに新鮮で、

命のように光り輝いとつた、

てか料理つて光るんや・・・

取り敢えずウ私は席について

「「いただきます」」

何時もどつりの挨拶を言う、

私は恐る恐る料理？を口に運ぶ・・・

は「！！！！！！！！！！」

あまりの美味さに声が出んかった・・・

いや、体がこの料理を味わうために余分な機能を排除したんや、

私にはそう思えてならなかった、

は「レイ兄い、これは美味すぎるで・・・」

私はようやく喋る事が出来た、

その言葉でありのままの気持ちを言う、

レ「まあ、以前三ツ星料理店で料理長をしていますがね、

それに、伊達に1800年も生きてませんよ」

は「三ツ星料理超えとるやろ・・・」

レ「よく「これが三ツ星だったら、他の料理店なんて一ツ星も付かない!!」なんて言われてましたね」

は「・・・・・・・・・・・・・・・・」

もうやめよう・・・

これ以上話したら私の常識が崩れるような気がする、

その後美味しすぎる朝食?を食べ、

私は何とか生き残った、

いや、アレ本当に死ぬるで!?

美味しすぎて死ぬなんて初めてやった

こうしてはやての生き残り?を賭けた朝食タイムは終わりを告げた

・

レイ視点

朝食が終わり今は後片付けをしています、
はやてが色々と騒いでいましたが、

素材を全て適切に調理すれば誰でも出来ますよ？（出来ません）

まあ、私もこれが出るまで170年懸かりましたけど、
そんなこんなで後片付けが終わるとはやてが・・・

は「今日は定期検査の日やから一緒に病院行こう」

と言ってきた、

もしかしたらはやての今の病状が詳しく聞けるかもしれない、
何かはやてを治す手がかりが得られるかもしれない、

それに、この家に来た時から感じてた2つの視線、
こいつらも何か知っているかもしれない、
こちらからアプローチしてみましよう

レ「分かりました、一緒に行きましょう」

こうしてレイは病院へいく事になった

時間は進み特に何も無く病院に着きました、
今ははやてと一緒に主治医の、石田先生、を待っている、
はやてが言うにはとても優しい良い先生だと言っていた、
するとはやてが誰かを見つけたらしく、手を振りながら

は「石田先生」

手を振りながら相手を呼ぶ、
どうやら向こうもこっちに気付いたらしく、
笑顔で近づいて来た、

石「こんにちは、はやてちゃん」

は「こんにちは、石田先生」

お互いに挨拶を交わす、
うん、確かに優しくて人当たりもいい、良い先生だ、

石「あら？そちらの方は・・・」

あっちも私に気付いたようだ、

レ「初めまして、私はレイ・D・クロムハイツと云います、

はやてとは遠い親戚関係で、この度ははやてと一緒に暮らすことになりました、

宜しくお願いします」

石「私は石田幸恵、知っての通りはやてちゃんの主治医をやっています」

お互いに軽い自己紹介をする、

そしてはやては看護婦さんに連れられ検査をしに行った、さてと、終わるまで時間がありますし、

私もそろそろ行きますか、

はやて視点

石「はやてちゃん、スゴく幸せそうね」

検査室に着くなり突然石田先生が聞いてきた、

は「いきなりどうしたんや？先生」

石「だってはやてちゃん、この前より随分と、二つ、
気持ちが軽くなつたつて言うか・・・
やっぱりレイさんのお陰？」

は「はい、レイ兄いのお陰で随分と気持ちが軽くなりました、
優しいし、暖かくて、一緒に居てくれて、
ウチの大切なお兄ちゃんです」

石「そう、良いお兄さ・・・ええ！？

お兄さん！？それじゃあレイさんつて男！？」

は「はい、私も最初は驚いたけど、
男です、悔しいですけど」

石「そんな・・・反則よ・・・
不公平よ・・・」

髪だつてあんなにサラサラで、

レイさんは何か特別な事してるの？」

は「何もしていませんでした、

お風呂だつてボディソープで頭ごと洗っていたし」

石「そんな・・・私の苦労つて、一体・・・」

石田先生の他に看護師の人たちも頂垂れていた、

やはりレイ兄いは女の敵だと再認識したはやてであった

レイ視点

病院を出たは良いですけど、中々ひと気のない場所がありませんね、さつきから視線も強くなってきましたし、向こうも仕掛ける気マンマンですね、おや？向こうに雑木林がありますね、あそこなら大丈夫そうなんで行ってみましょうか、そう言っつて彼は林の中へ進んで行った

さてと、取り合えずひと気の無い場所は確保出来ました、あとは.....

レ「そろそろ出てきてはとうですか？」

呼び出すだけですな、
すると突然後ろから気配がした、
振り返って見るとそこには.....

仮「よく私に気付いたな」

仮面をつけた奴がいた、

(1人・・・ですか、もう1人は奥で待機・・・、目の前の奴と同じ、素人ではありませんね、取り合えずこれ以上警戒されない様に、知らん振りをおきましょう)

レ「私が1人で病院を出た時から気付いてましたよ、流石に私でも気付きますよ」

(これで私がコイツ1人だけだと思わせて、2人を油断させる、そのまま話が聞ければいいんですが、もし向こうが仕掛けてきてもその時に、2人を捕まえて事情を吐かせる、私にはそれが出来る、‘能力’、がありますし)

私はそのまま言葉を続ける

レ「あなた、何者ですか、何が目的ですか？

警察に連れて行けば職務質問決定級の怪しさですよ」

すると、変態？仮面は私の言葉を無視(いい度胸ですね)して、

仮「警告だ、八神はやてから手を引け」

と巫山戯たことを言ってきた、

勿論そんな巫山戯た提案を呑む訳が無い

レ「嫌です、私とはやてはもう立派な家族です、

そんな話し聞けません」

仮「ならばお前には消えてもらおう」

あらら、やっぱりこの展開になりましたか・・・
それならもう隠す必要は無いですね、

レ「交渉決裂ですか・・・

人間じゃないとは言え、

女性2人を相手にあまり手を出したくないんですけどね」

仮「！？、貴様ツ気付いていたのか！！」

レ「ええ、とつくに気付いてますよ、

奥にいる方も出て来たらどうですか？」

すると奥から瓜二つの変態？仮面がやって来た、

仮2「貴様、何時から気付いていた」

レ「最初からですよ、はやての家に来た時からずっと、

人間じゃないのと女性だと気付いたのは今さっきでしたけど・・・

でも不思議なんですよね、
見た目は男なのに女性の気配がする、
さらに貴女達は人間じゃないときた、
貴女達．．．本当に何者ですか？」

少し威圧感を出してぶつけてみる、
それを感じたのか、2人は直ぐに身構えて臨戦体制をとる、
私は特に構えず自然体の状態のまま、
お互いに睨み合い、時が流れる．．．
そして．．．．．．

《ダッ!!!》

仮面の2人が駆け出した、
2人は私を挟み拳を打ち込み、時に脚を繰り出しながら攻めて来る、
私はその攻撃を躲し、逸らし、防ぎダメージを与えさせない、
2人は次第に焦りを覚え攻撃が大振りになってゆく、
私はその隙を見逃さず反撃をする、
1人の顔の前に（仮1と命名）手を出し、中指を親指にかける、
そして、それを思いつきり．．．．．
弾く、

《パンツ!!!》

瞬間、衝撃音が周りに木霊した、
相手は何とか私の攻撃を避けたが頭から一筋の赤い液体が流れてい
た、

私は仮1に追撃をかけようとしたが・・・

仮2「フンツ!!」

仮2が私の前に立ち追撃を阻む、

仮2は左拳を繰り出してきたが・・・

1人となった攻撃など避けるには容易かった、

私はそのまま仮2の左腕を掴み・・・

レ「よい・・・しょ!!」

仮1と反対方向に投げ飛ばす、

木が3〜4本折れましたが、まあ大丈夫でしょう、

最悪1人でも生き残っていればいいんですから・・・

私はそのまま仮1の方に走る、

仮1は直ぐに構え直しましたが、遅い・・・

仮1「な!?!」

私は20mの間を一瞬にして縮め、

爪に力を込め、逃げられない様に脚を落とす

レ「シッ!！」

筈だった……………

《ガギイイイン!!!!!!》

突如仮1の前にガラスの様な物が現れ私の攻撃を防いだのだ、

レ「!?!」

私は思わず驚いた、あんな薄い膜が私の攻撃を防ぐなんて、まるで漫画に出てくる“バリア”ではないかとその間に仮2が戻ってきて最初と同じ状況になった

レ「さっきの何ですか？私の攻撃を防いだり、

そっちの人はさっき投げ飛ばしたのにやけにピンピンしてますね、

最悪、死んでもおかしくないのに「

「……………」

仮面の2人は黙ったまま喋ろうとはしなかった、
そしてまた構え始める・・・
私も会話では埒が空かないと思い、
本気の実力行使をする、

仮面の2人はさっきと同じ様に私に向かって来た、
だが最初と比べ、速さも威力も格段に上がっていた、
私も最初は驚いたが、この程度問題はない、

レ「ハアツ!!!」

私は仮1に回し蹴りを放ち吹き飛ばす、
そして仮2の頭を掴み地面に叩きつける、
そしてすかさず私は“殺すつもり”で爪を振りおろす、
仮2はバリアの様な物を張るが・・・

《パライイイイン!!!》

綺麗な音をたてて崩れていった、
そのまま私の爪は突き進み・・・

《ドガアアアアアン!!!!!!!!!!!!!!》

爆発音が辺りに響いた、

砂埃が激しく舞っている中・・・

仮2「ハア・・・ハア・・・」

仮2が転がる様に出て来た、

何とか避けた様ですが、右肩から激しく出血していた、

仮2「グツ・・・カハツ・・・」

仮2は苦悶の声を上げて膝を着いた、

私は仮2に近づき

レ「話はもう1人に聞けば済みますか」

そう呟き仮2に止めを刺そうとしたが・・・

レ「!?!」

体に光る紐の様な物が巻きついて来た、

気が付くと蹴り飛ばした仮1が空に浮いていた・・・

仮1は仮2の所に降り立ち謎の光を放つ、

仮2「ハアア、ハアア、ハアア、ハアア」

すると、さっきから苦しそうだった仮2の呼吸が幾分か楽になった、よく見ると傷も少しだが治っていた、

仮2も足元が若干フラつきながら立ち上がる、

仮2「まさかプロテクションを素手で壊すとは・・・

貴様、本当に何者だ？」

レ「そうですね、さっきのはプロテクションと言っているのですが、教えてくれてありがとうございます」

私はお返しとばかりに質問を無視する、

仮1「だがこれで、貴様の行動を封じた、

後は貴様を排除するだけだ」

仮1は私に言い放つ、確かにこの状況では終わりですね、
だが彼女等は知らない、私が“普通ではない”と言う事を・・・

《ギシッギシッギシッバキバキッバキ!!!》

私は腕に力を込める、すると紐は軋みを上げ、所々にヒビが入る、
2人はその様子に驚いているが私はそのまま力を込め、

《バシイイイイイン！！！！》

紐を引き千切った、

仮1「バカな！？バインドを素手で引き千切るだど！？」

そんな事が……………」

仮1の声には絶望の色が混ざっていた

レ「へへ、さっきのはバインドと言っんですか、

確かに言葉の意味通りです……………ね！！」

私はそのまま2人のそこへ駆ける、

2人はすぐさま私にバインドをかける、

2人分とは言え私は先程より5分の1速さでバインドを引き千切る、
だが2人の体は淡く光り、所々消えていた、

仮1「まさかこれ程とは……………」

イレギュラーは排除せねばならないが分が悪い、

ここは引かせてもら……………」

《ドゴオオオオオオオン!!!!!!!!!!!!!!!!!!》

私は最後まで聞かず、そのまま爪を振るった、

地面は深々と抉れ、木々は根元までなぎ倒し、其処は天災の跡地と化していた、

だが2人の体は其処には無かった、^{死体}

2人の気配は完全に消え去っていた・・・

そして大惨事となっていた戦場は元どろりに戻っていた、

レ「全く、何だったんですかあの2人は、

それにあの技・・・まるで魔法みたいじゃないですか」

私は1人呟きながらその場を後にした

病院に戻った後、石田先生に会った

どうやら診察は終わったが他の人達と話しているようだ、
すると石田先生が

石「レイさん、少し話があります」

と言つて来た、どうやらはやての事に関する話のようだ

レ「はやての病状の事ですか」

石「ええ、その通りです、はやてちゃんの足は未だに回復せず、原因もわかっていません、私達医師陣も全力を尽くしています
が、

本当にごめんなさい!!」

石田先生は深々と頭を下げた

レ「顔を上げてください、石田先生」

石「え？」

レ「私もはやての病状がどういふ物かある程度知っています、
それにはやての為にこんなに真剣に悩んで下さり、はやてもさ
ぞ助けられたでしょう、

感謝こそすれ、謝罪される覚えはありませんよ」

石「ありがとうございます」

石田先生は涙ぐみながら頭を下げた、
するとそこへ……………

は「お〜〜い、レイ兄い!！」

はやてが手を振りながらやってきた

《コツツ》

は「あいたっ！」

私ははやてのおでこを小突いた

レ「全く、病院では静かにしなければ駄目ですよ」

は「う〜〜、ごめんなさい」

はやてはシュンとなったが、私ははやての頭を撫で、
はやては直ぐに笑顔になった、

その後石田先生と色々話し、私達は病院を出た、
その帰り道の最中、私は大事な事を思い出した、

レ「そう言えば、来月はやての誕生日でしたね」

は「そう言えばそうやったな〜」

レ「何か欲しい物ありますか？」

何でも買って上げますよ」

するとはやては迷わず

は「私はなんも欲しゅうない、ただレイ兄いが居てくれればそれでええ」

そう答えた

レ「そんなのでいいんですか？」

は「それだからええんや」

その後は特に会話せずに2人は家路につく、

はやてが覚醒するまで一ヶ月、

それは運命の歯車が回り出す時でもある、

だが2人はそれをまだ知らないのであった。

後日談

レ「そう言えば病院から物凄い視線を感じたんですけど、

私、何かしましたか？」

は「いや、レイ兄いは何もしたらんで、

寧ろ何もしたらんからそうなたんやけど」

レ「？、どついう事ですか？

は「なぐんもあらへんよ」

そんな会話がありましたとさ

第5話 病院と仮面の戦士（後書き）

今まで一日おきに投稿してましたが、
決して一日に一話と言う訳ではありません、
期待させてしまっただけには申し訳ありません、
これからはこの様な誤解をなくす為、毎週月曜日の夜に投稿しよう
と思います、
因みに一週間でストックしたやつを全部出すので、
2〜3話位は出せそうです、期待して待って下さい（^^）ノ

第6話 喫茶店にて（前書き）

「ごめんなさい、ヴォルケンリッターは次の話で登場しますm」
「m」

第6話 喫茶店にて

レイ視点

あの仮面の2人の一件から3週間が経ちました、え？急に飛ばすなって？だって仕方ないじゃないですか、私の能力でもはやての足を治せませんし、仮面の2人もあれ以来姿を現していません、取り合えず私の能力の【無限の夜羽】で200匹程蝙蝠を出して街を巡回させているんですが、まだ見つけるに至ってはいませんが、

あの本を解読出来れば何か分かると思うんですが、何か嫌な感じがするので下手に手を出す事が出来ないんですよ、現状は八方塞がり、後手に回る状態、悔しいですがこちらからは手の出し様がありません、

取り合えずはやての影にはパスを繋いでいるので、緊急時でもはやての所へ駆け付けける事が出来ます、まあ、そう言う事なんで気付いたら3週間も経っていた、と言う訳なんです、

それに明日ははやての誕生日で準備に大忙しです、いやあ、誰かの誕生日を祝うなんて何時以来なんでしょうか、とても心が踊りますね、今はやては図書館に居て、私は色々と買い出しをしています、ついでに、何かプレゼントでも買っていきましよう、丁度目の前に“といざるす”もありますし、取り合えず行ってみましようか、

うん、又イグルミが沢山ありますね、

何を買うか迷ってしまいます、

．．．おや？

可愛らしいタヌキの又イグルミが、

タヌキ．．．たぬキ．．．狸．．．

．．．．．はやて

よし、買いましよう、はやても喜んでくれるに違いありません、

ついでに、さつきから異様に目に付いた、

口を縫い付けているウサギの又イグルミ、

何故か赤いゴスロリの子が欲しがっている様な気がしたので、

これも買いましよう、喜んでくれるかな

さて、プレゼントも買いましたし、

後はケーキの予約をすれば大方大丈夫ですね、本来は私がケーキを作れたかったんですが、

あの朝食の一件以来、何故かはやてに料理禁止令が出せれ、料理が作れなくなっていました（涙）

なんでも、「次あんな美味しいもん食ったら生き残る自信ない」らしいです、

それで、取り合えずお店のケーキを買おうと思ったんですが．．．

レ「うん、どれもイマイチなんですよね」

中々良いケーキが見つからない、
いや、決して悪いワケではないですよ、ただ、
これ位はやても作れるんですよ、出来ればはやての作るもの以上に
美味しいものを買いたいんですが・・・

レ「はやての腕の良さが、ここに来て障害になるとは・・・」

そんな事を呟きながら他のお店を巡る、
それでもやはり、はやての腕を超える店はなかった、
私は諦めて帰ろうとしたが・・・

女「離してください!!」

女性が男4人に囲まれて叫んでいた、
恐らくナンパしてきた男達がしつこく絡んできたんでしょう、
私も見てていい気がしないので、助けに行きましょう

女性視点

最悪だ、お店でケーキに使う材料を切らしてしまい、
急いで買い出しに行ったのに、

男1「ねえねえ、お姉さん可愛いね、一緒にお茶しない？」

男達に絡まれた、私は先を急いでたので、

「すみません、仕事がありますので失礼させていただきます」

仕事の事を話して出してこの場を去ろうとしたが、

男2「えらいねえーその歳でも働いてるんだ」

男3「そんな事より俺たちと遊んだ方が絶対に楽しいよ」

男達は通路を塞ぎ、通そうとしてくれなかった、
男は私の腕をつかもうとしてきたが、

「離してください!!」

大きな声を出して、腕を振り払う、
男達は反抗されたのが気に食わなかったらしく

男4「おい、早くこの女を連れてくぞ」

私を囲んで襲いかかろうとしてくる、
私はお兄ちゃんの恭ちゃんに鍛えられてるのでこの程度、なんて事
ない、
私は構えようとしたが・・・

?「何をしてるんですか、貴方達」

突如綺麗な女性（もうツッコみません）が現れた、
女性はそのまま言葉を繋げ、

？「嫌がる女性を無理矢理連れて行くこととは・・・
本当に貴方達・・・屑ですね」

「!?!」

彼女が言い放ったと同時に、空気が変わった、
彼女を中心に空気が生まれ変わり、
まるで質量を持ったかのように重くなる、

私は何度も殺気を受けた事がある、
だがこれは殺気とは全く違う、

殺気は文字通り殺す気、つまり受けた者は死のイメージが浮かび上がるが、

これにはそのイメージが浮かび上がらない、
ただ大きい物が目の前にある様な、
そんな感じであった、

男達もそれを感じ取ったのか凄く焦っていた、
だが男達は屑と言われたのがよっぽど頭に來たらしく、
すぐさま怒りを露わにし、

彼女は男達の手を蹴りそのまま腕に突き刺したのだ、
男達はようやく自分達に起こった事が理解したらしく、

男1「ぎゃあああああ！！！！」

男2「なんで！？なんで俺の腕に刺さってるんだよ！！」

男3「痛ええええ！！！！痛ええよおお！！！！！！」

男4「腕があ！！！！俺の腕があああ！！！！」

苦痛の悲鳴を上げていた、彼女はそのまま男達を見下ろし、

？「・・・失せなさい」

短く、だがそれ以上の反論は許さないとばかりに、
男達に威圧感を与える、

「ヒッ！！！！」

男達は出血した腕を押さえながら逃げて行った、
彼女は私に近付き、

？「大丈夫でしたか？」

優しく声をかけてくれた

レイ視点

ふふ、行きましたか、それにしても全く、
何時の時代にもいるんですよね、ああいうの、
まあ、命に別状はないですし、大丈夫でしょう、
それよりもまず、こちらの女性の方が大事です、

レ「大丈夫でしたか？」

私は出来るだけ優しく声をかける、

女「あ、はい、大丈夫です、ありがとうございます」

女性は特に目立った外傷も無く、大丈夫なようでした、

女「私は高町美由紀と云います、先程はありがとうございます」

レ「気にしないで下さい、あつと、私はレイ・D・クロムハイツと云います、

気軽にレイって呼んで下さい」

美「え？レイ・・・さん？」

美由紀さんは私の名前を聞いた瞬間首を傾げた、

レ「どうしたんですか？美由紀さん」

美「あ、いえ、同んなじ名前の子を知っています」

レ「ハハハッそれは凄い偶然ですね、

所でその服、お仕事の途中だったんですか？」

美「あっ忘れてた！！」

美由紀さんは私の言葉に気付いたらしく、

大慌てでお店に戻って行った、

ちなみに私も、お礼をさせて下さいと言われたので同行する事になりました、

そして着きました、喫茶翠屋

レ「へへ、いいお店ですね」

思わず声が出てしまった、美由紀さんはとても嬉しそうに、

美「はい、自慢のお店です、

特にお母さんが作ったシュークリームはとても評判が良いんです」

と言っ て来た、
ふむ、残念ながらシュークリームではなくケーキが欲しいんですが、
まあケーキが無かったらシュークリームで代用するしかありません
か、

レ「それはとても楽しみですな、
それじゃあ、行きますか」

私はそう言っ て美由紀さんと一緒に入っ て行っ た

？「美由紀！遅かっ たじゃないか、心配したんだぞ！！」

美由紀さんが扉を開けた瞬間、
大学生位の青年が駆け寄っ て来た、
すると奥の方からも2人が出て来た

？「そうだぞ、何かあっ たんじゃないかと凄く心配したんだからな」

1人は男性、雰囲気からして父親かな？随分若いですね、それに先の青年と同じく、相当の使い手ですね、

青年からは匂いませんが、父親からは若干ですが血の匂いがしますね、

そして、もう1人は

？「遅くなるんならちゃんと連絡しなきゃ駄目よ？

お父さんも恭也もずっと心配していたんだから」

これまた若い、恐らく母親でしょうね、

何故か父親より危険な感じがします、一応、警戒はしと来ましょう、

美「うう、ごめんなさい、ちょっとナンパに絡まれ……」

父？「何！？それは本当か！！」

兄？「怪我はなかったか！？そいつらは今何処にいる？」

2人ともなに殺気を出しているんですか、

と言っか兄？に至っては確実にキル宣言してますし、

美「大丈夫だよ2人とも、こちらの方が助けてくれたから」

そう言つと3人は私の方に振り向き、

兄？「そうだったのか、俺は高町恭也と云う、

美由紀を助けてくれてありがとう」

父？「私は高町士郎、君が美由紀を助けてくれたんだね？

本当にありがとう」

母？「私は高町桃子、娘を助けてくださり、ありがとうございます」

三者三様にお礼を述べる、

私も一歩踏み出し

レ「当然の事をした迄ですよ、私はレイ・D・クロムハイツと云います、

よろしくおねがいします」

私は簡潔に自己紹介をする、
先程の美由紀さんの様に3人は驚いていた、

士「驚いたな、まさかレイ君と同じ名前とは」

恭「確かに髪の色や瞳の色も似てるな」

桃「性別も同じ男だったりしてね」

レ「はい、男ですよ」

美「えええええ!?!」

美由紀さんが驚きの声を上げる、
桃子さん、「アラアラ」って言いながら新しいオモチャを見つけた様な顔をしないで下さい、
その時.....

?「ただいま」

元気な女の子の声が聞こえた、

美「おかえり〜、なのは」

美由紀さんが声の主を出迎える、
私も振り返るとそこには、

な「・・・え？」

はやてと同じ年位の、

な「レイ・・・君？」

栗色のサイドテールの女の子がいた、

美「アハハ、やっぱりなのは間違えるか」

な「え？・・・え？」

女の子はワケが分からず、首を傾げる、

レ「こんにちは、私はレイと云います、
君の知っているレイ君とは違いますがよろしくおねがいます」

私は本日3度目の自己紹介をする、
女の子も事態が呑み込めて来たのか、

な「わ、私は高町なのはです、よろしくおねがいます」

若干しどろもどろだったが、挨拶をしてきた、
その後、色々お喋りをし、美由紀さんが「今日のお礼をさせてください」と言って桃子さんにシュークリームを頼みに行きましたが、
シュークリームは全て売れてしまったらしく、ケーキになった、
へえ、ケーキも置いてあるんですか、

な「そう言えばさつき、お姉ちゃん「今日のお礼をさせてください」
て言ってたけど、何かあったの？」

唯一事情を知らなかったなのはさんが聞いてきた、
美由紀さんはその時の出来事を嬉しそうに語りだす、

美「街に買い出しに行ったんだけどナンパに絡まれてね、

その時にレイさんに助けてもらったの、

ビックリしたよ、いきなり男達がナイフを取り出し……」

士「ナイフだと！？父さん、そんな話し聞いてないぞ！！」

恭「俺もそんな話しは初めて聞いたぞ！！やっぱりそいつ等を殺す
か……」

はい、本日2度目の殺気です、
と言うか恭也さん、貴方はなに公然で殺人予告しているんですか？
なのはさんは「お姉ちゃん大丈夫だったの？」と涙声ですし、

美「ちょ、ちょっと、みんな落ち着いて、

それに、大丈夫だったから此処にこうして居るのに」

美由紀さんは慌てて3人を落ち着かせる、
士郎さん達は「そ、そうか」と言っただけでなんとか落ち着く

美「それでね、そのナイフをレイさんが一瞬で全部蹴り落としたんだよ！」

士「へ〜、それはすごいじゃないか」

恭「……………」

な「レイさん凄いの!!」

美由紀さんの言葉を聞いて3人は驚く、
「言うか恭也さん、さっきから“闘いたいオーラ”を出さないでください、
私は闘いませんよ？」

士「いやあ〜、レイ君は闘ってくれないのか〜、
僕も闘ってみたかったんだけどな〜」

士郎さん貴方もですか・・・てか心を読まないでください、
するとそこへ・・・

桃「お待たせ」

桃子さんがケーキを持ってきた、

レ「お、これは美味しそうですね、

思わず感嘆の声を漏らした、目の前にあるのは普通のショートケーキ、
だが普通故に料理人の腕がそのまま反映される、
ただど見ただけで分かる、このケーキは美味しいと、

レ「それでは、いただきます」

私はフォークでケーキの先端を切り、それを口へ運ぶ、

レ「！！ッ、とても美味しいですね」

美味しかった、基本に忠実、いや、
基本を高レベルで安定させた素晴らしいケーキでした、

美「よかった〜喜んでくれて」

美由紀さんは安心した様に胸を撫で下ろす、
まあ、このケーキを作ったのは桃子さんなんですけどね、
指摘しないであげましょう、

レ「桃子さん、こちらってケーキの予約とか出来るんですか？」

桃「ええ、出来るわよ」

レ「急で申し訳ないんですが、明日妹の誕生日なのでお願い出来ますか？」

桃「それ位大丈夫よ」

よし、これで誕生日ケーキは手に入れました、
これで明日の誕生日の準備は完璧です、
するとなのはさんが、

な「レイさん、妹さんがいるの？」

私の妹について聞いてきた、

レ「はい、血は繋がっていませんが、とてもいい子です、

なのはさんと同じ年位ですし、きっと仲良くなれますよ」

な「なのはもその子に会ってみたいの!!」

確かになのはさんならはやてと良いお友達になれますね、
長年人を観てきたから分かります、なのはさんはとても優しい、
きっとはやての足の事を気にせずに接してくれるでしょう、
ですが.....

レ「私も合わせてあげたいんですけど、妹は今とても重い病気にかかってしまってるね、

残念ながら会わせることが出来ないんですよ」

あの仮面の襲撃者の一件があった以上、下手になのはさんをはやてに親しくさせるワケにはいきません、

あいつ等ならなのはさんを傷つけようとするでしょう、

最悪、家族全員に危害を加える可能性があります、

会って僅かの時間しか経っていませんが此処の家族はとても良い人達です、

そんな人達を傷付けさせる訳にはいきません、

心苦しいですが此処は嘘について誤魔化しましょう、

な「そ、そうなんですか・・・」

なのはさんは明らかに落ち込んでしまっ、心なしか両サイドのツインテールもシユンっと垂れていた、

私なのはさんの頭に手を置き、

レ「ですから、治った時には必ずお友達になって下さい、

妹には近い年の友達がいませんからね、きっと妹も喜んでくれます」

優しく頭を撫でる、

な「は、はい！！なのは、絶対お友達になるの！！」

そうやってなのはさんはやてと友達になると言ってくれた、私はそれを聞いて嬉しくなり、《ゴシゴシ》と頭を強く撫でた、

な「はう~~~~~／／／／」

なのはさんは突然顔を真っ赤にしだして俯いてしまった、
と言うか何故に2人は殺気を放っているんですか？土郎さんに恭也さん、

美由紀さんは「わ、私も／／／」と言ってきたので片方の手で撫でてあげました、

美「ん~~~~~／／／」

どうやら美由紀さんも喜んでくれたみたいです、
そして、これを見た2人は遂に限界を超えてしまった、

士「レイ君！！君に娘は渡さんぞおお！！！」

恭「妹を誑かす奴は死ねえええ！！！」

2人は半狂乱の状態になり、私に襲ってきた、

《コツツ》×2

だが、そんな状態ならどんな達人でも動きが単調になる、

私はすぐさま2人にカウンターで顎を打ち抜き意識を奪った、

2人はそのまま糸が切れた人形のように崩れ落ち、床に倒れこんだ、
その後2人は目を覚ましましたが、

桃子さんに「お客様であり、美由紀の恩人さんに何をしているのか
しら？」と、もの凄い笑顔で言われ、

2人はそのまま奥の部屋へ連れて行かれた、

え？何が起こったって？1800年生きた私が受けたくない、とだ
け言っておきましょう、

うん、アレは本当に受けたくありませんでした・・・

その後、色々と喋ったんですが、はやてのいる図書館の閉館時間が迫っていたので、

私は帰る事になりました、

美「今日は本当にありがとうございました、レイさん」

な「またね、レイさん」

桃「今日は楽しかったわ、レイ君」

3人は私を見送ってくれました、
え？土郎さんと恭也さん？まだ復活してませんよ、さっき見た時は全身の色素が抜けていましたけど、
多分気にしたら負けでしょう、

レ「こちらこそ、今日は本当に楽しかったです、

それと、ケーキの予約、ありがとうございました」

そうして私ははやてを迎えに翠屋を後にしました、
それにしても、ふと考えてしまいますね、
はやての足が治り、なのはさんと楽しく遊ぶ未来を、

レ「なのはさんなら、きっと、はやての親友になるでしょうね」

私は1人呟き、その未来に思いをさせ、はやてのいる図書館に足を向けた、

だが彼は知らなかった、その未来が現実のものになることを、
なのはが仮面の襲撃者と同じ力を持っている事を、

そして、なのはが　の自分を知っている事を、
はやての誕生日まで残り数時間、運命の歯車は否応なしに回り始める、

その運命に彼はどう立ち向かうのか、
それは、彼自身も知らない・・・

レイが帰った後の翠屋

美「うふふ、レイさんに頭撫でられちゃった／＼／

レイさん、素敵な人だったな／＼／」

桃「あらあらあら　遂に美由紀にも春が来たわね」

な（うう、お姉ちゃんにレイ君は渡さないの、
のレイ君はなのはと一緒にいてくれたし、絶対お姉ちゃん
に負けないの！！）」

桃「ふふふ どうやらなのはにも春が来たみたいね、

レイ君も人気者ね」

士「認めんぞ！！父さんはそんな事認めんぞおお！！！！」

恭「さつきは遅れをとったが、次は必ず仕留めてみせる！！！！」

桃「あらあらあら駄目じゃない、2人の春を邪魔しちゃ、

それによく言うでしょ？「人の恋路を邪魔する奴は馬に蹴られ
て死んでしまえ」って」

士「ちょ、ちょっと待ってくれ母さん！！

こ、これには深いワケが・・・」

恭「だ、だからお願いします！！

アレだけは、アレだけはやめて下さい！！！！」

桃「だゝめ」

「「ぎゃああああああああ！！！！！！」

なんて事がありました

第7話 真夜中の覚醒（前書き）

ようやくヴォルケンリッターを出せました〇（＾　＾）〇

後で気づいたんですが、翠屋はケーキじゃなくてシュークリームが有名なんですよね、

取り合えず修正はしました。

第7話 真夜中の覚醒

レイ視点

翠屋から離れた後、私は図書館にはやてを迎えに行きました、そして今ははやてと一緒に家に帰る途中です、

は「へ〜、レイ兄い翠屋に行ったんや〜」

レ「翠屋を知っているんですか？」

は「知ってるんも何も、翠屋はここではかなり有名なお店やで、特にシュークリームが美味しらくてな、わざわざ遠くから来る人もおるんやで」

レ「そうだったんですか、ケーキもかなりのレベルだったので楽しみですね」

は「レイ兄いケーキを食べたんか？」

ええな〜、私も一度でええから食べてみたいわ〜」

レ「それならご心配なく、ケーキの方は予約しましたし、シュークリームも明日買って誕生パーティの時に食べましょう」

は「ホンマか！？ありがとうな、レイ兄い!!!」

はやては目を輝かせとても喜んだ、ふふ、本当に嬉しそうですね、

レ「ふふふ、どういたしまして、

そうだ、はやての足が治ったら一緒に翠屋に行きましょう、
ぜひ、紹介したい子もいますし」

は「紹介したい子？一体誰なんや？」

レ「高町なのはさんと云いましてね、翠屋の子なんですが、

はやてと同年ですし、はやてとお友達になりたいと言ってます」

は「なのはちゃんか、私も友達になりたいな」

レ「なれますよ、優しくとてもいい子ですし、

きつと、いいお友達になれます」

は「そうか、それは楽しみやなあ」

なのはさんと遊ぶ光景でも見えたのか、はやては楽しそうに笑っている、

レ「それから、いろんな所に出掛けましょう、北海道に京都、それと沖縄、

海外もいいですね、今まで行けなかった分、沢山の場所に行きましよう」

私ははやてとの未来を語る、はやてが我慢してきた分、その分だけ、はやては幸せを享受すべきなんです、

は「ひつく．．．あり．．．がとな、レイ兄い」

はやては涙ぐみながら私の提案を承諾してくれた、

その後は特に会話もなく、私ははやての頭を撫でながら、我が家に帰りました、

はやて視点

レ「それから、いろんな所に出掛けましょう、北海道に京都、それと沖縄、

海外もいいですね、今まで行けなかった分、沢山の場所に行きましよう」

嬉しかった、今までは足のせいでずっと諦めとった、誰かと一緒に出掛けるなんて考えもせんかった、

は「ひつく．．．あり．．．がとな、レイ兄い」

あかん、レイ兄いと一緒に出掛ける事を想像したら涙が出てきても
うた、

それをレイ兄いは優しく頭を撫でてくれた、
本当にレイ兄いは最高のお兄ちゃんや、

．．．レイ兄い、私は今、とても幸せなんよ、
レイ兄いが来てくれた時から、私は何も欲しい物なんてあらへん、
毎日一緒に居てくれる、それが私にとって最高のプレゼントなんや、
今でも幸せ過ぎて怖いくらいなんやから、
これ以上幸せになったらバチが当たりそうや、
レイ兄いには感謝してもしたりないんやで、
この気持ち恋なのかどうなのか分からんけど、
もしこれが恋やったら、レイ兄いは応えてくれるのかな？

はやて視点終了

レイ視点

あれから特に会話をせず、家に着きました、
はやては何か考え込んでいたので、邪魔するのも悪いで少しこのま
まにしておきましょう、

それから2人で一緒にご飯を食べ、テレビを観て、お喋りをする、
平凡であり、掛け替えのない幸せな時間が過ぎていきました、
気付いたら11:00を回ろうとしていた、

レ「おっと、もうこんな時間でしたか、はやて、そろそろ寝ますよ、
」

は「そうか、もうこんな時間が、まだ本を読みたかったんやけど仕
方ないな」

私ははやてを抱き上げ（お姫様抱っこ）、そのまま部屋へと運ぶ、
もう日常となったシーンでしたが、何故かはやての顔が赤かったん
ですが、何かあったんでしょうか？

そして、はやての部屋に着きそつとベットに寝かしつける、

は「いつもありがとうな、レイ兄い」

レ「今更改まってどうしたんですか？

家族なんですから、私達は」

は「そつか．．．そつやもんな．．．
家族やもんな．．．私達」

はやては確認するよつに何度も呟く、

は「なあ、レイ兄い」

レ「なんですか？」

は「もしな．．．私が大きくなつたら．．．その．．．

レイ兄いは．．．私の事．．．

やつぱやめた、なんでもない」

はやては何か言いたそうでしたが途中で止めた、

少し気になりましたが本人が言いたくないなら無理に聞く必要はないですね、

私ははやての頭を優しく撫でた後、リビングに戻り、外の監視を続けました、

レ「やはり、まだ見つかりませんか」

外には200匹程の蝙蝠を放っているんですが、
今日も仮面の2人を見つける事が出来ませんでした、

レ「仕方ないですね、夜だけでも監視の数を増やしますか」

私はリビングからバルコニーに場所を移した、
空を見ると、星々が輝き、とても綺麗な空でした、
バルコニーに出た後、私は自分の腕を掴み、
思いつ切り……………

《ブチブチブチッ》

引き千切った、
肉の裂ける音と、まるで噴水のような綺麗な音が静かに響き渡る、
腕はまるで壊れた玩具の様に地面に落ち、
千切った部分から致死量の血が吹き出てきましたが、

《グジュグジュグジュグジュ》

腕を千切った部分から不気味な音が響くと、
腕はあっという間に再生しました、

私はそのままもう片方の腕を掴み、先と同様に・・・

《ビヂビヂビヂッ》

引き千切る、

腕はすぐさま生え、地面に腕だったモノが落ちているだけでしたが、腕だったモノは段々モゾモゾと動きだし・・・

《キキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキ》

大量の蝙蝠へと姿を変えました、その数ざつと300、
自らの血肉を蝙蝠に変える、これが私の能力【無限の夜羽】

125

レ「情報収集にはうってつけなんです、
死ぬ程痛いのが難点なんですよね」

蝙蝠達はそのまま夜の闇へ消えて行き、私はリビングに戻りました、
時計を見ると時刻は11:59分

レ「もう少しで日付が変わりますね・・・」

54、55、56、57、58、59・・・

00:00分

レ「よし、今日も1に・・・ッ!？」

日付が変わった瞬間、はやての部屋から大きな気配を感じとった、

レ「この気配は!?!クソッはやて!?!?!?!」

私は全力ではやての部屋へと駆け出しました、
その反動でリビングが揺れましたが関係ありません、
私はすぐさま部屋に駆けつけ、

レ「はやて！……！」

ドアを壊さんばかりに開け放つ、
するとそこには……

は「あ、レイ兄い〜」

呑気な声を出しているはやてと、

「「「「……」」」」

黒い服を着た4人組がいました、

レ「……えーと、はやて？これは一体どういう事ですか？」

私は事態について行けず、思わずはやてに事情を聞く、

は「うーん、うちもよう分からんのやけどな、突然本が光り出した思ったら、

目の前に4人が現れたんよ、

あ、4人の名前はシグナム、シャマル、ザフィーラにヴィータ言っ
んよ」

呑気に話すはやてを見て頭を抱える、

もうちよつと警戒しましよ、いきなり人が現れたら普通ビツク
りするでしょう、

ザフィーラさん．．．でしたっけ？彼に到っては耳や尻尾が生えて
いるじゃないですか、

そんな事を考え込んでいると．．．

シ「貴様、何者だ？」

シグナムさんが警戒心を露わにして聞いてくる、
うーん、悪い感じの人ではないですね、

一応警戒はしときますが、敵ではないでしょう、

レ「申し遅れました、私はレイ・D・クロムハイツと言いまして、
はやての兄です、シグナムさん．．．でしたよね？よろしくお願
いします」

シ「あ、ああ、こちらこそ」

私の対応が予想外だったのか、シグナムさんは少し慌てる、

レ「で、事態の説明なんですけど、それは朝でもいいですか？」

シ「し、しかし」

レ「今の時間は世間一般的に寝ている時間です、
はやてが起きているワケにもいきませんし、
部屋も用意しますので、今は休みましょう」

シ「．．．分かった」

シグナムさんは渋々ですが頷いてくれました、
私ははやてをもう一度寝かしつけ、
リビングに向かったんですが．．．

シ「一体何が起こったというのだ？」

シグナムさんがリビングを見て聞いてくる、
忘れてました、リビングには今2m程のクレーターが出来ていたんです、

レ「ちよつと力加減を間違えただけですよ、
それよりも部屋へ案内しましょう」

私は話しを誤魔化し、4人を部屋に案内する、

レ「ちよつと待って下さいね、今ベットを出しますから」

私はそう言って【影の宝物庫】を発動させて、影を床一面に展開する、

「「「「「!?!?」「」「」

4人は突然の事に驚いていましたが、私は気にせず影に手を突っ込む、

レ「ええと．．．これじゃなくて．．．何処にありましたっけ？

ああ、有りました有りました」

影から3台のベッドを引きずり出し、部屋にセットする、

レ「この部屋は女性陣の部屋なので好きに使って下さい、

ザフィーラさんは別の部屋なので、すみませんがもう少し待って下さい」

私はザフィーラさんの部屋へ向かおうとしましたが．．．

シ「貴様、本当に何者なんだ？それに、さっきの能力は．．．」

シグナムさんが疑いの眼差しを私に向ける、よく見ると他の3人も似たような・・・ヴィータさんだけ敵意剥き出しですね、そんな視線を私に向ける、

レ「端的に言うと、“化物”ですね、

まあ、詳しい事は朝に話しましょう？

早く寝ないと朝ご飯抜きですよ？」

私はそれだけ言うと、3人の部屋から出て行き、ザフィーラさんの部屋も先程と同じ様にベットを引きずり出しリビングに戻りました、

レ「さてと、先ずはこのクレーターを直して、

その後宝物庫の整理でもしましょうか」

そう言っつて私は作業に移った・・・

シグナム視点

シ「みんな、聞こえるか？」

奴が部屋を出て行った後、私は念話で皆と話す、

ヴィ（ああ、それにしてもワケが分からねえ、

あたし等の殺気にも全くビビらないでさ、一体何なんだよア
イツは！？）

ヴィータは奴の態度が気に入らないらしく、癪癪を起こす、

シ（落ち着けヴィータ、それは朝になればすぐ分かる、

それとシャマル、現状で何か分かった事はあるか？）

私はヴィータを落ち着かせ、参謀役のシャマルに奴の事を聞く、

シャ（今分かっているのは彼の魔力がSSSランク程の魔力を持っていると言っ事ね）

ザ（SSSか、主より多いな、やはり魔導師か？）

シャ（それは多分無いわね）

ヴィ（何でだよ？そんなに魔力を持ってんのに何で魔導師じゃないんだよ？）

私も気になった、それ程の魔力を持っている奴が魔導師じゃないなんて妙な話した、

シ（同感だ、私もその事については気になる）

私もシャマルに説明を求める、

シャ（先ず、彼にはデバイスの気配が感じられなかったわ、

それに、私達と対峙した時、デバイスの起動どころか、

魔力を開放すらしなかった、

後、主も私達の事を全く知らなかったわ、

多分この世界は魔法文化がない世界なのよ）

確かに魔法文化が無い世界なら魔導師じゃないということも納得で

きる、
だが、私に新たな疑問が浮かび上がる、

シ（ならば、アレはどういう事だ？）

ザ（アレとは、力加減を間違えたと奴が言っていたアレの事か？）

シ（そうだ、奴は魔導師ではないのだろうか？）

シャ（ええ、魔力の残留もなかったし、

魔法の発生は確認できなかったわ）

シ（という事は、つまり奴は自分の力だけで床を粉碎したという事か？）

ヴィ（何だよそれ、バケモンじゃねえか）

シ（確かに奴は自分の事を“化物”と呼んでいたな、

あながち、間違っていないのかもしれないな）

ヴィ（それに、影からベツトが出てきたのも気になるしな）

シャ（おそらく彼のレアスキルね、見た感じだと物を仕舞ったり出したりする能力だと思うけど、

詳しい事は分からないわね）

シ（結局、詳しい事は分からず仕舞いか・・・

何にせよ、警戒だけはしておこう）

シャ（そうね、朝になるまで待つしかないわね）

ヴィ（じゃあ、どうすんだよ？このままジツとしているのも嫌だぞ）

シャ（かと言って、このままベッドで寝るのも・・・）

シ（奴が出してきた物だからな、何か仕掛けがあってもおかしくない）

私達が考え込んでいると・・・

ザ（そうか？中々寝心地が良いぞ？）

ザフィーラがとんでもない事を言ってきた、

ヴィ（ザフィーラ！お前もつベットに入ってるのか！？」

ザ（ああ、そうだが）

ヴィ（いつから入っていたんだ！？）

ザ（最初からだか？）

シ（警戒しなかったのか？畏の可能性もあるのだぞ？）

ザ（簡単な探知魔法を掛けたが結果は“最高級のベット”とだけだった、

それなら大丈夫だろう）

「「「最高級のベット」」」

ザ（それなら私はもう寝るぞ・・・）

ザ（それなら私はもう寝るぞ・・・）

ザ（ファイラはそれだけ言うと念話を閉じた、私達も一応、探知魔法を掛けてみる、結果は・・・）

「「「最高級のベット」」」

だった、
他に仕掛けは無い様なので、
私達は恐る恐るベットに入る・・・

ヴィ「フカフカだ・・・」

シャ「フカフカですね・・・」

シ「フカフカだな・・・」

ベットは最高級の名に相応しい物だった・・・
そして私達は静かに目を閉じた

第7話 真夜中の覚醒（後書き）

本編ではザフィーラがあまり目立たなかったので、ちょっと目立たせようと思います、それでは、また来週（＾・＾）ノ

第8話 説明（前書き）

一週間で2〜3話は出せると言ってもう一話しか投稿出来ない、
なんかペースが落ちてきました、
それでも私は頑張りますので応援宜しくお願い致します、
感想待ってま〜す（^o^）ノ

第8話 説明

シグナム視点

カーテンから朝陽が差し込み、鳥の小さな鳴き声が聞こえる中、

シ「ん、」

私は静かに目を覚ました、夜、奴が出したベットで寝る事になったのだが、
余りの寝心地の良さに思わず熟睡してしまった、

141

シ「今は7時か・・・」

時刻は7時、寝たのが1時頃だったので、6時間は眠ってた事になる、

いつもの私の睡眠時間は2〜3時間程度なのだが、

シ「まさかここ迄熟睡してしまうとは・・・」

こんなに気持ち良く眠れたのは生まれて初めてだな」

私は1人呟きベットから出る、
ヴィータとシャマルはまだ寝ていたが、
起こすのも何だったのでそのままにしておう、
私は部屋を出てリビングに向かうと、
そこには……………

は「おはようさん、シグナム」

優しい笑みを向ける、小さな主と、

レ「おはようございます、シグナムさん、
よく眠れましたか？」

お茶を注いでいる奴と、

ザ「目が覚めたか」

それを飲んでいるザフィーラがいた、

シ「主より遅く起きてしまうとは、申し訳ありません」

私は主より遅く起きてしまった事に謝罪する、

騎士である私が主より遅く起きてしまうとは許されない行為なのだ、
だが主はそんな事を気にせずに・・・

は「ふふ、ええんよそんな事、私は気にしとらんし、

それに、レイ兄いのベットは寝心地良えからな、

熟睡してまうんのも仕方あらへん」

笑って許してくれた、

ザ「そうだな、あのベットは今迄で最高の寝心地だったし、

熟睡してしまうのも無理はない」

レ「ははは、そう言ってくれると嬉しいですね、

お茶のおかわりは如何ですか？ザフィーラさん」

ザ「すまない、願います」

レ「はい、ちょっと待って下さいね」

その横では湯呑にお茶を注ぎ、ザフィーラに渡している奴と、

ザ「ズズツ・・・落ち着くな・・・」

呑気にお茶を啜っているザフィーラが和んでいた、

シ「ザフィーラ、お前はなに呑気にお茶を啜っているのだ？」

ザ「いやなに、お前より30分程早く起きてしまったな、

主が朝食を作っている間暇だったので、

同じく暇だったレイにお茶をご馳走してもらったんだが、

とても美味しくてな・・・気に入ってしまった」

シ「・・・」

ザフィーラの言葉を聞いて、頭を抱えた、あれ程警戒をしておけと言ったのに何故馴染んでいるのだ、

レ「まあまあ、あまりザフィーラさんを責めないで下さい、

はやてが料理を作っているこの時間はいつも暇でしてね、

ついザフィーラさんに付き合っただけですよ、

それと．．．．．はい、シグナムさんもうござ

奴はそう言っただけにもお茶を出してきた、

湯呑からは何ともいえない香しい匂いを漂わせ、とても落ち着く香りだ、

私は湯呑に手を伸ばす．．．．．

イカン、イカン、何を考えているのだ!?

シ「い、いえ、私は結構です」

私は烈火の将 シグナムだ!こんな物で私は折れんぞ!!

レ「まあ日本のお茶は独特な味と香りがしますからね、
シグナムさんは外国の方ですし、
無理なら仕方ありませんね」

奴は湯呑を下げようとしたが・・・

シ「ま、待つて下さい！その、やはり・・・

私もいただきます」

私はそれを止める・・・と言っか、何故私は止めているのだ？

シ「そ、その・・・折角出してくれたのに勿体無いと言っか・・・

そ、そうです！好き嫌いは騎士道に反する事です、

飲み物といえどもそんな事で無駄にさせる訳にはいきません」

そ、そうだ、これは騎士道に反する事だから、飲む訳であって、
決して飲んでみたい訳ではないんだぞ！！

レ「そうですね．．．

でも、無理して呑む必要はないですからね？
嫌だったら残してもらっても構いませんよ」

そう言って再び湯呑を置く、

私は恐る恐る湯呑を口に運びお茶を啜る、

シ「ズズツ．．．」

口には何ともいえない香りが漂い、
ほんのりとした甘さが広がる、

その甘さの後に苦いとも違う独特の風味が訪れ、
それが私の心と体を落ち着かせる、

シ「美味しい．．．」

思わず本心が零れてしまった事に驚いたが、
逆にそれだけの美味しさだという事も理解できた、

レ」ふふふ、喜んでくれて何よりです」

奴は私の言葉が嬉しかったのか笑みを浮かべる、

シ「はい、とても美味しかったです」

私もつい警戒を忘れて和んでしまった、
それを横で見ていたザフィーラは何故か微笑っていた、
後で尻尾をむしってやるう、
そんな事を考えていると・・・

シャ「おはようございます」

ヴィ「・・・おはよう」

シャマルとヴィータが起きてきた、

レ「おはようございます、これで皆んな揃いましたね、

ちよっと待って下さいね、今料理を持ってきますので」

奴はそう言っけてキッチンに行き料理を持ってきた、

品は白米と鮭の塩焼き、ほうれん草のおひたしに味噌汁といった物、
ベルカにも同じ料理があったので多分同じだろう

ちなみに、私の好物でもある、

その後、皆で料理をいただいた、

味は絶品とだけ言っておこう、

そして、朝食を食べ終えたところで奴は話を切り出した、

レ「それで、夜の説明の件なんですが、

今から宜しいですか？」

奴の言葉を聞いて、私達は姿勢を正した、

それを肯定と捉えたのか、そのまま言葉を続ける、

レ「先ずは、お互い名乗りますか」

レイ視点

レ「先ずは、お互い名乗りますか」

あの時はゴタゴタとしていましたからね、
改めて、自己紹介といきますか、

レ「改めまして、私はレイ・D・クロムハイツです、
レイと呼んでください」

は「私は八神はやてです、
私もはやてでいいです」

シ「私は烈火の将 剣の騎士シグナムです」

シャ「湖の騎士シャマルです」

ザ「盾の守護獣ザフィーラだ」

ヴィ「・・・鉄槌の騎士ヴィータ」

レ「これで自己紹介は終わりましたね、
それでは、本題に入りましょう、
先にあなた達の事からでいいですか？」

シ「ええ、構いません」

レ「ありがとうございます、
取り敢えず、あなた達が全部話すのではなく、
私達が聞きたい事、知りたい事だけを質問するので・・・

はやて、お願いします」

は「そこで私に振るんかい!!！」

だつて皆さん私の事警戒しているんですけどもん、
グイータさんはさつきから睨んでますし、
私が聞くより、はやてが聞いた方が穏便に話が進むですよ、

レ「はやての質問の後に私が細かい事を聞きますので、

その方が話もすぐに済むでしょう」

は「それもそうやな、

それじゃ私から質問するで？」

最初に、あの本は一体なんなんや？」

シ「あの本は「闇の書」と呼ばれる物で、

相手の魔力を蒐集し、全ページの666ページを埋めれば持ち
主に大いなる力を与える魔道書です」

闇の書ですか……

随分と物騒な名前ですね……

それに「魔力」と「魔道書」ですか、

自分で言うのも何ですが、何ともファンタジーな話ですね、

は「魔力か．．．」

いきなり現実離れた話になってもうたな、

その話からすると魔法というんのも存在するんか？」

シ「はい、存在します」

驚いた．．．．．

まさか魔法が実在するなんて、

私が生きてきた1800．．．

いえ、一族の記憶を喰ったのも含めれば3000ちょっとですか．．

その記憶の中でもこんな事は初めてですね、

は「そうなんか．．．」

レイ兄いは知つとた？」

レ「いえ、私も全く知りませんでした」

シ「知らないのも無理はありません、

この世界には魔法文化がありませんから」

は「この世界って、まさか他の世界が存在するんか？」

シ「はい、この世界の他にも様々な世界が存在しています、

「こことは違う次元に存在しているので次元世界と呼ばれています」

「こことは違う次元、ですか．．．
魔法の次が異次元の話ですか．．
まあそれなら私が知らなかったのも納得がいきますね、

は「そうか．．．

うーん、なんかスゴイ話になってもうたな、
まさかこの子がな〜、

物心ついた時には棚にあつたんよ、
綺麗な本やったから大事にはしてたんやけど、
そんなスゴイ物やったなんて．．．」

はやてが驚くのも無理はないですね、
私も少し困惑していますし、
はやては暫く考え込んでいます．．．

は「うーん．．．．ヤメた！
後はレイ兄いに任せる！！」

.....投げた

レ「仕方ありませんね、

では私からも質問させていただきます、

最初に.....

あなた達、人間ではないですね？」

「「「!?!?!」」」

ザフィーラさん以外の3人が驚いた、どうやら凶星みたいですね、

シ「.....我等が人ではないと知っていたのか？」

レ「言い方が悪かったですね、

なんて言えば良いんでしょうか、

魂の面では間違いなく人間の魂なんです、

肉体の面は人間とほぼ同じでありながら何故か造られた気配が
するんですよ、

私が気になったのは造られた気配がするその肉体なんです」

シ「見ただけでそこまで分かるとは、

確かに私達の体は造られた物だ、

私達は守護騎士プログラムと言われ、

主を守る為に造られたプログラムだ」

プログラムですか・・・
魔法というファンタジーな話から随分と近代的な言葉が出てきましたね、

レ「そうだったんですか、

まあ、魂は人間と同じですからあなた達もれっきとした人間ですよ、

次の質問に移りますが、

この世には様々な世界、次元世界あると言いましたね？

それに先程あなた達は「次元世界と呼ばれています」と言った、

つまり、あなた達以外にも次元世界を認知している者が居ると

いう事です、

ならば、それを取り締まる機関も存在してるんじゃないですか？」

シ「鋭いな、確かに存在している、

名前は「時空管理局」その名の通り次元世界を管理、統治している組織だ」

やはり存在していましたか、

それにしても「時空管理局」ですか・・・

随分と大層な名前ですね、

様々な世界を管理しているのなら大規模の組織である事に間違いはないでしょう、

一応警戒はしておきますか、
組織は大きくなればなるほど厄介な事になりますからね、

レ「そうですか・・・

では最後に1つ、

あなた達と闇の書はその時空管理局からしたら結構違法な存在なんじゃないですか？」

「「「「！？」「「「「

私の言葉に今度は4人全員が驚いた、

どうやら皆さん腹芸はあまり得意ではないみたいですね、

レ「簡単な話ですよ、

その闇の書の主には大いなる力が与えられるんでしょう？

あなた達魔法使いがどれだけの力を持っているか分かりませんが、

個人がそんな力、ましてや自分達に手を向けるかもしれない力を放っておく訳がありません、

あわよくば自分達の力にしようとするかもしれないが、

それに、その力を得るには他人の魔力を蒐集しなければいけないんですよ？

そんな事を時空管理局はおそらく許さないでしょうしね」

シ「全てお見通しと言う訳か？」

レ「永く生きていますし、経験も豊富ですからね、

そんな事だろうと思ってましたよ、

これで私の質問は終わりです、

次はあなた達の番です、

知りたい事・・・主に私の事ですかね、

知っている範囲ならお答えしますので色々と聞いて下さい」

シ「・・・それなら」

瞬間シグナムさんの目が鋭くなった、

3人の視線も・・・グイータさんは相変わらずですね、

虚偽の答えは許さないとばかりに睨んできている、

まあ、私もそんなつもりはありませんけどね、

シ「単刀直入に言う、お前は一体何者なんだ？」

さて、どう答えたものか・・・

レ「あなた達は吸血鬼を知っていますか？」

シグナム視点

シ「単刀直入に言う、お前は一体何者なんだ？」

私達の正体を見ただけで看破したその洞察力、

時空管理局の様な司法組織の存在、

そして、私達がそれから捕縛対象になっていると言う事、
後ろの2つはまだ感が良い程度で済ませられる、

だが最初のは感が良いだけでは済まされない、

私達の肉体が造られていると言う事を奴は見抜いたのだ、
しかも魔法も使わず、自分の眼だけでだ、

明らかに異常過ぎる、

私達は嘘は許さないと鋭い視線で奴を睨みつけた、
奴は暫く考え込んでいると・・・

レ「あなた達は吸血鬼を知っていますか？」

と言ってきた、

吸血鬼・・・知らない言葉だ、

他の3人にも念話で聞いてみたがやはり知らなかった、

シ「いや、知らない言葉だ」

レ「そうですか、

やはり知りませんでしたか・・・」

そう言っつて奴は再び考え込んだ、

その様子は嘘を付くというよりなんて説明すればいいのかわからな
いといった様子だ、

ザ「その吸血鬼と言うのはお前が夜に言っていた“化物”と言う者
なのか？」

ザフィーラは奴が言っていた言葉を聞いてみた、
すると、予想外の人物が会話に入ってきた、

は「ちよつと待った!!」

我等が主、八神はやてだ、

は「レイ兄い、もしかして自分の事を化物て言ったんか？」

しかも凄くお怒りになっている、

レ「い、いえ、他に当てはまる言葉も無かったのでつい・・・」

今まで冷静に話しをしていた奴がタジタジになっていた、

レ「それに、本当のこーいー」

《プチッ》

何かが切れる音が聞こえ、

は「ドアホ！！！！！！」

主が大声で怒鳴りだした、

は「ええか？レイ兄いはバケモンやない、

確かにレイ兄いは人間とは少し違う種族や、

それでも、それだけでバケモン言うのは違う！！

こんなにも優しく、綺麗で、カッコよくて、暖かいレイ兄いがバケモンな訳ない！！！！」

レ「で、ですが・・・」

は「ですがもへちまも無い！！！！

レイ兄いはバケモンやない、

それが事実や、それ以外は認めへん！！

次そんな事言ったら絶対に許さへんで！！！！！！」

主は最後涙ぐみながらそう訴えた、

奴も「わ、分かりました」と言っつて事態は収集した、

レ「・・・、まあ、話を聞いた通り私は人間ではありません、

そうですね、吸血鬼の文字通り「血を吸う鬼」と言っつた方が分かりやすいですかね？」

シ「血を吸う鬼」だと？」

レ「はい、相手の血を吸って自分の力にしたり、

相手を下僕として使役したりと出来る奴等の総称ですね、

加えて力が非常に強く、寿命も永い、頭や心臓を吹き飛ばさない限り死にませんし、

さらに吸い殺した命の分だけ命のストックが増える、

まさしく化もー「レイ兄い？」ゴホンツゴホンツ、まあ、

そういう種族なんですよ」

会話の途中、主はやてがもの凄く怖くなっていたが気にしないでおこつ、

それにしても、随分と凄い種族だな、

頭や心臓を吹き飛ばさない限り死なず、命のストックまであるとは、正に化物と言つ言葉が相応しい奴等だな、

は「シグナム？何かオカシナ事考えてへんか？」

《ビクッ》

シ「い、いえ、そんな事は考えておりません！」

は「そうか？でも……………」

次はあらへんよ？」

主はやてが満面の笑みで、それはもう凄い笑顔で言い、
背後にはどす黒いオーラが漏れていた・・・
危うく死ぬところだった・・・

シ「つ、つまり、お前もその・・・

そういう種族なのだな？」

私は何とか話しを戻す、

奴も主はやてのオーラを感じ取ったのか話しを続けてくれた、
瘴気？
この時ばかりは感謝しよう、

レ「そうですね、まあ私の場合は不老不死ですけどね」

シャ「不老不死ですか!？」

参謀役であり治療専門のシャマルが驚いた、

レ「ええ、先程の吸血鬼は【贗血鬼】と呼ばれる者でしてね、

言つてしまえば出来損ない、雑種と言つた具合ですね、
ですが私は【真祖の吸血鬼】と呼ばれる者で、
純粋な吸血鬼なんですよ、

それで不老長寿ではなくちゃんとした不老不死なんですよ、
ちなみに私は約1800年は生きています」

シャ「・・・随分と出鱈目な話しですね、にわかには信じられませ
ん」

レ「まあそうでしょうね、では証拠を見せましょう」

そう言つて奴は自分の指を噛みだした、
指からは血が出ていたが、すぐに治り傷は跡形もなく消えた、

レ「これで信じていただけたでしょうか？」

シ「全てでは無いが一応信じよう、

次だ、あの夜、黒い何かからベットをだしてたな、
あれは一体なんだ？」

レ「あれですか？あれは【影の宝物庫】と言ひまして、
いろんな物を仕舞つておける能力です、
ついでに私の能力を全部教えましょう、
はやてにも言つていなかつたし良い機会です、
まず先程言つた【影の宝物庫】ですが、
あれの他にも影から影へと渡る【影渡り】

影に質量を持たせる【影の尖兵】

機械類のハッキング、書物の解析をする【隠者の賢者】

影に入った者を喰らう【深影の晚餐】

この5つの能力を総じて【影の王】と言います、

これが私の能力の1つです」

ヴィ「ちょっと待てよ！

それで全部じゃねえのかよ!?!」

今まで会話に参加しなかったヴィータが声をあげる、
確かにこれで全てじゃないとは私も驚きを隠せない、

レ「何故そんなに能力を持っているのかは後で話します、

次に、視た者の精神に侵入する【精侵の魔眼】

体を蝙蝠に変える【無限の夜羽】

大概の事はできる【有償の奇跡】

あとは肉体年齢を変える能力ですかね」

《キラーン》

急に主はやての目が輝きだしたが気にしたらイケナイ気がするので
気にしないでおこう、

シ「それがお前の能力なのだな？」

レ「まあ最後にとてつもなく危ない能力がありますが、
それで全てですね」

シ「そのとてつもなく危ない能力が気になるが聞かないでおこう、
先程お前は「何故そんなに能力を持っているのかは後で話し
ます」

と言ったな、それを話してもらおう」

レ「分かりました、と言っても簡単な話ですよ、

吸血鬼の中には稀にこういう能力を持った者が生まれます、
私はある時一族と対立しましてね、

その時一族全てを喰らいその能力を奪った、
それだけですよ」

シ「対立？何があったんだ？」

レ「・・・単純にソリが合わなかった、生き方の違いですね」

なるほど・・・

奴を見ると大方の事は分かった、

奴・・・レイの生き方は一族の中でひどく異端だったに違いない、
それを一族は許さなかったのだろう、

シ「そうか・・・」

お前がどういった存在なのかは理解できた、
最後に・・・・・・・・」

レイの事はよく分かった、
だがこれだけは聞かなければいけない、

シ「お前は主はやての何だ？」

レ「私ははやての家族です、

こんな私を受け入れてくれた掛け替えのない人です、
もしはやてに危害を加えるなら例え時空管理局でも私は潰しま
す」

シ「!？」

レイは私の目を見据えて即答した、
レイの眼は綺麗な金色の瞳だった、
そして神秘的な美しさを持つ顔、
絶対的な意思の強さ、
その姿に思わず見惚れてしまった、
何故か胸がドキドキする、
何なんだ？この気持ちは？

シ「そ、そうか・・・」

その言葉を聞けば充分だ、
改めてよろしく頼む」

レ「こちらこそ、よろしくお願いします」

シ「／／／／／」

そ、そんな笑顔で私を見るな！

さっきから胸のドキドキが止まらないんだ！！

シャ「あらあらあら」

シャマル、お前は何故楽しそうの笑っている！？

ヴィ「何で顔真っ赤なんだよ？シグナム」

ヴィータ！お前はストレート過ぎるぞ！！

は「ふふふ、ええ雰囲気やな」シグナム？」

主はやて、笑いながら黒いオーラを出すのはやめて下さい!!
ザフィーラは!?最後の頼みの綱、ザフィーラに何とか・・・

ザ「ズズツ・・・やはり落ち着くな・・・」

何故茶を啜っているんだあああああ!!!!

シグナムは心の中で赤い涙を流し、叫んだ、
ちなみにこの孤立無援の戦場から開放されたのは30分後だった・・・

第8話 説明（後書き）

と言う事でシグナムのフラグを早速たてました、

ザフィーラもどんどん目立たせましょう、

そう言えば読者の皆様に質問なんです、

この小説にとら八の設定入れますか？

勿論私はとら八をよく知らないのでwikiを見ながらもグダグダな感じになります

それでも吸血鬼同士の月村との絡み等が見たいのであれば言った下

さい、

頑張って書きますので、

要望受け付け期間は5月中です、

それでは皆さんまた来週（＾－＾）ノ

第9話 また翠屋にて（前書き）

どうしょー!!!

ペースが、ペースがとても遅くなってきたー!!!

誰か私に文才を！インスピレーションを下さい!!!!

第9話 また翠屋にて

レイ視点

ふう、長い説明もようやく終わりました、説明が終わったあとシグナムさんがヤツれていましたがどうしたんですでしょうか？

ちよつとヒドイようですが今は放っておきましょう、なにせ今日は大事な行事がありますからね、

レ「さて、お互いの説明も終わりましたし、

はやての誕生日パーティをやりましょう!」

私はそう言つとある事を思い出した、

レ「そう言えば4人は日付が変わった・・・

つまり今日あの本から出て来たんですよね?はやて」

は「そうやで、どうしたんやレイ兄い?」

レ「つまりです、シグナムさん達ははやてを守る為、家に住む事になる、

つまりシグナムさん達は新しい家族になると言う事です、

そしてシグナムさん達は今日目覚めた、即ち誕生したと同じ事、ならば家族として4人の誕生日パーティをするのは当然の事です、

はやても含めて5人の誕生日パーティをやりましょう!!」

は「おお！それはいいアイデアやな!!」

よし、はやても乗り気ですし、早速準備に取り掛かりましょう、取り合えず料理の材料の買い出しと、ケーキも全然足りないので翠屋で追加購入しましょう、あ、大事な事を忘れていました、

レ「皆さん誕生日プレゼントで何が欲しいですか？」

誕生日といったら誕生日プレゼントしかありません、

シ「い、いえ、私は大丈夫ですので」

シャ「この世界に何があるのか分からない以上決めようがありませんね」

ザ「確かにそうだな」

そうですね、4人はこの世界に初めて来たんだから何があるのか分かりませんよね、

レ「そうですね、ならあとで欲しい物ができた時に教えてください、

買える範囲で買いますので」

本当は今日買ってあげたかったんですが、残念ながら仕方ありませんね、

レ「そうだ、それなら今渡しちゃいましょう」

私は【影の宝物庫】から紙袋を取り出しはやてに渡す、

レ「お誕生日おめでとございます、はやて」

中身は昨日「といざるす」で買ったはやて・・・もとい可愛らしいためきのぬいぐるみ、

は「わぁ！！可愛らしいぬいぐるみやな〜

ありがとなレイ兄い！！！！」

はやてはぬいぐるみを抱きしめ、とても嬉しそうに笑った、
これで買ったかいがあると言う物です、

レ「そう言えばそのぬいぐるみの隣にとても気になったウサギのぬいぐるみも買ったんですがいらいますか？」

私はそう言うってはやてに口が縫い付けられたウサギのぬいぐるみを見せる、

は「うーん、申し訳ないんやけどそれは遠慮しとくわ」

あら、はやてに拒まれてしまいました、

確かにデザインも独特ですし、あまりも可愛いとは言えない感じですからね、

さて、どうしますかね？適当にリビングにでも飾っておきますか．．

ヴィ「．．．．．」

そんな事を考えているとヴィータさんの視線を感じた、視線の先は目下どうするか考え中のウサギのぬいぐるみ、私は試しにぬいぐるみを上にあげると．．．

ヴィ「あ．．．．．」

ぬいぐるみから離れて残念そうな、寂しげな表情をするヴィータさん、

どうやらこのぬいぐるみが気に入ったみたいですね、

私はぬいぐるみをヴィータさんの目の前に出し・・・

レ「よかったら差し上げますよ」

と言う、するとヴィータさんは、

ヴィ「ほ、ホントにいいのか？」

若干、戸惑っていましたが、

その目には期待の色一色に輝いていました、

レ「ええ、勿論です、是非貰って下さい」

私のそう言っでぬいぐるみをヴィータさんに差し出す、

ヴィータさんはゆっくりとぬいぐるみを掴み、優しく抱き締めると

・・・

ヴィ「あ、ありがとう!」

まるで花が咲いた様に満開の笑顔になった、

そういえばヴィータさんが笑ったところ見た事なかったですね、

レ「ふふ、ようやく笑ってくれまたね」

ヴィ「う……………」

私の言葉を聞いた瞬間、気まずい顔になるヴィータさん、どうしたんでしょうか？

ヴィ「その……ゴメンな、

色々…………警戒したり…………ヒドイ態度とって…………」

レ「なんだそんな事ですか」

ヴィ「え？」

ヴィータさんは私の言葉を聞いてキョトンとする、

レ「いいんですよそんな事、

ヴィータさんの行動は主を守る騎士として当然の事です、

それだけヴィータさんは主の事を想っている優しい子なんです
「よ

私はそう言っつてヴィータさんを慰める、

ヴィータさんの頭の位置が丁度良かったのでつい頭を撫でてしまいました、

ヴィ「あ、頭を撫でるな!!」

それにあたしは子供じゃねえ!!」

レ「ははは、1800年生きた私にしたら皆んな子供みたいなものですよ」

そう言いながら私は頭を撫でるのをやめない、

ヴィ「な、なら頭を撫でるのをやめろ!!」

なんでさっきから撫でてるんだよ?」

そう言いながらヴィータさんは私の手を振りほどこうとしない、
まったく、素直じゃないですねヴィータさんは

レ「うん、そこに頭があるからですか?」

ヴィ「なんで疑問文なんだよ!

納得させたかったらもっとマシな理由を言え!!」

おや、なんか論点がずれて来ましたね、
納得させたらこのまま撫でてもいいと言っ事なのでしょうか?

レ「じゃあ本当の事を言いますよ、」

ヴィータさんの髪はサラサラしてて撫で心地も良いですし、
いい香りなんですよね、

なんて言うんでしょう・・・

お日様の香り？と言うんでしょうかね？」

ヴィ「なっ・・・なな・・・」

ヴィータさんは一瞬で顔が真っ赤になり、

頭から《ポンツ》と音をたてて頂垂れてしまいました、

は「ふふふふふ、レイ兄い、フラグ建築に忙しそうやな」

朝から2人も落とすなんて」

・・・絶好調やな、レイ兄い？」

《ビクツ！！！》

あれ？はやてから黒い何かを感じるんですが・・・

しかも目が全く笑っていません、

背中からイヤな汗が溢れ出てきました、

は「これはちょっと仕置きが必要かもしれんー」

レ「そうでした！このままではケーキが足りないのでちょっと買っ
てきますねー！」

こういう時は逃げるに限ります、
私ははやての言葉を切り、そのまま外へ買^{退却}い物に出かけた、

シヤマル視点

レ「そうでした！このままではケーキが足りないのでちょっと買っ
てきますね！！」

そう言つてレイ君はそそくさと外へ逃げていきました、
ふふふ、それにしても不思議な方でしたね、

最初は私達の正体に気付いた時は驚きましたし、
不老不死なんて言つた時は信じられなかったけど、
主のはやてちゃんにとても慕われてましたし、
ザフィーラとも仲良くなつて、

しかもあのシグナムとヴィータちゃんの反応、
シグナムはさつきからヴィータちゃんのことを見ながら、

シ「・・・いかんいかん！何を考えているのだ！！」

なんて急に頭を振り出してちょっと顔が赤くなっていたり、
ヴィータちゃんに至っては、

ヴィ「あ、あう、うう・・・」

レイ君に言われてからずっと顔を真っ赤にして・・・

《ポンツ》

あ、また頭から煙が出てきました、

長い間2人と一緒にいたけど、

こんな2人、今まで見たことありません、

まあ、今までの主達と随分違う対応でしたし、

無理もありませんか、

そんな事を考えていると・・・

は「なあシャマル、ちょっとお願いがあるんやけど」

はやてちゃんをお願いをしてきました、

背後に黒いオーラを出しながら・・・

シャ「なんですか？はやてちゃん」

は「うんとな、さっきからレイ兄いのこと見とったんやけど、

レイ兄いはちょっとオイタが過ぎるんと思っんよ」

シャ「は、はい・・・」

は「それでな、レイ兄いにはちょっと仕置きが必要なんやと思うんや」

シャ「仕置き……ですか……」

は「そうや、でな、その仕置きをシャマルに手伝って欲しいんよ」

シャ「わ、私ですか？」

は「今んとこフラグが立ってないんはシャマルだけやし、

ザフィーラは男やから出来ないんよ」

なんでしよう？

は「やてちゃんのお仕置きには性別が関係あるんでしょうか？」

シャ「それでその……お仕置きって何をするんですか？」

は「それはな……」

は「やてちゃんは私の耳元でお仕置きの内容を話した、それを聞いた私は……」

シャ「それは面白いですね！」

は「やてちゃん、その計画是非私も参加させて下さい……」

すぐさま計画に賛同しました、
私とはやてちゃんは早速計画の準備を始めました、
ふふふ、とても面白い内容ですね、
今から楽しみですよ、

その頃ザフィーラは・・・

ザ「ズズツ・・・強く生きる、レイ」

まだ茶を啜っていた・・・
急速に老けていくザフィーラであった、

《ブルツ！！》

なんででしょう？途轍もなくイヤな・・・
物凄い悪巧みが絶賛進行中の予感がしました、
しかも絶対に回避できないような感じがします、
この気配から察すると、おそらく、はやてが企てていますね、

.....

ふう、仕方ありません、諦めましょう・・・
まあ、なる様になるでしょう、

．．．なりますよね？

取り合えずこの問題は置いておきましょう、
今は先ず誕生パーティーの買い出しをしなければ、
食材はスーパーではなく、八百屋など別々に売っている所の方が新鮮で良い食材が売っているんですよ、
野菜と果物、あと鶏肉も買って．．．

そつだ！ついでに魚屋でお刺身も買しましょう、

皆さん和食も普通に食べていましたし、

お刺身も大丈夫でしょう、

シグナムさんが一番喜びそうですね、

そうして食材の買い出しは終わりました、

買った食材は【影の宝物庫】の中に入れましょう、

宝物庫の中は時間が止まっているので新鮮な食材はいつでも新鮮なままです、

うん、まさに一家に一台欲しいぐらいの素晴らしい能力ですね、

後は翠屋でケーキを買って．．．

そう言えば翠屋はシュークリームがとても美味しいんですよ、
それも買しましょう、

うん、全部買えますかね？

取り敢えず翠屋に向かいますが、

美由紀視点

美「~~~~」

今日はレイさんが来る日だ、
ケーキを取りに来るだけなんだけどレイさんに会えると思っただけで嬉しくなってきたちゃう、

桃「うふふ、美由紀は楽しそうね、
美由紀にも恋の訪れが来たのかしら？」

美「お、お母さん！私とレイさんはそんなんじゃない．．．」

桃「あら、私はレイ君となんて一言も言っていないわよ？」

美「そ、それは．．．むゝゝゝ！」

つい墓穴を掘ってしまい恥ずかしさで顔が赤くなるのが分かる、

な「にやはははは、お姉ちゃん顔真っ赤なの」

妹のなのはまで私をからかって来る、

美「な、なのはまでゝゝゝ！」

確かにレイさんは綺麗で強いけど、
それは憧れであって恋とかじゃないんだから．．．

あれ？なんで胸がチクツと痛くなったんだろう？
そんな事を考えていると・・・

《カランコロン》

お店のドアが開く音が聞こえた、
振り返るとそこには・・・

レ「こんにちは、皆さん」

来るのを楽しみに待っていたレイさんだった・・・

《ドクン》

どうしよう・・・

レイさんに会った途端胸がドクンドクン言ってるよ、
あ、レイさんも私の事を見て心配そうな顔してる、
ま、まずは挨拶をしなきゃ・・・

美「い、いらひやいませレイちゃん!!」

「」「」
「」「」
「」「」

お店の時間が止まった．．．
どうしよう、噛んじゃったよ〜
それも盛大に、しかも大声で、
なのはと母さんは溜息を吐いていた、
う〜！穴があつたら入りたい！！
それでもレイさんは気にせず、

レ「こんにちは、美由紀さん」

笑顔で手を振ってくれた、
やっぱりレイさんは優しいな〜

桃「こんにちはレイ君、もうケーキはできているわよ」

そうだった．．．
レイさんは予約したケーキを取りに来ただけですぐに帰っちゃった、
だった、

レ「ありがとうございます桃子さん、
ついでにちょっとお願いがあるんですけど．．．」

そう言ってレイさんは気まずそうな顔をした、

桃「何かしら？」

レ「実は今日の朝に親戚がやって来ましてね、

急遽ケーキが必要になりました、

それとこのお店はシュークリームがとても美味しいと聞きましてね、

ついでにシュークリームも頂きたいんですが大丈夫ですか？」

それはつまりレイさんはケーキとシュークリームが出来るまでお店にいるということ、

レイさんと少しだけ一緒にいられるということだ、

私もお母さんをお願いの眼差しを向ける、
するとお母さんは・・・

桃「ええ、それ位大丈夫よ、

ちよっと待っててね、今から作っちゃうから」

私の視線に気付いたのか引き受けてくれた、

レ「重ね重ねありがとうございます」

やった！これでレイさんと少しだけ一緒にいられる！！

美「良かったですねレイさん」

レ「ええ、これで妹も皆さんも喜んでくれるでしょう」

そう言っつてレイさんは本当に嬉しそうな顔をした、

美「家族思いなんですね、レイさんは」

レ「そうですね、ここに来る前まで色々な事がありましたからね」

レイさんはそう言っつて遠くを見つめた、

まるで今までの事を思い出しているかの様に、

心なしかレイさんの表情は少し寂しげで、

その寂しさをどこかで諦めて受け入れている感じだった、

レ「それでも、私達は家族になった、

確かに血は繋がってませんが、

私には掛け替えのない大切な家族ですよ」

表情が一転してレイさんはとても嬉しそうな表情をした、

その表情は寂しさという憑き物が取れたかの様にとても晴れやかな表情だった、

その時と同時に窓から日差しが差し込み、

その表情はとても神々しくてまるで一枚の絵画を切り抜いたかの様

だった、

美「／／／／／」

その表情を見て思わず見惚れてしまった、

レ「どうしたんですか美由紀さん？」

どうやらレイさんの顔をずっと見ていた様で、
レイさんが不思議そうに聞いてきた、

美「な、何でもありません！」

まさかレイさんに見惚れてたなんて言えず慌てて誤魔化す、

美「そ、それじゃあ私はもう戻りますね！」

私はそう言って逃げる様に厨房へ向かった、
うゝ、絶対変に思われたよゝゝゝ
厨房に戻るとお母さんが・・・

桃「うふふ、レイ君とのお喋りは楽しかったかしら？」

とても楽しそうな顔で出迎えた、

美「お、お母さん！茶化さないでよ！もう」

桃「あら、ごめんなさいね」

そう言いながらもお母さんの顔は笑ったままだった、
まったくお母さんったら！！

桃「そうだ、丁度レイ君のケーキとシュークリームができた所だから、
美由紀持って行ってくれるかしら？」

お母さんはそんな私の思いを気にせずに、
箱に入れたケーキとシュークリームを私に渡した、
あんな事があつたから恥ずかしかったけど、
私はお母さんの気遣いに感謝して、
箱を受け取りレイさんの所へ向かった、
戻るとレイさんはいつもと変わらず客席に座り、
窓の向こうをずっと見ていた、
その顔はとても幸せそうで、
すごく穏やかな顔だった、

《ドクン、ドクン、ドクン》

その顔を見ていたら思わず胸が高鳴った、

思えば最初の出会いは偶然の様なものだった、

ナンパに絡まれてた私を偶然通りかかったレイさんが助けてくれた、
その姿はまるで御伽噺に出てくる王子やナイトの様だった、

強さは武道をやっている私が足元にも及ばない程の実力、

そしてその顔はとても神秘的な顔立ちでとても綺麗だった、

だけどそれ以上に気になったのが時折りレイさんが見せる表情だ、

時にはとても寂しそうにして昔を思い出すような顔をして、

時には幸せなこの時間を噛み締めるかのように、

普通の人なら特に気にする表情ではないのに何故かレイさんのは他の人とは違うような気がする、

まるで長い間そうしてきた様に、長い間待ち望んでいたみたいに、

どうしてレイさんはそんな表情をするんだろう？

そんな事を考えていると・・・

美「・・・・・・・・あ」

床に躓いてしまった、

手に持っていた箱が宙に浮き

視界がゆっくりと傾きながら床が目の前に迫って来た、

私は今から来る衝撃に目を瞑ったが・・・

《ポスツ》

来た衝撃はとても静かなものだった、
何が起こったのか分からず目を開けてみると・・・

美「レイ・・・さん？」

私を抱き抱えているレイさんがいた、

レ「大丈夫でしたか？美由紀さん」

レイさんは心配そうに私の顔を覗き込んでくる、

美「はい、大丈夫・・・そ、そうだ！

ケーキは！？シユークリームは！？」

私は慌てて放り投げてしまった箱を探す、
探してた箱はすぐに見つかったが・・・

美「あ・・・」

箱は床に落ちて無惨にもグチャグチャになり、
中身は箱から飛び出してとてもじゃないが食べられるものではなく
なった、

美「ヒック．．．ウツ．．．エック．．．」

それを見た瞬間目から涙が零れた、
お母さんの料理を駄目にしたのもそうだし、
皆んなの前で恥ずかしい事をしたのもそうだけど、
何より1番悲しくて悔しかったのがレイさんが楽しみに待っていた
のにそれを台無しにしてしまった事だった、

レイさんを悲しませてしまった、レイさんに嫌われてしまった、
あんなに嬉しそうな顔を私が台無しにしてしまった、
そんな考えが頭を駆け巡り涙がどんどん出てきた、

美「ごめ．．．なさい．．．レイさん．．．が．．．
楽しみに．．．してたのに．．．」

私は泣きながらレイさんに謝った、
するとレイさんは．．．

レ「そんな事はどうでもいいんですよ」

そう言って私の頭を手をおいた、

美「ヒック．．．．え？」

レ「ケーキ達は後で作り直してもらえば済む話です、

美由紀さんがそんな事を気にする必要なんてないんですよ」

美「で、でも！」

レ「はい、この話はこれでお終い、

美由紀さんが何ともなくて良かったです」

そう言ってレイさんは私の頭を撫でた、

レイさんの手はとても暖かくて気持ちよかった、
するとそこへ．．．．．

士「皆んなただい．．．ま？」

恭「今帰った．．．ぞ？」

お父さんと恭ちゃんが帰ってきた、

2人は私達を見た瞬間に動きを止めた、
次第に2人の目から光が消え、2人はレイさんに飛びかかってきた、

士「レエエエ君！！君という奴はああああ！！！！」

恭「今度こそ！！今度こそ仕留めてやるううう！！」

《グイッ》

それをいつ厨房から出て来たのかお母さんが2人の首を掴んだ、

桃「あゝらあらあらあゝ 折角良い雰囲気だったのにお邪魔虫が入って来ちゃったわね」

士「ま、待ってくれ母さん！！私の、私の話を・・・」

恭「そ、そうだ！レイだけは、レイだけは仕留めなきゃ・・・」

桃「うふふふふ」

お母さんは笑いながら2人を奥へと連れて行った、

「「ぎゃあああああああ！！！！」」

翠屋に2人の断末魔が響いた・・・

お母さんの“おはなし”が終わった後、作り直したケーキとシュークリームをレイさんに渡してお店の外に出た、

美「本当に今日はすいませんでした」

レ「だからその事は気にしなくていいと言ったじゃないですか」

私の言葉に呆れた様子で返してくる、

美「で、でも・・・」

レ「それに、こういう時は謝るんじゃないかって“ありがとう”と言っ
のですよ」

美「はい、ありがとう・・・ごめいます」

だめだ、また涙が出てきちゃうよ、

レ「いいえ、どういたしまして」

そう言ってまた私の頭を撫でてくれた、
はう~~~~ノノノ恥ずかしいよ~~~~ノノノノノ

レ「それでは私は帰りますね、

ケーキとシュークリームありがとうごめいます」

そうしてレイさんは家へと帰っていった、

やっぱりレイさんは素敵な人だ、

レイさんの事を思うだけで胸がドキドキしてきた、

さっきは恋じゃないって否定したけど、

やっぱりこれが恋なのかな？

もしこの気持ちが悪かったら嬉しいな、

よく初恋は実らないって言うけど私は絶対に実らせるぞ！！

私はレイさんの背中を見ながら密かに決意した。

第9話 また翠屋にて（後書き）

ふゝ疲れたゝ

すみません、なのはが空気になってしまいました、

それにしても何で美由紀のフラグを立ててしまったんでしょうか：

まあなんとかなるでしょう、

話が変わりますが、来週は話を投稿できません、

今日から修学旅行が始まるので話を書く時間がありませんよ、

読者の皆様には申し訳ありませんが何卒ご理解お願い致します、

それでは皆さん再来週に会いましょう

第10話 誕生日（前書き）

待っていた人も特に待っていなかった人もお待たせしました
先々週ぶりの投稿です、
楽しんで読んで下さい

第10話 誕生日

レイ視点

レ「ただいま帰りました」

食材の買い出しも終わったので私は家に帰りました、

は「おかえり〜レイ兄い〜」

シャ「おかえりなさいレイ君」

ドアを開けると車椅子を押しているシャルルさんとそれに乗っているはやてが笑顔で出迎えてくれました、

レ「おお、2人とももうそんなに仲良くなっただんですか」

は「まあな〜」

シャ「ええ、とっても仲良くなりました」

私の言葉に含みのある笑顔で返す2人、
成る程、家を出た時に感じた悪寒の正体は2人だったんですね、

レ「……………そうですね、
それは良かったですね」

うん、ここは気にしない方がいいですね、

レ「そうだ、食材も買い終わりましたし、
早速パーティーの準備をしましょう」

私は会話を適当に流してはやたとシャマルさんと一緒にリビングに戻りました、
リビングに戻ると、

ザ「帰ってきたか」

相変わらず落ち着いた様子のザフィーラさんと、

シ「レ、レイか、帰ってきたのか……」

若干慌てているシグナムさん、

ヴィ「お、おかえり……」

今朝あげたぬいぐるみを大事に抱き締めて、
テクテクとまるで小動物の様に歩いてきて私の顔を見上げるヴィー
タさん、

レ「ええ、ただいまヴィータさん」

その様子が可愛らしくて私は思わず頭を撫でてしまいました、

ヴィ「えへへ／＼／＼／＼」

ヴィータさんは顔を赤らめながらも嬉しそうに笑って頭をこちらに
向けてくれました、

は「レ・イ・兄・い？」

パーティーの準備をするんやなかったんか？」

《ビクッ！！》

ヴィータさんの頭を撫でていると突如はやてが黒いオーラを放出し
ていました、

レ「そ、そうでしたね、

皆さんも待っていますしサツサと準備しますか」

私はヴィータさんの頭から手を離すと、

ヴィ「あ……………」

ヴィータさんが寂しげな声をあげていましたが、
私ははやてと一緒にキッチンへ向かいました、

ヴィータ視点

レ「そ、そうでしたね、

皆さんも待っていますしサツサと準備しますか」

そう言ってレイの奴はキッチンへ行っちまった、

ヴィ「……………」

あたしはその後ろ姿を見つめながらさつき撫でられた頭を触った、

ヴィ「えへ／＼えへ／＼／」

頭にはまだアイツの温もりが残ってて思わず抜けた声が出ちまった、
胸がポカポカして幸せな気持ちに浸っていると・・・

シ「ヴィータ、そんなだらしのない声を出すな」

シグナムが邪魔してきやがった、

ヴィ「なんだよシグナム」

シ「騎士たるもの、そんなにやけた表情でどうするのだ」

ヴィ「うっせー！いいじゃんかよ別に！！」

それでもシグナムはあたしに向ける視線を緩めない、
どこことなく羨ましそうな・・・そう言う事が、

ヴィ「ハハ~~~~ン成る程、

シグナムはあたしにヤキモチ妬いてるんだ」

シ「な、なな、何を！！」

そんなに慌てて、凶星だぜシグナム

ヴィ「まさか烈火の将がヤキモチとはな〜

しかもあたしが頭を撫でられただけで妬くなんて」

シ「ぐっ．．．うぬぬ．．．」

ヴィ「まあシグナムはアイツに握手しかされてないから妬いても仕方ねえか」

そう言っただけは胸を張って勝ち誇った、

今胸がペタンコだと思っただ奴、

あたしのグラーファイゼンで叩き潰して、グチャグチャにすり潰してミンチにした後、

の にブチ込んでやる、

そんな事を考えてるとシグナムが．．．

シ「ふ、ふん、お前の場合は小さくて子供としか見られなかったんじゃないのか？」

そんな事を言ってきた．．．

ヴィ「どう言う事だよ？シグナム」

シ「そのままの意味だ、レイはお前の事を子供だと思っているからあんな対応をしているんじゃないのか？」

ヴィ「うっせー！！あたしはれっきとした大人だ！！」

シ「ふっ、そんな小さくしては説得力ゼロだな」

ヴィ「……言いやがったなシグナム」

あたしは待機状態のグラーフアイゼンを握り締めた、

シ「ああ、何度でも言ってるさ」

シグナムも待機状態のレヴァンティンを手にとった、

ヴィ「いい機会だ、ここで白黒つけてやる」

シ「奇遇だな、私もそう思っていたところだ」

どうやらシグナムもヤル気らしいな、

まだはやてから騎士甲冑を作って貰ってないけどどこかでケリをつけてやる、

お互いに踏み出そうとした時……

は「みんなお待ちせよ」

レ「お待ちせしました」

はやてとレイが戻ってきた、

レ「おや？どうしたんですか2人とも」

ヴィ「・・・なんでもねえ」

シ「別になんでもない」

レ「そうですか、あまり喧嘩をしてはいけませんよ？

2人とも仲良くしないと」

「グッ！」「」

なんだよ、結局全部知ってんじゃないかねえか

ヴィ「・・・分かったよ」

あたしはぶっきらぼうに返事を返す

レ「うん、素直でよろしい」

それでもレイは笑顔で応えた

何でなんだよ、なんでアイツの笑顔を見ただけで胸がポカポカしてくるんだろ？

この時まだヴィータは自分がレイを抱いてる感情を知らないでいた、長い間戦いの時を生きてきた彼女には“愛情”と言うものがまだ分からないでいたのだった、

ヴィータ視点終了

レイ視点

よし、料理の準備も出来ましたし始めますか、

レ「皆さん、準備が出来たので座ってください」

そうして皆さんが集まったんですが・・・

ザ「レイよ、この人数では皆が座れないぞ」

そうでした・・・

テーブルの定員数は4人、いつもはやてと2人きりだったので失念してました、

ザ「このままでは2人余るがどうするのだ？」

私は別にどこでもいいが」

勿論このままにさせるわけがありません、

レ「ちょっと失礼します」

私は【影の宝物庫】を開き元あったテーブルを仕舞い新たなテーブルを出しました、

出したのは6人が丁度座れる長テーブル、それと人数分の椅子

レ「これで皆んな座れますよ」

シャ「レイ君は本当になんでもありませんね」

シャマルさんの言葉と同時に皆んなが溜息を吐いた、何ですか？

は「本当にレイ兄いは色んなモン持つとるな」

ピンクのドアや大っきくなるライトとか持つとるんやないか？」

レ「私は22世紀の猫型ロボットではありませんよ」

は「それじゃあ人類最古の英雄王か？」

レ「私は“我”^{オレ}ではありませんし宝具も持っていません」

は「レイ兄以外と知つとるなあ」

レ「日本のアニメは大好きですからね」

そんな会話をしながら私達は席に着きました

シャ「それにしても立派なテーブルですね」

席に着いたと同時にシャルさんが感嘆の声を漏らす

テーブルの表面は艶やかに輝き、

角や隅には細かい金細工が施されていますが決して派手という訳で

はなくまた質素な訳でもない、

分かり易く言うなら豪華ではなく上品と言つところですか、

そのお陰ではやての家にも見事にマッチしています

レ「まあ私のお気に入りですからね」

は「へ〜レイ兄いのお気に入りなんか〜」

どこでこんな手に入れたんか？」

レ「確かエリザベス1世に貰ったんですよね」

は「こ．．．これまた凄い名前が出てきよったな、

そんなエライもん使ってええんか？」

レ「こついう時にこそ使っんですよ、

使わない物なんてゴミと同んなじです、

ならこつして使ってあげなくちゃ」

は「そうか．．．それもそうやな！」

レ「では、はやての誕生日とシグナムさんシャマルさんヴィータさんザフィーラさんの誕生日を祝って．．．」

皆んなでグラスを高くあげて．．．

レ「お誕生日おめでとつございます！！」

5人の誕生パーティーが幕をあげた

ヴィ「はやての料理はギガうまだな」

そう言いながら料理を箸で串刺しにして口に運ぶヴィータさん

レ「あゝこらこら、そんな箸の使い方はやめなさい」

ヴィ「いいんだよ、細けえ事は」

レ「そう言う訳にもいきません、

ほら、まず箸を1本だけとって親指の付け根と薬指の上に乗せて挟んで」

ヴィ「お、おう」

レ「もう1本を人差し指と中指の間、そして親指の先で挟んで」

ヴィ「うん」

レ「最初に挟んだ方は動かさず後に挟んだ方で開く・閉じるの動作をすれば・・・」

ヴィ「お~~~~！出来た！！」

ヴィータさんは目を輝かせ箸を動かした

レ「これで大丈夫ですね」

ヴィ「おう！！ありがとな！！」

それからヴィータさんはどんどんご飯を平らげ・・・

ヴィ「おかわり！」

おかわりをしたり……………

は「そう言えばどうしてエリザベス一世からテーブルを買ったんや？」

レ「当時彼女の相談役でしてね、その時に買ったんですよ」

は「相談役か、それは凄いな」

ちなみにどれくらい価値があるんや？」

レ「うん、軽く億はいきますね」

は「お、億か……………」

やっぱりレイ兄いはぶっ飛んどるな」

はやてに呆れられたり……………

シ「ほお、刺身か」

レ「お刺身を知っているんですか？」

シ「我等がいた世界のベルカにも同じ料理があったのでな」

レ「そうだったんですか、

道理で箸の使い方が上手いなと・・・
あれ？じゃあなんでヴィータさんは・・・」

シ「ヴィータは“子供”だから仕方ない」

ヴィ「うっせー！！あたしは子供じゃねええ！！！」

シグナムさんとヴィータさんが一触即発の状態になったり・・・

シャ「はやてちゃんは料理が上手ね」

最初からこんなに上手かったの？」

は「そんな事あらへんよ、

いつも作ってたから自然に腕が上がっただけや」

シャ「そうなんですか、

今度私も作ってみようかしら」

は「シヤマル料理出来るんか？」

シャ「ええ、はやてちゃん程ではないけれど」

は「そうか、今度一緒に作らへん？」

シャ「ええ、是非！」

() () シヤマルが料理したとこ見た事無い () () b ヲヴォルケン

はやてとシャマルさんが料理を作る約束をしたりと、とても楽しい一時になりました、

ザ「ところでレイよ」

レ「なんですか？ザフィーラさん」

ザ「どうして皆にさん付で呼ぶのだ？」

レ「ああ、これは癖みたいなものですね、
それにあまり馴れ馴れしいのも・・・」

シ「そんな事、気にする事はない」

レ「シグナム・・・さん」

シ「それに先程お前は言ったではないか、

“私達は家族”だと、

家族にさん付けは可笑しいんじゃないのか？」

レ「家族・・・家族・・・

そう・・・ですよね！

家族ですもんね！私達は！！」

そう言ってシグナムさんの手を握った

シ「ひゃ！」

シグナムさんが可愛らしい声をあげましたが、そのまま続けて・・・

レ「まさか4人も新しい家族が出来るなんて、

今日はなんて素晴らしい日なんでしょう!!！」

シグナムさんの手を振った、

レ「ではこれからは呼び捨てでも良いんですか？」

ヴィ「ああ良いぜ」

シャ「大丈夫ですよ」

ザ「勿論だ」

シ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

あれ？シグナムさんだけ反応が・・・

レ「シグナムさん？」

シ「ん？あ、ああ!?!どうしたんだ!?!」

レ「その、呼び捨てで呼んで良いのかと言う話なんですけど」

シ「あ、ああ大丈夫だ、好きに呼んでくれ」

レ「ありがとうございます!!」

私は満面の笑みを浮かべた、

嬉しかった、まさか家族がこんなに増えるなんて、

私が永い間待ち望んでいたものが、

はやてだけでも充分だったのにこんなに沢山の家族が出来るなんて、

思わず夢なのかと疑う程だったが、

これは間違いなく現実だった、

私はみんなを見て・・・

レ「これから宜しく願います」

頭を下げた、

涙が出そうでしたが何とか堪えました、

こうして楽しい楽しい誕生パーティーは幕を閉じました

だが、

世界はそんなに優しくはない、

レイはまだそれを知らないでいた、

いや、あまりの幸せに気付かないでいたのだ、

は（いくでシャマル）

シャ（はい、はやてちゃん）

2人の悪巧みは着実にレイに忍び寄ってきた

（（今こそ作戦実行の時！！））

楽しい誕生パーティーの幕が閉じたと同時に、
今此処ワルプルギスに惨劇の夜が幕をあげた

第10話 誕生日（後書き）

早く本編入りたい~~~~~
少なくとも見積もっても後6〜7話ぐらいかかるんですよ、
自分の文才の無さに悲しくなってます、
それでもどうか暖かく見守って下さい、
読者の皆様あつての私なので、
それでは皆さんまた来週〜

第11話 悪巧み(前書き)

今回はギャグ編です、

もの凄く自信が無いですが楽しんでいただけたら幸いです

第11話 悪巧み

はやて視点

は（シャマル、準備はええか？）

私はさつき教えて貰った念話でシャマルに話しかけた

シャ（はい、準備は万全です）

よし、シャマルの方も大丈夫みたいやな

は（それではこれからレイ兄いのお仕置き大作戦を始める！！）

レイ視点

楽しい誕生パーティーが終わりみんなで後片付けをしてると・・・

は「あのなレイ兄い、ちょっとお願いがあるんやけど・・・」

はやてがお願いをしてきました

レ「どうしたんですか？はやて」

は「その・・・レイ兄いには身体の年齢を操作出来る能力があるやろ？」

それを使って欲しいやけど・・・」

そう言って上目遣いで聞いてくる

レ「それ位使ってもいいですけど、

どうしたんですか？」

は「確かに家族は増えたけどヴィータ以外年上やから

それで弟が欲しくなって・・・

お願いや！今日一日だけでええ！

今日だけは弟になってくれへんか？」

なんだそう言う事でしたか、

それ位のお願いなら聞いてあげましょう

レ「分かりました、それなら小学1年生・・・6才頃になりましたよ
う」

そうして私は能力を発動した、

身体はみるみる小さくなり子供となりました、

レ「これでどうですか？」

は「・・・・・・・・・・・・・・・・」

はやては私を見るなり急に黙ってしまいました、
一体どうしたんでしょうか？

三人称

レイは今の状態をよく分かっている様だが
此処で今のレイの容姿を説明しよう、

身長ははやてより顔半分程低く

顔は凛々しく美しい顔立ちの代わりに

まるでビスクドールの様にとても可愛らしい顔になった、

そしてこの能力の最大の欠点は身体は自由に変化できるが
服はそのままなのだ、

よって今のレイはズボンが脱げ、

ぶかぶかになった上着だけが全身を包み

それが更に可愛さを引き立てる結果となった、

その姿はまさに弟（妹？）とも言つべき姿だ、

そんな状態のレイを見てはやては我慢出来る訳もなく・・・

は「か・・・・・・・・・・・・・・・・」

レ「か？」

は「かわいい〜〜〜〜〜〜〜〜！！！！！！」

レ「もぎゅー！！」

ホントに足が悪いのか？と疑う程のスピードでレイを抱きしめた、

は「レイ兄いホンマにかわええな〜〜〜」

私の予想以上や、あ、今は弟か」

と、冷静に言いながらもレイに頬ずりをするはやて、

レ「ちょ！は、はやて！？」

や、やめてくだー！ーむにゅー！！」

一方レイははやてに頬ずりをされ満足に喋られなかった、

は「シャマル、お風呂の方はどうや？」

シャ「万事抜かりなく、何時でも行けます！

あら〜レイ君可愛くなっただわね〜」

いっお風呂の準備をしたのやら、

風呂場から顔を出して来たシャマルがどこぞのロボットアニメのオ

ペレーターのような返事を返した後

レイを見てとても面白そうな顔をして微笑む、

レ「お、お風呂って．．．まさか!？」

レイはお風呂の単語を聞いた瞬間顔を引き攣らせた、
思い出すはお風呂に連行され18禁ギリギリの行為をされた悲劇の
記憶、

は「そのまさかや!今からレイ兄いは私と一緒にお風呂に入るんや!
いや〜一緒に入るのは1ヶ月ぶりやな〜」

そんなレイの気持ちを全く知らずにはやてはレイをお風呂に連行す
る、

レ「は、はやて!お願いです、それだけは!
子供と言えどもはやては女性なんですから、
異性と一緒に入浴をするのは．．．．．」

レイは何とかはやてを説得しようと試みるが．．．．．

は「うむ、レツシラGO!」

その一言によって見事に粉碎された

レ「あああああああああああああああ
」

はやて家にレイの悲しき叫びが響いていた、
一方その一連の出来事を見ていた他の三人は……

シ「レ、レイ……なんて可愛いんだ……」

シグナムは何か抱き締める動きをしながら体をクネクネと動かし、

ヴィ「……………」

ヴィータの頭は既にオーバーヒートを起こし、

ザ「可憐だ……………」

ザフィーラはカリオスト口の城で斬鉄剣を振るった侍と同じ様に呟いた、

あのザフィーラがその様な事を言うのだから今のレイの容姿は想像に難くないだろう、

こうしてレイは無事？風呂に連行された、

レイ視点

は「ふうふうん ふうふうん」

はやてが楽しく鼻歌を歌いシャルマルが背中を流しているなか、

レ「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

私は湯船に浸かっていた、勿論2人に背を向けて、

シャ「何で私達に背中を向けているんですか？」

分かっているくせに・・・・・・・・

レ「それを貴女たちが言いますか・・・」

私は若干溜息混じりに正面を向いて答えた、

レ「それに、はやてもシャルマルも女性としてもっと慎みのある・・・

つてなに入ってきてるんですか!？」

2人は私の言葉を特に気にせず湯船に入ってきました、

は「ん?だってお風呂ってそういうもんやろ?」

はやては「え、なに言ってるの?」みたいな感じで返してきました、

レ「そうでは無くて・・・もういいです・・・」

私は説得を諦め再び背中を向けた、

そうですね!2人を見なければそれでいいじゃないですか!!

そう思い込み、何とかこの時間が過ぎるのを待とうと・・・

そう思ってた時期が私にもありました

シャ「うふふふふ」

突然シャマルが笑い出したと思ったたらいきなり私に抱きついてきました、

レ「シャ、シャシャシャ、シャマル!？」

シャ「んんん？なにかしら？」

《ムニユ》

間延びした声を出しながらシャマルが訪ねてくる、
ていつか胸を押し付けしないで下さい！！

レ「シャ、シャマル離れて下さい！

さつきから当たっているんですよ」

シャ「あら？なにが当たっているのかしら？」

《ムニユムニユ》

そう言いながら更に胸を押し付けてくる、
分かってますよね！？絶対に分かってやっていますよね！？
私は何とか抜け出そうと藻掻くも一層胸に押し付けられる形になっ
た、

あれ？これって逃げられない系ですか？

それに何で力が出ないんですか？私は吸血鬼ですよ！？

（説明しよう、それがギャグ補正というものなのだ）

黙りなさい！この駄作者！！

シャ「それにしてもレイ君の髪は綺麗ね」

私が答えられずに困っているとシャマルは私の髪をさわり出した、
勿論胸はさつきと変わらず押し付けたままです、

は「せやな、レイ兄いの髪メツチャ綺麗やな」

まるで真つ暗な夜みたい綺麗な黒髪やわ」

レ「はやて、そんな事よりシャマルをー」お姉ちゃんや「え？」

は「レイ兄いは今日一日八神家の末っ子で弟や、

よってこれから皆んなの事をお姉ちゃんと呼ぶんや!」

後ろからドン!!!と効果音が出そうな勢いではやてが宣言する、

は「さあレイ兄い、私達の事を“お姉ちゃん”って言うてみ?」

レ「う……………」

は「さあ」

レ「……………はやてお姉ちゃん……………シャマルお姉ちゃん……………」

はやてに促され観念して口にする、

お姉ちゃんなど殆ど言った事がないので妙なむず痒さがあり、
最後は消え入る様な声になってしまいました、

「……………」

私の言葉を聞くなり2人は黙ってしまいました、

(読者の皆に説明しよう！)

今のレイの容姿は先に述べた通り完璧な男の娘、

“子”じゃなくて“娘”だよ！ここ重要だから、

そんな可愛さ満点、保護欲をバンバン掻き立てる状態でモジモジし

ながら2人の事をお姉ちゃんと呼んだのだ、

この破壊力を前に2人は耐えられるのか？

まあ耐えられるわけないよね

それを全く自覚してないあたり、レイもレイだけどね)

黙れと言ったでしょう！駄作者！！

「……………」

レ「か？」

あれ？何かとてもデジャブを感じるのですが…………

「かわいい〜〜〜〜〜〜〜〜！！！！！！」

レ「やっぱりいいいいいいいい！！！！！！」

は「レイ兄い可愛すぎや！お姉ちゃん萌え死にそうやわ」

はやて！頬ずりしないで下さい！ていうか抱きつかないで下さい！！

シャ「ホントに可愛いですよね〜・・・えい！」

《モニユ！》

シヤマルウウウウ！！貴女はなにやってるんですかああああ！！！！

は「レイ兄い、今日はお姉ちゃんと一緒に寝よな」

シヤ「あ、ズルいです、私もレイ君と一緒に寝たいです」

ちよつと！なに勝手に話を決めてるんですか！！
その前に私が一緒に寝る前提で話さないで下さい！！

レ「2人とも！私はどちらとも一緒に・・・」

は「そうや！私とシャマル一緒にレイ兄いと寝ればええんや！」

シャ「流石ですはやてちゃん、それなら問題なしですな」

私には問題大有りなんですよ！
ていつか私の話を聞いて下さい！！

(やるね〜、このタラシめ)

レ(作者あああああああああ！！！！！！！)

私の声にならない叫びは誰にも聞こえる事はありませんでした

お風呂から上がった後、私は夜風に当たって涼んでいました
服は勿論【影の宝物庫】から出しました

レ「う〜〜〜、ヒドイ目にあいまして・・・」

あのははやてやシャマルに体をペタペタと触られたり
2人に抱きつかれたり、
最終的にははやてが暴走して胸を揉まれたり・・・
散々な目にあいました
ちなみに2人はまだお風呂に入っています

何時の時代も女性のお風呂は長いものですね、

シ「それは災難だったな」

シグナムがそう言って私を励ましてくれる、
その気持ちはとても嬉しいんですが・・・

レ「ところでどうして私はシグナムの膝に乗っているのでしょうか？」

そう、私は今シグナムの膝の上に乗っています、
シヤマルの様に胸を押し付けたりはしないんですが
時折頭を撫でたりと妙なくすぐったさがあります、

シ「そこにレイがいるから・・・か？」

何ですか？それは・・・
それに私に聞かれても困ります、
ああ、また頭を撫でてくる・・・

シ「それはそうと私には呼んでくれないのか？」

レ「なにがですか？」

シグナムは私の言葉を聞くなり顔を赤くしながらモジモジしてしまいました

シ「その．．．だな．．．」

主やシャマルみたいに．．．お姉ちゃんと．．．」

レ「貴女もですか．．．」

一体何が良いんですやら

シ「ダメか？．．．．．」

レ「まあ別に構いませんよ、シグナムお姉ちゃん」

うん、やっぱりちょっとむず痒いですね、

シ「ふふふ、お姉ちゃんか．．．」

そうかそうか、レイは可愛いな」

シグナムはとても嬉しそうに笑って

私の頭を撫でてきました

ちよっとくすぐりたいですが

はやてもシヤマルもシグナムを見習ってほしいものです、

ヴィ「レイ」

そんな事を思っているといくとヴィータがやって来ました、

レ「どうしたんですか？」

ヴィ「冷凍庫にあるアイス食べていい？」

シ「お前、さっきもあれ程食べただろう」

シグナムは少し呆れた様子でした、

確かにヴィータは皆のなかで一番食べていましたね、

ヴィ「うっせー！いいんだよ、

はやての料理はギガうまだしな」

まあ甘いものは別腹と言いますし別にいいですか

レ「いいですよ、でも少しだけですよ」

ヴィ「おう！それとあたしの事もお姉ちゃんと呼べよ？」

レ「分かりました、ヴィータお姉ちゃん」

ヴィ「お、おう、可愛い奴だな・・・」

ヴィータも顔を赤くしながら私の頭を撫でてきました、
するとそこへ・・・

シ「レイ、今日は一緒に私と寝ような」

シグナムが爆弾を投下してきました、

レ「シ、シグナーー！おい！それはどついう事だ！？」

私の言葉を遮ってヴィータが割って入る、
話を聞いてもらえない次は満足に話も出来ないんですね・・・

シ「そのままの意味だ、レイは私と一緒に寝るのだ」

やっぱり一緒に寝る事は確定事項なんですか・・・

ヴィ「勝手に決めんじゃねー！レイだって嫌がってるだろ」

おお！ヴィータが味方にまわってくれました！

ヴィ「それにレイはあたしと一緒に寝んだよ！」

．．．．．前言撤回です、

ヴィータ、貴女もそうなんですネ．．．

シ「面白い．．．ならばどっちがレイと一緒に寝るのか．．．．．」

ヴィ「ああ．．．ここで決めようじゃねえか．．．」

2人の雰囲気が増しくなり、まさに一触即発の空気が流れてきました、

は「ちょっと待ったあああ！！！」

そんな雰囲気の中お風呂から上がったのかはやてが乱入してきました、

そのお陰で険しかった雰囲気は霧散したんですが
絶対に話がややこしくなる気がしてきました、

は「レイ兄いは私達と一緒に寝るんや
悪いけど2人には諦めてもらうので」

ヴィ「は、はやて!？」

シ「シャルお前もなのか？」

シャ「なんか面白そうだったので」

シャル・・・貴女が1番夕子が悪いですよ・・・

シ「ですが・・・例え主の言葉でも退く訳にはいきません」

シグナムの言葉にまたも雰囲気为重くなりました、
大変です!どうにか止めなくては!

は!そうだザフィーラは!?

ザフィーラなら何とか止められるかもしれせん!

レ「ザフィーラ!」

ザフィーラに全てを頼みましょう

三人称

レ「ザフィーラ！」

ザ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

レ「ザフィーラ？」

ザ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

レ「・・・・・・・・ザフィーラお兄ちゃん？」

ザ「何だレイ」

レ「お願いです！皆を止めて下さい！」

ザ「・・・・・・・・あの中に入れといるのか？」

ザフィーラはあの4人を見て少し躊躇う、

レ「ザフィーラお兄ちゃんしか頼れる人がいないんです！」

レイはザフィーラを見つめながら懇願する、必然的にレイの視線は
上目遣いになる、

ザ「頼れるか・・・・・・・・そうか・・・・・・・・可愛い弟の願いは叶えねばいかな」

レ「お兄ちゃん……」

レイはザフィーラを心配そうな目で見つめる、

ザ「心配するなレイ、必ずお前の願いを叶えてやる、
それに……」

ザフィーラはレイの頭を撫でながらも4人に目を向ける

ザ「盾の守護獣はこの位では折れん!!
行くぞおおおおおお!!!!」

ザフィーラは吠えながら戦場に向かって行った……

（数分後）

ザフィーラが突撃を敢行して数分
そこは死屍累々と化していた、

シ「む……無念」

シグナムは膝から折れ項垂れて

ヴィ「ちくしょー．．．もう少しだったのに．．．」

ヴィータは心底悔しそうな声を漏らし

は「一歩やったのに．．．あと一歩やったのに．．．」

はやては何かを掴むように手を伸ばし

シャ「ああああ、残念です」

シヤマルは特にこれといった感情はなかった
だが4人の右手は共通して手を広げていた、

ザ「ハア、ハア、ハア、ハア、ハア」

4人が倒れ伏しているなかで
ザフィーラだけは満身創痍の状態で立っていた、
その右手は高々と上げVの文字をかたどっていた、
此処までくれば分かるだろう、
そう、5人は今までジャンケンをしていたのだ、

何故ジャンケンをしていたのかは分からないが・・・
そして度重なるアイコの末、ザフィーラはようやく勝利を勝ち取っ
たのだ、

ザ「これで皆んな納得したな」

ザフィーラは言外に勝利宣言をするが・・・

「」「」「」

誰もその言葉に応える者はいなかった
未だにこれを現実と受け入れられない様子だった、

ザ「・・・それでは私とレイは失礼する」

無言を肯定と受けとったのか

レイを肩車しながらザフィーラは部屋へと消えて行った、

「」「」「」

4人はその姿を見送ることしか出来なかった

レイ視点

レ「ありがとうございます、ザフィーラお兄ちゃん」

ザフィーラが死闘に勝利したお陰で何とか場が収まってくれました、

ザ「気にするな、今日だけとはいえレイは弟なのだから、

弟を守るのは兄の役目だ」

ザフィーラはそんな事気にするなとばかりに微笑いました、

レ「ふふふ、ホントにお兄ちゃんみたいですね」

余りのお兄ちゃん振りに思わず私も笑みが零れました、

ザ「そうなのか？兄というのが分からなかったから自身が無かったんだが」

レ「そんな事無いですよ、充分立派なお兄ちゃんです、ザフィーラお兄ちゃん？」

ザ「何か含みのある言い方だが？」

レ「ふふふ、まさか」

そうしてザフィーラと話しながら時間が過ぎていきました

（海鳴市某所）

ひと気の無い場所に突如空間が波打った

？「さてっと、ようやく着きましたか・・・

時間が無いから手っ取り早く済ませましょう」

波が静まると其処に人が現れた、

？「それじゃあ行きますかね」

第11話 悪巧み（後書き）

初めてのギャグは如何だったでしょうか？

最終的にザフィーラが勝ちました

痛い痛い！石を投げないで下さい！

私も女性陣の誰かにしようとしたんですが何故かザフィーラになっちゃいました

期待していた人には申し訳ありません

アンケートの結果とら八の設定を入れる事になりました、

吸血鬼同士の月村との絡みなど楽しみにして下さい

それではまた来週！

第12話 真実の欠片（前書き）

今回は闇の書事件の少し核心に迫る話です
ようやくストーリーが少し進みます

第12話 真実の欠片

レイ視点

はやて達女性陣の暴走がようやく鎮まりみんなが寝静まっているなか

？（もーもーしーえますか、返ーをしてーさい）

レ「!？」

突如頭に声が響いた

これがザファイラから聞いた念話と言つものですか・・・

auも真っ青ですね

とりあえず返事をしますか

レ（何者ですか？）

？（お！よーく繋ーましたか）

レ（こっちはさっきから音が途切れているんですが）

？（おつー、そーーたね、いきーりですみーんが図ー館まで来てーーだけませんか？）

レ（いきなり来て下さいと言われても何者かも分からない者の言葉にすんなり聞くと思つんですか？）

？（はやてーを知りたーんですか？）

レ（！？ツ．．．どう言う事ですか？）

一体この念話の相手は何者なんだ？

はやての事を知っている？

私を知る限り仮面の2人組しか外部の人間は知らない筈です

？（そー事も含ーーお話しーす）

つまり知りたくば言葉に従えと言っわけですか．．．

レ（分かりました、図書館ですね？今から向かいます）

今ははやてに関する情報は何があんでも欲しい状態です
仕方ありませんがここは従いましょう

この身は不老不死身の【真祖の吸血鬼】

何か策を練っていたとしても悉く打ち砕いてみせましょう

偵察に出ている蝙蝠達300匹を戻して家の監視に当たらせ警備は
万全です

皆を起こさない様に私は静かに影の中に消えていった

（海鳴図書館）

私は【影渡り】を使いすぐに図書館へ移動しました

どうやら向こうは未だ来ていない様ですね
とりあえず今街を監視している200匹の蝙蝠の内100匹を図書館の監視に回し備えは盤石です
2〜3分程待っていると突如聞き慣れた鳴き声と共に月明かりの空が黒く染まった

レ「!?!」

私はそれを見て驚愕した
空を埋め尽くしたのはなんと蝙蝠の群れだった
その数はおよそ1000匹
それは私がとてもよく知っているものだった・・・

レ「【無限の夜羽】・・・」

あり得ない・・・
この能力を使っていた吸血鬼は私が喰った・・・
今や私しか使えない能力の筈です
私とその光景に目を奪われている間に1000匹の蝙蝠達は次第に集まって行き
その中から出て来たのは・・・

?「初めまして私」

私と瓜二つのもう1人の私だった・・・

レ「……………一体どう言う事ですか？」

レ? 「見ての通りもう1人の私です、私なら見て分かるでしょ?」

確かに膨大の数の命を保有し永い時を生きてきた私には魂も肉体も見抜く事は造作ありません

レ「だからこそ分からないんですよ」

だが其れ故に分からない

目の前にいるのは確かに私だ、魂も肉体も確実に私のものだからどうして私が2人存在している?

レ? 「ああ、そうでしたね、すっかり忘れていました」

私の言葉を聞くともう1人の私は何かを思い出したかの様に1人頷く

レ? 「実は私未来から来たんですよ」

は? 未来から来た?

レ「未来から・・・ですか・・・」

未レ「ええ未来からです、ちょっと異次元に飛ばされた後偶然過去に辿り着いたんですよ」

レ「ちよつとつて、異次元に飛ばされたのに随分軽いですね」

未レ「まあ何とかなるでしょう、私なら分かるでしょ？

それで、話を戻してはやての事なんですが」

その言葉を聞いた瞬間私の顔から表情が消えたのが分かる

未レ「結論から言つてはやての足は治ります」

レ「そうですか・・・良かった・・・」

その言葉を聞いて安堵の声を漏らす

レ「それで私には何かやるべき事があるんですか？」

未レ「いえ、特にありません、」

レ「え？特にない？」

未レ「おつと言い方が悪かったですね、実は未来の事は余り話せないんですよ、」

話しすぎると世界の修正力が働いてしまいましたね、
流石の私も世界の修正力に抗えませんでした」

レ「そう．．．ですか．．．」

未レ「まあ一つアドバイスをするとしたら、はやてを救う為に最善だと思ふ事を心掛ければ確実にはやては救われます」

レ「それだけで良いんですか？」

未レ「但し、道程は酷く険しいものとなります、心して下さいね」

レ「大丈夫ですよ、私なら知っているでしょう？」

未レ「確かに、私なら大丈夫ですね」

そして私達は小さく微笑いあつた

未レ「そうだ、あともう一つ私に頼む事があつたんです」

そう言うとき未来の私がいきなり【影の宝物庫】を開いて何かを取り出した

取り出して来たのはなんと人だった

1人はカプセルに入った金色の髪少女と2人目は紫の髪をした妙齡の美女だった

レ「この人達はどうしたんですか？」

未レ「実は私数年前から海鳴市にいたんですよ」

レ「そうだったんですか、なのはさん達が言っていたレイ君とは未来の私だったんですね」

未レ「そうですね、今後レイ君と言う人は未来の私の方を知っている人達と思って下さい、

ちなみになのはは魔導師です」

レ「うそお!？」

未レ「ホントですよ、その時に魔法絡みの事件がありましたね、

フェイトと言う女の子に出会ったんですよ、

その2人はフェイトのお姉ちゃんのアリシアとお母さんのプレシアです、

見ての通り2人は今深い眠りについてます」

レ「では何故2人を治さなかったんですか？」

見た所アリシアさんは魂の残滓があるので生き返らせる事は出来ません、

プレシアさんの病も私なら治せるでしょう」

未レ「その時は2人共色々複雑な立場にいたので出来なかったんですよ、

今ならもう治してもいいですがはやての足が治った時に治して下さい、

ちなみにフェイトは小っちゃい母上と思えば直ぐに分かります、

未来ではフェイトもはやての親友になって私の大切な家族の様な人です、仲良くして下さいね」

レ「成る程、未来はとても楽しそうですね、

ところでどうやって【影の宝物庫】に人を入れれたんですか？

【影の宝物庫】は生き物を入れる事は出来ない筈なんですが」

未レ「確かに生き物を入れる事は出来ませんが仮死状態なら何とか入れる事は出来るんですよ

ちよつと負担がかかりますけどね」

レ「そうだったんですか、初めて知りました」

そう言って私も【影の宝物庫】を開いて2人を入れようとしたんですが・・・

レ「グッ！！これはちよつとキツイですね・・・」

心臓や内臓が押し潰される様な感覚が体を襲った、幸い2人を入れたあとは直ぐに治りました

未レ「まあこれで何とか大丈夫でしょう、

後は出す時に内蔵が全部引き摺り出される様な感覚が襲うだけなんで」

レ「なかなか凄まじい感覚ですね」

未レ「私ならその位余裕でしょう?」

レ「言ってくれますね」

2人でそんな軽口を言い合っていると……

未レ「あら?」

未来の私の体が透け出した

未レ「そろそろ時間みたいですね」

レ「もう行ってしまっんですか?」

未レ「本来私はこの時間軸には存在してはいけない異物ですからね、私よりも前の私達がこう言う風に過去へ飛んでいたので何とか大丈夫だったんですが

好い加減、世界が修正力を掛けてきたみたいですね」

レ「消えてしまっんですか?」

未レ「どうでしょうかね……」

私の存在が消えるのか、それとも元いた異次元に戻るのか……

まあ何とかなるでしょう」

そう言いながらも未来の私の体は肩から下は完全に消え去っていた

レ「そうですね、何とかなりますよね」

未レ「ええ、それでは私、頑張つてはやてを救うんですよ」

レ「勿論ですよ私、私も頑張つて元の世界に帰るんですよ」

未レ「当たり前です、さようなら私」

レ「さようなら私」

最後はまるで友達とまた一緒に遊ぼうと約束した様な別れだった
本当に明日会えるかもしれないと錯覚する程だったが
其処にはもう1人のレイがいた痕跡は跡形も無く消え去っていた
それを少しの間見つめていたレイは振り返り影に沈んでいった
心なしかその表情は希望の色が差し込んでいた

第13話 お買い物 後 事件(前書き)

次回からとら八のオリジナルストーリーが始まります
直ぐに終わりますけど楽しんで読んで下さい

第13話 お買い物 後 事件

レイ視点

未来の私との邂逅から数日後

あれからは特に何もせずはやてとヴォルケンの皆さんで楽しい毎日を過ごしていました

ヴォルケンの皆さんははやての足を治せないか考えてたみたいですが、

今はこれがはやてに出来る最善の事だと信じています

そして今はヴォルケンの皆さんの日用品を買いに来てます

初めの内は【影の宝物庫】で代用していたんですがはやてが「それじゃアカン！今から皆さんでお買い物や！」と言ったので

急遽皆さんの日用品を買う事に決まりました

ちなみに今は衣類コーナーで買い物をしているんですが・・・

「・・・はあ」「

私とザファイラ（耳と尻尾は魔法で見えない様にしてます）はベンチに座って溜め息を吐いていた

その溜め息の理由は・・・

レ「なんで女性の買い物はこうも長いんですかね・・・」

ザ「全くだな・・・」

そう、溜め息の理由は女性陣の買い物です

最初ははやてだけがノリノリだったんですが次にシャマルが乗り気になって

ヴィータとシグナムは少し戸惑っていたんですが2人とも満更ではないのか

今ではすっかり夢中になっています

いや、最初はザフィーラと一緒に付き合っていたんですよ？

ですが流石に下着まで選ぶ訳にはいかなので皆んなの買い物が終わるまで待っている事にしたんです

レ「女性の買い物と言うものは何時の時代も何処の世界でも永劫不変なんですね」

ザ「レイが言うとは故か説得力があるな」

レ「それはほら、私は不老不死なんで」

ザ「そうだったな、つい忘れていた」

などと待っている間ザフィーラと他愛ない会話をしていました

レ「そう言えばザフィーラは服を買わないんですか？」

ザ「主がずっとペットが欲しかったと仰っていてな、

家では狼形態でいようと思うのだ」

レ「それではダメです、ちゃんとザフィーラも服を買っておかないと、

ちょうど隣に男性向けの衣類コーナーがあるので行きましょう」

ザ「しかし主達を放って置いていいのか？」

レ「そうですね一声掛けますか、おゝいはやーー」シグナムは胸大きいな〜」

シ「あ、主、何故私の胸を揉んでいるのですか？」

は「ええか？胸は揉むためにあるんや、しかもシグナムみたいに大きい胸は尚更や、

これは言わば義務や、責務や、だから私はシグナムの胸を揉まなアカンのや！」

レ「…………大丈夫みたいですね、それでは行きますか」

私達ははやての会話を聞かなかった事にしてそのまま隣のお店に入りました

〜メンズショップ〜

ザ「ところでどう言う服を買えばいいんだ？」

今まで騎士甲冑だったからお前達の言うファッションと言うものがイマイチよく分からん」

レ「大丈夫です私に任せて下さい、そうですね〜段々冷え込みが厳しくなってきましたから

モッズコートを買いますか、ズボンはジーンズで少しダメージのある物にして・・・

そうだ！ついでにミリタリージャケットも買いましょう」

そう言っただけで着々とザフィーラの服を決めていく

ザ「レイよ、少し派手ではないか？それに何か落ち着かないな」

レ「まあ最初は着慣れないと思いますがすぐに慣れるでしょう」

それにザフィーラはガタイがいいのでピシッとするよりもこう言うワイルドな服装の方が似合っくんですよ」

ザ「そう言う物なのか？」

レ「ええ、そう言う物なんです」

そうしてザフィーラの服を十数着買ってお店を出ました

だがザフィーラと一緒に買い物をしている時に

他の人達からはデートと間違われ絶世の美女と偉丈夫の男性の組み合わせとして

リアル美女と野獣として有名になったのは余談だ

（帰る途中）

ザフィーラの買い物が終わった時には丁度はやて達の買い物も終わってみたいたく

デパートから出る途中で
ちなみに買った物は【影の宝物庫】に全部入れました

ヴィ「……………」

皆んなで帰っている途中ヴィータが急に立ち止まった
何事かと思い近付いてみると……………

レ「あのウサギは……………」

其処には誕生日にあげた目を縫い付けられたウサギのぬいぐるみが
あった

しかもかなり大きい、ヴィータと同じ位ですか
ヴィータに教えてもらったんですがあのウサギのぬいぐるみは「の
ろいつさぎ」と言う名前だそうです

レ「あのぬいぐるみが欲しいんですか？」

ヴィ「べ、別に欲しくない……………」

ヴィータはソッポを向きながらも視線をのろいつさぎに向けたまま
でした

ふう、仕方ありませんね……………

レ「ちょっと待ってて下さいね」

ヴィ「え？あ、ちょっと!？」

私はヴィータの声を聞かずショーウィンドにあっただのろいっさぎを
購入しました

レ「少し遅くなりましたが誕生日プレゼントです」

ヴィ「え？だってもう貰った・・・」

レ「あれは偶々買ってきたやつをヴィータにあげただけです
そんなのをカウントする程私はケチではありません」

ヴィ「ホ、ホントにいいのか!？後で返せって言っても返さないぞ」

レ「そんな事言いませんよ、是非貰って下さい」

ヴィ「あ、ありがとう!レイ!」

ヴィータはぬいぐるみを抱きしめ満開の笑顔を咲かせました

レ「」どついたしまして」

私はその笑顔を見て頭を撫でていると・・・

は「む〜〜！レイ兄いはヴィータにちょっと甘いとかゃうんか？」

はやてが不満の声をあげる、よく見るとシグナムも口には出さないが不機嫌な表情だった

レ「それは誰かと違って一緒にお風呂に入ろうとかしませんからね」

は「うっ！」

私は今までのお返しとばかりにはやてを口撃した
これで少しは自重してくれればいいんですが・・・

シ「それなら私はどうなのだ？」

そんな事を考えているとシグナムが不安そうな表情で訪ねてきました

レ「勿論シグナムもヴィータと同じですよ」

私は安心させる為に微笑みながら答える
オマケとしてシグナムの頭も撫でてあげましょう

シ「レッツレレ、レイ!? ななっ何を!？」

私が頭を撫でた瞬間シグナムがとても慌て出しました

レ「すみません、もしかしてイヤでしたか？」

シ「ちち違うんだ、イヤと言うよりも寧ろその……」

シグナムはそれつきり顔を真っ赤にして黙ってしまいました
まあイヤじゃないのならこのまま頭を撫でてあげましょう
そんなこんなでみんなとワイワイしながらデパートを出ようとした
ら……

《ガヤガヤガヤガヤ》

外は異様に騒がしくなり沢山の野次馬が群がって
その先には黒煙があがっていました

レ「一体何が起こったと言つのですか？」

私は近くにいた女性に話しかけました

「わ、私も詳しくは・・・」

他の人達は交通事故とかイキナリ車が爆発したとか・・・」

うーん情報が混雑してこれでは拉致があきませんね

レ「どうもありがとうございます、皆さんすいません！」

ちよっと通して下さい!!--」

私は人ゴミを掻き分け何とか到達しました

レ「これは・・・」

目の前には高級外車であったものが見事に炎上し

運転手であろう人は誰がどう見ても助からない状態でした

私は運転手に静かに手を合わせたあと車の状態を確かめていきました
最初は炎に気を取られていたんですが所々銃痕がありました

レ「成る程、車から察するに資産家の誘拐と言った所ですか・・・
おや?」

辺りを探索しているとバイオリンケースが転がっていました

レ「名前は・月村・．．．すずか・．．．ですか、確か有名な資産家だった筈

筆跡からおそらく小学生位ですか・．．．それに・．．．」

このバイオリンケースからとても懐かしく、それでヘドが出そうな匂いがしました

レ「吸血鬼・．．．ですか・．．．私の知らない吸血鬼がまだこの世にいたなんて・．．．

糞共が・．．．少しは大人しく生きられないんですかね」

何時の時代も私を怒らせるのは化け物だけですか

レ「仕方ありません、蝙蝠達の感覚を嗅覚まで共有させて奴らを探しだしますか」

街を巡回させている蝙蝠達の数は朝なので200匹ですが
念には念を入れて500匹全部だします

レ「．．．．．見つけた！」

幸い奴らは直ぐに見つけました、車で移動しているみたいですね

レ「さてつと．．．行きますか．．．．」

どうやら警察達も来たみたいですね、ここは任せますか

私は直ぐにはやて達の所へ戻り事情を説明したあと奴らの所へ向かいました

人に仇なす化け物共を皆殺しにする為に．．．．

第13話 お買い物 後 事件（後書き）

はい、吸血鬼同士の月村の絡みをいれてみました
ちなみにレイはキレると口調が荒くなります

あと化け物には容赦がないんで虐殺と殲滅が始まると思いますが
それでは皆さんまた来週（＾O＾）ノ

第14話 闘争の覚悟（前書き）

とらハクロスの第1話目です

かなりのオリジナル設定がありますが楽しんで読んで頂けるなら幸いです

其処まで激しい戦闘描写はありません

文の構成を変えてみました、直して欲しい方は言って下さい

第14話 闘争の覚悟

恭也視点

恭「ハッ、ハッ、ハッ、ハッ、ハッ」

俺は今街の中を全速力で駆けていた
事の始まりは俺のケータイに鳴り響いた一本の電話だった
俺は電話を取ってみたら……

忍「恭也！大変．．．大変なの！！すずかが！お願い助けて！」

相手は恋人の忍だった、だが様子は何時もと違い
かなり取り乱して今にも泣きそうな声だった

恭「落ち着くんんだ忍、深呼吸してゆっくり話してみるんだ」

このままでは満足に話しも聞けないので
一旦落ち着かせ再度話しを聞く

忍「ご、ごめんなさい．．．でもすずかが．．．」

恭「すずかちゃんがどうしたんだ？」

忍「実は誰かに誘拐されたみたいなの．．．

さつきからケータイに掛けているんだけど繋がらなくて

それに犯人は夜の一族の者らしいの」

恭「なに!？」

それを聞いて流石に俺も焦った

「夜の一族」

その正体は今や空想の存在と言われている吸血鬼だ

そしてその夜の一族の中でも月村家は純血種と言われ有数の力を持った家系なのだ

恐らく．．．いや確実に相手はその月村純血種の力を手に入れようとすずかちゃんを誘拐したに違いない

恭「．．．分かった、すずかちゃんの事は俺に任せてくれ」

俺自身、自分の声が低くなった事に気付く

どうやら心は既に御神の剣士として切り替わっているみたいだ

忍「恭也あ．．．ありがとう」

俺の言葉を聞いた途端、忍が涙ぐみながら答えた

恭「それで、すずかちゃんは何処に連れて行かれたんだ？」

忍「グスツ．．．今すずかは車で移動しているみたいなの
今GPS情報をそちらに送るわ」

すると《ピピッ》と音がした、どうやら届いた様だ

恭「ちゃんと届いた、今からすずかちゃんの所へ向かう

ノエルも後で合流するんだろ？」

ノエルと言うのは月村家のメイド長であり屈指の実力を持つ自動人
形だ

本気で戦闘をしたら夜の一族でも手が付けられないらしい
まさに切り札とも言える存在だ

忍「ええ、ノエルも直ぐに合流させるわ」

恭「そうか、それなら安心だ」

正直な所ノエルは今の俺と互角かそれ以上の実力者だ
彼女も来てくれる事で少しだけ心に余裕が持てる

忍「恭也、1つだけ約束して・・・」

絶対に、無事で帰ってくるって」

恭「分かった、必ず皆んな無事で帰ってくる

だから忍は安心して待っていてくれ」

忍「うん・・・待ってる・・・」

忍は最後泣きながら電話を切った

俺は直ぐさま部屋に戻り小太刀2本をジャケットに仕舞い

飛針と鋼糸を取り出して家を飛び出した

そして冒頭の部分に戻る

恭「ハッ、ハッ、ハッ・・・待っている、すずかちゃん！」

俺は誰に言うのでもなく1人呟いた

自らの心を奮い立たせるため、大切な恋人の妹を守るため

大事な妹の親友を助けるため、俺は街を駆け抜けた

レイ視点

私は今ビルの屋上にて奴らの追跡をしている最中です

本来なら直ぐにでも追いかけていんですが残念な事に

【無限の夜羽】は視覚以外の感覚を共有する時は動けないんです

と言う事で暫らく待っていると……

レ「どうやら向こうは到着したみたいですね」

車が着いた先は街外れにあるいかにも悪役が使いそうな廃ビル

ビルの方から黒いフードを被った連中が出迎えて来た

連中は車から大事そうに、まるで美術品を運ぶかの様に女の子を運び出した

レ「どうやらこの子が月村すずかさんですか……」

出て来たのははやてやなのはさんと同じ年位の女の子でした

レ「騒がれない様に薬で眠らされているみたいですね、ですがそれよりも気になるのが……」

運び出された女の子……すずかさんから奴等と同じ匂いがした、この匂いがすると言う事はつまり……

レ「この子も同じ吸血鬼みたいですね」

まあ、奴等より純度の高い匂いがするので純血種と言った所でしょ
つまり奴等の目的は身代金ではなく純血種の力と言う事ですか・・・

レ「なんだ、同族同士のいざこざではないですか

これなら放って置いた方が・・・

いや、でもまだ小さい女の子ですし

此処は助けた方が・・・おや？」

私が助けようか助けないか迷っていると少し遠くから知っている匂
いがしました

しかも奴等の場所へ向かっているみたいですね

レ「この匂いは・・・恭也さんですか・・・

鉄の匂いがしますね、刀を持ち歩くななんて物騒じゃありませんか

しかも汗の匂いが混じっていますし、どうやらかなり急いでい
るみたいですね」

と言う事は恭也さんはこの女の子を助けようとしているんでしょ
うか？

あの必死な表情から察するともしかして親密な間柄？

イヤイヤ、それだと恭也さんがイタクて、カワイソウ、で何よりア
ブナイ人じゃあないですか

まあ、無難に恋人か、大切な人の妹と言った所でしよう

レ「よし！そうと分かれば私も助けに行きましょうか」

と言つてもどうやって行きましょう？

街中を走ったら他の人達に見られて騒ぎになりますし
ビルに飛び移って行くのも見つければ大騒ぎになります

レ「んゝ．．．そうだ、これを使いましょう！」

そう言つて私は背中から蝙蝠の羽を生やした

これぞ【無限の夜羽】の応用型

タケで出来たコプターもこれがあれば必要ありません

これで人から視認出来ない高さまで上昇して飛んで行けば騒ぎにな
りません

レ「よしつと．．．それじゃあ．．．．．征きますか」

そうしてレイは黒い羽をはためかせとんでもない速さで飛んで行つた

ちなみにレイが飛んで行つた時に軍のレーダーに引つ掛かってしまい
謎の飛行物体が飛来したとして日本国内が大慌てし

軍や内閣が集まり緊急対策会議が開かれた事をレイは知らないでいた

三人称

恭「ハッ、ハッ・・・此処か・・・」

恭也は息を少し整えた後、目の前にある廃ビルを見つめた
右手にはケータイが握られ画面には此処ら一帯の地図と赤い点が点滅していた

GPS情報からも此処にすずかがいる事は間違いない様だ

恭「本当はノエルと一緒に突入したいんだが・・・
仕方ない、すずかちゃんを早く助け出すか」

そう言いジャケットから小太刀を抜こうとした時・・・

？「やあ、恭也さん、こんな所で会うなんて奇遇ですね」

恭「!?!?ッ」

突如後ろから声を掛けられ振り返った

すると其処にいたのは・・・

レ「こんな街外れにお出掛けですか？変わった方ですね」

約1カ月程前にもう1人の妹の美由紀を助けてくれたレイだった

ちなみにレイは少し遠くで【無限の夜羽】を解除してから向かって来た

それにしても何故恭也が此処に来たのか知ってるくせに態々わざわざ聞くな
んて白々しい事この上ない

恭「レイか．．．お前こそ何でこんな所にいるんだ？」

呑気に話すレイとは対象的に恭也はかなり警戒していた
これでも恭也は周りの気配を読む事にはかなり長けていると自負している

しかも、平時ならいざ知らず今は完全に御神の剣士として切り替えている
それを何の気配も無く後ろに．．．つまり死角に立たれたのだ

戦闘時だったら確実に死んでた所だ
そんな擬似的な死を味わったのだから内心は穏やかな訳がない
恭也は何時でも刀を抜ける様に懐に手を伸ばしているが．．．

レ「街中で事件がありましたね、それを追っていた所なんですよ」

そんな恭也の警戒も意に介さずレイはサラッと此処に来た理由を答える

恭「そ、そうか・・・」

予想と違い素直に答えが帰ってきたので思わず肩透かしを食らってしまった恭也

レ「どうやら此処に犯人がいるみたいですね、ちゃっちやと捕まえて家に帰りますか」

恭「ま、待つんだレイ！お前はもう帰るんだ！」

そんなレイの副音声に気付かず恭也は必死にレイを引き返させる

レ「・・・何ですか？」

恭「此処は危険なんだ、相手は普通の奴じゃなくて、その・・・」

恭也はその理由を言えず口籠る、相手が吸血鬼だと言っても今の世の中ではまず信じて貰えない
何とか別の理由を言おうと考え込んでいると・・・

レ「吸血鬼・・・ですか？」

何とレイ本人の口からその言葉が出て来た

恭「!?!ツ、吸血鬼を知っているのか？」

さっきまで小さくなっていた警戒心がまた膨らんで来た

自分で言うのも何だが夜の一族を知っている者に

まともな人物なんていない

恭也の心には警戒心が渦巻き、最早猜疑心にまで膨れ上がっていた

まあ、レイ自身は夜の一族の事なんて全く知らないのだが

確かにレイは吸血鬼で普通ではないけれど・・・

レ「ええ、よく知っていますよ、よく、ね・・・」

そんな恭也の気持ちがあつていないのか

レイは含みのある返事をする

勿論ずかを助けるために万全を期したい恭也にはこの答えが更に猜疑心を募らせる結果となった

恭也はレイに詰め寄ろうとした時・・・

レ「まあ、私からしたら恭也さん・・・貴方の方が帰るべきだと思いますけどね」

恭「なに!?!それはどう言う事だ!?!」

思わぬ一言で猜疑心を忘れ、つい怒りを露わにした恭也
言外に お前では役に立たない と言われたのだ

恭也は今まで御神の剣士として血の滲む様な鍛錬をしてきたのだ
確かにまだまだ未熟だが役に立たないと言われれば怒らない方が無
理な相談だ

猜疑心によって詰め寄ろうとしたのが
怒りと言う別の形で詰め寄ってしまった

それでもレイは表情一つ変えずに・・・

レ「簡単な事ですよ、貴方・・・人を殺した事無いでしょう？」

恭「くっ!？」

淡々と言を述べてゆく

その言葉は疑問の文だがレイの顔に一切の迷いは無い

レイはこの言葉が正解だと初めから分かっているのだろう

それと对象的に恭也は全く反論出来なかった

レ「それともう一つ決定的なものがあります

はつきり言いますが私は貴方や土郎さんよりも強い

それも絶対的な差が」

恭「グツ!!」

その言葉にも恭也は反論出来なかった
確かに思い当たる節はあった

以前レイが妹2人の頭を撫でた時に恭也と父士郎はレイに飛び掛ったのだ

あの時はただ単純に飛び掛かっただけだった

父さんは手加減をしたかもしれないけど

少なくとも俺は本気だった

せめて虫の息までにしようとしたのだが

レイは直ぐさま俺たち2人の顎を撃ち抜き意識を刈り取ったのだ
確かにあの一撃を受けただけで分かった、レイには勝てないと

それにしても妹と仲良くなっただけでイキナリ飛び掛られたり

虫の息にさせられるなんてやられる方としては溜まったもんじゃ無い

そうして2人で睨み合っていると・・・

「オイオイ、こんな所に美味そうな餌があるじゃねえか」

黒いローブを被った連中が出て来た、その数5人

どうやら恭也が大声を出した時に気付かれてしまったみたいだ

「確かに美味そうだな、これはラッキーだぜ」

男達は2人を囲んで下衆びた嗤いを浮かべる

「おい、この女カナリの上玉だぜ」

吸血鬼と言えども相手の性別は間違えるのか？
レイを女だと間違え出した哀れな男

「こりゃあ喰う前に少し遊ぶか」

それに便乗して更に下衆びた嗤いを浮かべる男達
だがレイは男達の事を全く眼中に入れなかった

その代わりレイの瞳から温度が消え絶対零度すら超える程の瞳だった

レイは人間を餌だと言う奴を最も嫌う
いや、嫌うでは生ぬるい、この世全ての負の感情をぶつけなきゃ到底表現出来ない程の感情なのだ

そして奴等は言ってしまった・・・“餌だと”
この瞬間男達の命運は今潰えた・・・

「おい！俺が先に見つけたんだぞ！！」

「落ち着けて、皆んなで廻せば大丈夫だろ」

「それもそうだな、ゲヒヤヒヤヒヤヒヤ!」

そんな事も知らず呑気に話している男達

レ「恭也さん・・・」

そんな中レイが喋り出した

レ「貴方はあの女の子を助けたいんですか？」

恭「勿論だ!」

恭也はありつたけの気持ちを含めて答える

「てめえら、何ゴチャゴチャ話してやがる!」

男達は突然の事に声を荒げるが・・・

レ「それがどう言う事が分かっているんですか?」

恭「・・・よく分かっているさ」

男達の声を見殺して話を続ける

「無視してんじゃねえよ!!」

男達は尚も声を荒げるが・・・

レ「殺す覚悟は出来ているんですか？」

恭「殺す覚悟も殺される覚悟もどつどつの昔に出来ている!」

恭はもう一度ありつただけの気持ちを込めて答える

「てめえら好い加減にー」なら「アゲツ???」

男が近づいて来た瞬間、レイは貫手の様な形で男の心臓を貫いた
貫かれた男は何が起こったのか分からず間の抜けた声を出して事切
れた

レイは男の胸から手を引き抜いた

男の胸からはまるで噴水の様血が飛び散った

レイは恭也に振り返り・・・

恭「これで文句は無いだろ？」

恭也はレイを見て問いかける
レイも特に問題は無いらしく・・・

レ「ええ、全然大丈夫です」

微笑を浮かべて答えた

すると、ビルの方からかなり慌ただしい音が聞こえた

レ「どうやら向こうも私達に気付いたみたいですね」

恭「うっ！すまない・・・俺のせいだ・・・」

恭也はレイの言葉を聞いた瞬間、ぱつが悪そうに頭を下げる

レ「別に気にしてませんよ、元々正面から行くつもりでしたし」

だがレイは特にこれと言って気にしなかった

レ「さあさあ、ちゃっちゃと終わらせて皆んなで帰りましょう」
（壁を殺して）

恭「そう．．．だな、早くすずかちゃんを助けに行くか！」

恭也はまたもレイの副音声に気付かずにはすずかを助けるために意気込む

そして、恭也の後ろにレイが着いて行く形となつて廃ビルの中に入つて行つた

だが、更にその後ろでは何かを喰べている様な《グチャグチャ》と不気味な音が響き

男達の死体が謎の影に飲み込まれていったのを恭也は知らないのだつた．．．

第14話 闘争の覚悟（後書き）

皆さん、いかがでしょうか？

ちゃんとした戦闘描写は次の話で書くつもりです

それでは皆さんまた来週〜（@ | @）ノ

第15話 闘争

三人称

「靡ビル」

恭也とレイが突入した後、ビルの中は死体の山が出来ていた……

「オラアアアアアアア！」

恭「…………ふっ！！」

恭也は相手の攻撃を避け、その僅かな隙間を狙って確実に首を落とす……

恭「シッ！！」

時には神速の如き速さで敵の懐に潜り込み

「あがつ！」

確実に首を切り落としていった

その腕はまさに見事と言ふ言葉に尽きる

それに比べて、レイはと言つと……

レ「・・・失せる」

恭也とは余りにもかけ離れた殺し方だった

手刀の様に腕を振るえば相手の首は裂け
貫手の様に腕を突き出せば相手の心臓や頭を貫いた
中には身体を真つ二つに裂かれた者もいた

「な、何なんだよお前はあああああ!!!」

その余りにも異様な殺し方に1人の男が叫んだ
恐怖の為、最早男には正常な判断がつかない状態だった
男はレイに突撃を試みるが・・・

レ「ふん・・・」

それは無情にも打ち砕かれた

男は背後から襲ってきたが
レイはそれを回し蹴りで迎え撃った
男の頭から頭蓋の軋む音が聞こえ・・・

「はぎゃっ」

叫び声とも言えぬ奇妙な音が漏れ
男の頭は小さな破裂音と共に消え去った

それをまるで路傍に転がっている小石を見るかの様な視線を向けた後
レイは近くににいる敵に向かい最初のように再び蹂躪を始めた

其処にあつたのは只々一方的な虐殺だった

恭也の場合、確かに力の差は大きい
だが、一応攻防は成り立っている
つまり恭也も殺される可能性があるのだ

言うなればそれは

“殺し合い”と言った所だろう

だがレイは違った、それも絶対的に

レイの戦いには攻防と言う言葉が存在しない
只々圧倒的なまでの暴力、死だ

レイが暴力と言う名の死を振るい、相手はそれを受けただけ

相手には攻撃する権利も、防ぐ権利も無い
つまり奴等はレイに殺される為だけの存在なのだ
そんな理不尽なものが戦いと呼べるだろうか？

いや、呼べるはずが無い

だからこそ、この現象は虐殺と呼ぶに相応しいものなのだ

レ「ふう、この数、好い加減どうにかなりませんかね？」

だがそんなレイもこの数には辟易としている様子
塵も積もれば「ー」と言ってもレイにとっては一跨ぎの山だが
殲滅するには些か時間が掛かってしまふみたいだ

まあ、本気になればものの数秒で殲滅出来るのだが・・・
恭也もいるので使いたくないのだろう

恭「ちよつと待っていてくれ、あと少しで仕込みが終わる」

そんな中、恭也は何か狙っているのか
吸血鬼達を斬り伏せながら何かをセツトしている様子

恭「よし、これで・・・レイ！絶対に動くなよ！！」

どうやら仕込みが終わったらしい
レイに向けて大声で忠告をする

レ「分かりました」

「おーおー」

レイはそれを聞き、目の前にいる男の頭を貫いたあとその場に止まった

恭也の声に気付き、数人の吸血鬼は立ち止まったが
思慮の足りなかった．．．と言ってもレイの恐怖によるものだが
吸血鬼はここぞとばかりに攻め込む

恭「ふんっ!!」

それを見計らい恭也は思いつ切り何かを引つ張った
その瞬間、攻め込んできた吸血鬼は一瞬で肉塊へと姿を変えた

どうやら恭也が仕込んでいたのは鋭利な鋼糸だったようだ
そのお陰でその場に吸血鬼の9割以上が片付いた

恭「はあっ!!」

恭也はすかさず立ち止まっていた吸血鬼に向かって飛針を投げつけた
吸血鬼達は高速で飛来する飛針に気付かず頭に刺さって絶命した

レ「やりますね、恭也さん」

その手腕に賞賛の声を述べるレイ

恭「お前の方こそ凄いいじゃないか、レイ」

更にその言葉に賞賛の言葉を返す恭也

どうやら最初の時に抱いていた猜疑心はもう無い様だ

レ「ふふ、ありがとうございますございます恭也さ・・・ん？」

突然レイが奥に続いてある暗闇を訝しげに見つめた
其処に現れたのは・・・

「よくもやってくれたな・・・貴様ら・・・」

厳つい雰囲気を放つ熟年の男性だった

その顔からは憤怒の感情が伺え

普通の人だったら失神しかねない程の威圧感だった

レ「ようやく親玉の登場ですね」

恭「だな」

だが2人はそんな威圧感を歯牙にも掛けない様子で受け流す

恭「折角の登場で悪いが、すずかちゃんを返してもらおうぞ！」

すかさず恭也は男の懐に踏み込もうとしたが・・・

親玉「動くな人間！！！！！」

恭「っ！？」

男の一喝によって止められてしまった

親玉「動けばこの娘がどうなっても知らんぞ」

すると奥の方からテーブルに布を被せただけの簡易ベッドが2人の
手下によって運び出された

其処に眠っていたのは月村すずかその人だった

恭「すずかちゃん！！！」

恭也は大声で叫ぶがすずかは全く反応しなかった

恭「すずかちゃんに何をした!!!」

レ「落ち着いて下さい恭也さん、薬で眠らされているだけで命には別状ありません」

このままだと親玉に飛び掛りそうだったのでレイが落ち着かせる

親玉「ほお、見ただけで其処まで・・・

人間にも稀有な者が居る様だな」

男はレイの洞察眼に目を見張り少し興味深そうに見つめた
まあレイは人間じゃないけど・・・

レ「御託はいいですからさっさと目的を話したらどうですか？

こっちは早く家に帰りたいんです」

親玉「それは済まなかったな・・・

と言っても貴様らは帰れんな」

男がそう言った瞬間に周りから沢山の手下達が現れた
その数は最初の数より多くざっと70人はいる

恭「まだこんなにいたのか!？」

レ」・・・・・・・・・・・・・・・・」

恭也はその数の多さに驚いている
それに比べてレイは全く動じていない
どうやら最初から知っていた様だ

親玉「我等の事を知られたからには貴様らは生かしておかん
何よりこれだけの同胞が殺されたのだ
その報いは受けて貰おう」

恭「くっ！！」

恭也はその言葉に対して身構えるが・・・

親玉「動くなと言ったのが聞こえなかったのか人間！！
貴様らが妙な動きをすればこの娘が死ぬ事になるぞ
さあ、はやく武器を捨てろ」

男の言葉によって再び制された

恭「・・・・・・・・クソッ！」

レ「・・・・・・・・仕方ありませんね」

《ブジュッ》

男が狂気の笑い声をあげた時に黒いナニカが男の心臓を貫いた
よく見るとすずかを連れてきた手下達も貫かれていた

親玉「ア．．ガッ．．な．．なんだ、これは．．」

男は自分の心臓を貫いた黒いモノを見つめた
そして、その先を辿って行くと．．

レ「残念でしたね」

それは微笑を浮かべるレイの影だった
これこそが一瞬にして奴等を殲滅出来る方法の1つ
自らの影に質量を持たせる【影の尖兵】だ

親玉「ク．．ッソがあああ！！！」

男は渾身の力で引き金に指を掛けるが．．

レ「無駄です」

《ブシヤア》

レイから延びたもう一本の影によって腕ごと切断された

レ「人質を取る点は良かったんですが・・・

私の前に姿を現したのは失敗でしたね」

レイにとってはそれぐらいの出来事なのだろう・・・

まるで学校の生徒に反省点を教える先生のような口振りだった
その後2本の影が延びて行き男の首の前で交差した

親玉「あと少しで・・・あと少しで・・・純・・・血種の――」

男の言葉は最後まで紡がれる事は無かった
影によって男の首は切り飛ばされ

一際大きい影が飛ばされた男の頭を貫いた

レ「さてと、その女の子は返してもらいますよ」

レイはその事を全く気にせず影を操ってすずかを自分達の所へ持
ってきた

レ「恭也さん、この子をお願いします
後は私1人でどうかします」

恭「.....」

レイの言葉に恭也は黙ったままだった
どうやらさっきの出来事について行けてない様だ

レ「恭也さん？」

恭「あ、ああ、どうしたんだ？」

レ「ふう、この子をお願いします
後は私1人で充分です」

レイは少し溜め息を吐いてもう一度同じ事を言った

恭「む、無茶だ！こんな数を1人で！！」

どうやら恭也はレイの正体よりその身を案じているのか
レイの提案に異を唱える

レ「貴方はなんの為に此処に来たのですか？

この子を助ける為でしょ？

ならその目的を果たしなさい
其処を履き違えてはいけません」

恭「だ、だが・・・」

レ「ふふふ、心配して下さるんですか？

大丈夫ですよ、この程度の数なんて

さあ、早くその子を連れて行きなさい」

自分の身を案じてくれるのが嬉しいのか

優しく・・・まるで春を思わせる様な笑みを向けて恭也を諭す

恭「・・・分かった、この場は任せる」

恭也はその笑顔を見て言い知れない信頼や安心感が湧き
すずかを大事に抱きしめ、この場を任せた

恭「必ず、必ず無事に帰って来いよ

お前に何かあればその・・・美由紀が悲しむからな」

素直じゃないのか・・・逆に素直なのか・・・

最後にそれだけ言って恭也は廃ビルから出て行った

レ「無事・・・ですか・・・」

私には最も縁遠い言葉ですね」

そう言いながらも最後まで微笑みを浮かべてレイは恭也を見送った

レ「さてと．．．」

レイがそう呟いた瞬間、空気が180度変わった

レイの顔からは笑顔が消え

さっきまでは暖かい春の様な笑顔だったのが今は極寒の吹雪を思わせる様な顔になった

レ「闘争の契約により、その代価を払って貰いましょう」

ゆっくりと．．まるで歩く様な速さで

レイは吸血鬼達の所に向かって歩き出した

だが吸血鬼達にとってそれは死への歩みに他ならなかった

「う、うおおおオオおおおオオををオオオオををオオオオををオオオオを
おおををオオオ！！！！！！！！！！！！」

いく、イク、行く、逝く、生く、

吸血鬼達は声にならない雄叫びを上げて^死レイに向かって^{行く、逝く、生く}IKU

最早彼等にある想いは1つだけだった・・・

生きたい

それが彼等の心にある只1つの願いだった

彼等は”生きたい“と言った1つの想いを共通意思として
数十の命が1つの命の様に集まって死に向かって突撃した
死を乗り越える為・・・死を踏破する為に・・・

レ「ふん・・・下らない・・・」

だが死はそう易々と超えさせてくれない

レイの影から3本の特大の影が鎌首をもたげ吸血鬼達を容赦なく貫いて征く

《ブシャア、ブジュツ、バギャツ、グジャア、》

肉が抉られ、骨が砕かれ、鮮血の飛び散る音が響いても彼等は止まらなかつた

目の前の仲間^{自分}が逝き、自分^{自分}が生く

彼等には自分^{自分}が逝つても仲間^{自分}が生つてくれればそれでいいのだ

そして自分も逝き、後の仲間^{自分}に託しながらも彼等は進んでI T T A^{逝った、生った}
やがて、その数を10人以下に減らしながらも彼等は死の影を抜けた

その姿は満身創痍で、果てしなく無様
無事だった者なんて誰1人いなかった

それでも彼等の表情は共通して安堵の表情を浮かべていた

だがこの時、誰一人として気付いていなかった

自分達は別々の方向から進んだのに何故同じ場所から出て来た事に

．

レ「．．．甘い」

彼等の前には絶望が待ち構えていた

そう、この奇跡の様な出来事は始めから仕組まれていたのだ

レイは最初からこの場所にしか逃げられないように影を配置した

そして、それを知らなかった彼等はまんまと誘い込まれたのだ

「そ、そんな．．．」

誰かが．．．もしくは皆が言ったのか

絶望を示す呟きが漏れた

レ「それでは皆さん．．．」

レイは相変わらず全く動じずに腰を大きく左に捻った

レイの手はさつきまでの貫手の様な形ではなく

手を広げ、鋭利な爪が伸びていた

その腕からは、あの死の影が霞んで見える程の
凶悪な死の形が顕現していた

レ「さようなら」

レイはそう呟き腕を振り抜いた

彼等が最期に見たのは視認出来ない程の十二力と
まるで空が割れたかのような爆音だった

.....

その後に残ったのは夥しい程の死体と、むせ返る様な血の匂い
そして無音の静寂だった
まるで嵐の前のーーいや、嵐が過ぎ去った様な静けさだ

だがその静寂の中に.....

《パリイイイイン!!》

突如窓ガラスが割られ喧騒が響いた
其処に現れたのは.....

レ「メイド!？」

メイド服を着た美女だった

どつやらさっきの静けさは嵐の前の静けさだった様だ

第15話 闘争（後書き）

みなさん、いかがでしたか？

久しぶりの戦闘描写だったので上手く書けたか不安です

次の話はレイの正体がばれます

はてさてみんなはどうするのか？

それでは皆さんまた来週〜 (@ _ @)ノ

第16話 闘争の契約（前書き）

泉が・・・枯れた・・・
電波が・・・受信出来ない・・・

第16話 闘争の契約

恭也視点

レイに全てを任せした後、俺はすずかちゃんを抱えて走っていた

恭「ハア、ハア．．．ふう、どうやら追っ手は来ていない様だな」

少し息を整えてから後ろを振り返った

気配も探ってみるが追っ手は全く来ていなかった

無論その理由はすぐに分かった

恭「これも全てレイのお陰か．．．」

気付けばすずかちゃんを助ける事が出来たのは全てレイのお陰だった

突入した時に沢山の敵を引き受けてくれたり

すずかちゃん人が人質に取られた時もレイがすずかちゃんを取り返してくれた

そして今も俺達に追撃の手が伸びない様に1人で戦っている

勿論あの影についてはちゃんと話してもらおうが．．．

仮にレイが俺達と違う存在だとしても受け止めるつもりだ

そうで無ければ忍と恋人にはなっていない

俺がそう考えている時に．．．

悔しい

今まで血の滲む様な鍛錬をして来て・・・
それこそ死ぬ一歩手前の事も何度も経験した
それなのにレイには勝てない

何度やつても・・・何をしても勝てる要素が無い
その余りの強さに・・・
いや、戦ってすらいないのに負けを認めている自分の心に悔しかった
だけど、その悔しさよりも・・・

恭「辛いな・・・」

誰かに戦いを任せて自分だけ別の場所にいるのが辛かった
まるで自分が取り残された様な気がした
そんな遣る瀬無い気持ちに浸っていると・・・

《キキイイイイイイイイ！！！！》

黒いリムジンが目の前で止まった
俺は突然の事で警戒していると・・・

忍「恭也！！すずか！！」

よかった・・・2人とも無事だったのね！！」

車のドアから忍が飛び出して来た

恭「忍か！？どうしてこんな所に」

忍「みんなが心配で居ても立っても居られなくて大急ぎで来たの
ノエルも敵を倒したら直ぐに戻って来るって」

恭「なに！？」

俺はその言葉に耳を疑った
嫌なイメージが全速力で湧いてくる

恭「今すぐノエルを連れ戻すんだ！！」

忍「え？」

恭「訳は後で話す、いいから早く！！」

忍「わ、分かったわ」

忍は渋々と言った様子でノエルと連絡を取る
だが忍のケータイからコール音が鳴る事は無かった・・・

忍「そんな・・・ノエルと連絡が取れないわ！」

恭「クソツ!!」

俺はその言葉に悪態をつく
やっぱり俺の予想通りか

恭「ノエルの無事は確認出来るか？」

忍「え、ええ、連絡が取れないだけで生存信号は確認出来るわ」

恭「・・・そうか」

よかった、まだノエルは無事だったか
だけど決して樂觀できる状態ではない

恭「忍、すずかちゃんを頼む！俺はノエルを助けてくる！」

忍「ちょ！ちょっと恭也!!」

忍が呼び止めようとしたが
俺は止まる事なく走り出した

恭「お願いだ、レイ、ノエルをどうか・・・」

そう呟きながら俺はもう一度ビルに向かって走り出した

三人称

恭也が走り出した時、2人はというと・・・

ノ「ハア、ハア・・・クツ！」

レ「ふう・・・」

2人は互いに向き合っていた。

だが2人の様子は対照的でノエルは肩で息をしている状態。

レイは少しため息をはいていた。

事の発端はこうだ

ノエルが窓を割って入って来た時に、相も変わらずレイがノエルを自動人形だと一発で見抜いたのだ。

更に悪い事に、レイがノエルの通信機を壊してしまい、ノエルが味方だと分かり恭也に確認してくれと言っても連絡が取れず、何よりノエルが全く取り次いでくれないのだ。

そんな状態が続きレイは1人ため息をはいていたのだ。

レ「何度も言ってますが、私は味方です、お願いですから恭也さんに取り次いでください」

ノ「そんな言葉、信用出来ません！お嬢様はどこですか！！」

レ「だから、すぐかさんは恭也さんが連れて行ったんです、

連絡をすれば直ぐに分かりますから・・・」

ノ「貴方が通信機を壊したんじゃないですか！」

レ「だから戦闘を止めて一度恭也さん聞きに行こうと言ってるんです！」

ノ「不信任人物の貴方は信用出来ません！恭也様には会わせません！」

と、まあ、さつきからずっとこんなやり取りが続いているのだ。レイがため息を吐くのも分からなくはない。

ノ「どうしても会いたいと言っのなら、

貴方を捕縛させて頂きます！！！」

そう言ってノエルはレイに向かってブレードを振るう。

レ「おっと」

それをレイは紙一重で躲す。

ノ「避けないでください！捕縛出来ないじゃないですか！！」

レ「だったら首を狙って攻撃しないでください！殺す気ですか！？」

ノ「それをどうにかするのが貴方の役割なんです！」

などと理不尽な事を要求しながら再度レイに向かって駆け出す。

レ「そんな役割は、いりま．．．せん！！」

レイはノエルの腕を掴み、クルツと一回転してノエルを投げる。

ノ「ツ！！．．．この程度！！」

普通なら壁に打ち付けられる所を、ノエルは空中で体制を整え、逆に壁を足場にして先程の倍のスピードでレイに向かう。

レ「おわっと！」

レイは少し驚きながらも、ノエルの攻撃を避ける。

ノ「クツ！．．．これでも当たりませんか」

渾身の攻撃が躲された事に齒噛みをするノエル。

レ「好い加減分かっているんでしょう？

貴女がどう足掻こうが私には勝てません、もう諦めてください」

レイは早くこの無駄な争いを終わらせたい様で、ノエルを諭す。

ノ「．．．仕方ありませんね、こうなったら最後の手段です」

だがノエルはそれでも諦めず、何かを決心するかの様に1人呟く。

ノ「忍様に与えて貰った、私の最後にして最強の技です．．．」

そう言い、右腕をレイに向ける。

ノ「受けてみなさい！！」

その言葉と同時に、ノエルの肘から火花が噴き出し、そして．．．

飛んだ

レ「ロケットパンチ!？」

レイは余りの突拍子の無さに驚いたが、直ぐに持ち直し、首を捻って何とか躲す。
だがロケットパンチの方に目が行ってしまいノエルを見逃してしまった。

ノ「殺りました!!」

そのほんの僅かな隙を見逃さず、ノエルは後ろに回り込んだ。

レ「殺とっていませんよ、それ以前に字が違います」

だがそれでもレイには及ばなかった。

レイは既に、ノエルの方に向き直っていた。

レ「ふう、仕方ありませんね、貴方を無力化させて頂きます」

若干ため息混じりに言っつて、レイは先程、幾人もの吸血鬼達を葬つた貫手の形をとった。
狙うは残ったもう一本の腕、ノエルは既に攻撃を始め、避ける事は出来ない。

レイの腕が突き進もうとした時……

恭「止めるんだ！2人とも！！」

突如恭也が現れた。

ノ「恭也様！？」

レ「恭也さん！？」

突然現れた人物に2人が驚いた。
その時、レイの腕が一瞬だけ止まってしまった。
対するノエルは既に攻撃を始め、最早止める事は出来ない。
なればこそ、結末は必然。

《ぶじゅっ》

肉の裂ける音が聞こえ、レイの頭は胴体と切り離され、ゆっくりと、地面に落ちていった。

恭「そんなっ．．．レイ!!」

恭也は叫ぶが、勿論、その言葉に答えられる訳がない。

ノ「そ、そんなっ．．．まさか、本当だったなんて．．．」

ノエルは恭也の慌て振りを見て、漸くレイが味方だと気付いた。だが時既に遅し、レイの頭は地面に落ち、誰がどう見ても死んでいる。

すずかを助けてくれた方を自分が手を掛けてしまった。

自動人形に血があるか分からないが、ノエルの顔は血の気が引き、まさに顔面蒼白だった。

．．．．．

建物の中は静寂で包まれていた。

恭也は自分が出てきたからレイが死んだ、妹の美由紀やなのはの悲しみ、そんな考えが頭の中をグチャグチャと駆け巡っている。

ノエルもレイを殺してしまった、自分が話しを聞けば、と、後悔の念に駆られていた。

そんな中．．．．．

《ぐぢゅ》

何とも形容し難い音が響いた。

2人は音がした方を向いた、その視線の先は地面に転がったレイの頭だった。

2人の驚きを意に介さず、不気味な音は鳴り止まない。

やがてレイの頭はドロドロに液化化して、まるで意思を持ったかのようにモゾモゾと動く．．．いや、這いずり回る。

そして“ソレ”はレイの足を、胴体を這いずり、やがて切断された首の所に集まった。

其処に現れたのは．．．．．

レ「ふう．．．．．首を刎ねられたのは何百年振りですかね？」

先程、首を切り飛ばされたレイだった。

レ「うん．．．思い出した！首を刎ねられたのは織田信長以来です
ね」

首を刎ねられたと言うのに、1人で勝手に納得しているレイ。
と言うか、信長と会った時に何があったのだろうか．．．

恭「レ、レイ．．．お前は一体．．．」

そんな中、恭也が話しかけてきた。
その顔は畏怖の念一色だった。
まあ、それも無理は無いが。

レ「私ですか？私はいー」

《ガタツ》

レイが答えようとした時、物音が響いた。
其処にいたのは……………

「ひっ！！」

吸血鬼達の生き残りだった。
その姿は年若く、恐らく中学生くらいだろう。

「た、助けてください！お、お願いします！！」

青年は酷く怯え、涙を流し、鼻水を出しながら懇願する。

恭、ノ「……………」

恭也とノエルは一瞬警戒したが、その怯えの様子と年若いと言つ事で武器を仕舞つた。
だが、1人だけそれを許さない者がいた・・・

「アツ！？グ！アアア！！」

レイは一瞬にして青年に近付き、左腕で頭を鷲掴みにして持ち上げた。

恭「レ、レイ！？」

恭也が叫ぶが、レイは一向に止める素振りを見せない。

「ガッ！アアアアアアアア！！！！」

逆に青年から苦悶の音が漏れ、レイの左腕を必死に掴む。

恭「レイ！止めるんだ！！」

恭也も静止の声を掛けるが、一向に止めない

「お、おねが．．．たすげー」

《グシャツ》

青年の懇願は、最期まで聞き入れられる事は無かった。
まるでトマトを握り潰したかの様に青年の顔から肉が飛び出し、腕
はだらんと力無く下がった。

レ「．．．ふん」

レイはその青年だったモノを床に投げ捨てた。
その光景は余りにも非道かった。

恭「レイ．．．」

恭也はその光景を見て怒りを露わにする。

恭「何故殺したんだ．．．」

レ「．．．．．．．．．．」

レイはその問いに答えない。

恭也の怒気は更に膨れ上がる。

恭「あいつは戦う気が無かったんだぞ」

レ「だからどうしたんです」

その怒気をどこ吹く風とばかりに受け流す。

恭「戦う気が無かったんだぞ!!」

レ「だからどうした小僧!!!!」

恭も怒声を出しながら詰め寄るが、その前にレイに胸ぐらを掴まれた。

レ「戦う気が無いだど!? ふんっ、馬鹿馬鹿しい。

こいつ等は今まで人を殺してきたんだぞ!

そんな奴等の願いを何故聞いてやらなくちゃいけないんだよ?

何者かを斃した者は何者かに斃される、それが闘争の契約だ!

殺しには殺しを以って応えねばならない、これは絶対応報なん

だよ!!!!」

恭「だが・・・それでも・・・」

レイに言われた事は確かに正論だ。

だがそれでも恭也は納得出来ず言い返そうとする。

レ「．．．いや、それだ、それが人間の．．．」

その前にレイは何かを呟き、恭也を離す。

レ「すみません、少し熱くなってしまいました」

恭「????」

恭也は何がなんだか分からずポカンとしていた。

ノ「あ、あの．．．」

その中、ノエルはおずおずと声を上げる。

ノ「と、取り敢えず、一度忍様と合流しませんか？」

恭「そうだな、こんな所にいる訳にもいかないしな、レイ、お前も行くぞ」

レ「分かりました」

取り敢えず、さっきの不穏な空気は霧散した。
この事に心の中で安堵のため息を吐きながらノエルは2人を先導し
た。

第16話 闘争の契約（後書き）

インスピレーションの泉が枯れ、電波も受信出来ない今の状態では定期的に更新するのが難しく、読者の皆様には大変申し訳ありませんが、更新を不定期にさせていただきます、出来るだけ月曜日に更新しますが、出来ない可能性もあるので、読者の皆様には何卒ご理解頂けるようお願い致します。

ストックを十分に確保したら、月曜更新に戻します。

それでは皆さん、またいつかm（ ）（ ）m

第17話 吸血鬼×吸血鬼(前書き)

な、なんと．．．()。()ノ)

ユニークが10,000突破しました。

読者の方々に何とお礼の言葉を言えはいいのか．．．
とりあえず一話は仕上げたので更新します。

これからも応援宜しくお願い致しますm() () m

第17話 吸血鬼×吸血鬼

レイ視点

〜月村邸〜

恭也さんと一悶着ありましたが、
ひとまず落ち着き、私達は月村邸に着きました。

忍「初めまして、私は月村家の当主で月村忍と申します。

この度は 妹のすずかを助けてくれてどうもありがとうございます
います」

忍さんは私の前で深々と頭を下げた。

ノ「私はノエル・K・エーアリヒカイトと申します。

先程は大変申し訳ありませんでした」

ノエルさんも深々と頭を下げ、謝罪の言葉を述べる。
あまりこう言うのは好きじゃないんですね。

レ「いえいえ気にしないで下さい。

あつと、私はレイ・D・クロムハイツと言います」

私は特に気にせず自己紹介をする。

忍「え？．．驚いたわ、レイ君と同んなじ名前だったなんて」

あら、と言う事は未来の私と会った事があるんですか。

レ「そうなんですか、それは奇遇ですね」

まあ、言う必要もありませんし、
言っても信じて貰えないですし、
ここは知らぬ振りでもしておきましょう。

レ「それでは、早速本題に入りましょうか」

早く帰らないとはやて達も心配しますし、
話を済ませちゃいますか。

忍「そうですね、そうしましょう」

忍さんも私の言葉を聞き、姿勢を正した。
成る程、ここからは月村家の当主としての対応と言う事ですか。

忍「単刀直入に聞くけど、貴方は一体何者なの？」

首を切られたのに再生したと、ノエルから報告を受けたのだけ
「ど」

やっぱりその事ですよね。

恭也さんには【影の尖兵】を見せちゃいましたし、
言い逃れは出来ませんか。

レ「何者ですか．．．私はー」

?「あ、あの．．．失礼します．．．」

私が喋ろうとした時、ドアからメイドの女の子が出てきました。
うん?この子はノエルさんと同じで人ではありませんね。

ノ「ファリン、何の用ですか？」

お客様に失礼です」

ファ「も、申し訳ありません！」

おねーさま達に紅茶をお持ちしようと思って．．．」

ファリンと呼ばれた女の子は頭を下げる。

おねーさまと言う事はノエルさんの妹と言う事でしょうか?
確かにノエルさんと似ていますね。

レ「いいじゃないですかノエルさん。

私は全然気にしてませんよ」

この子なりに気を遣ったのでしよう。

こう言う好意は無下にする物ではありません。

レ「それに、少し喉が渴いていましてね、

すみませんが、お願い出来ますか？」

ファ「は、はい！かしこまりました！！」

ファリンさんは私の言葉が嬉しかったのか、スキップをしそうな勢いで紅茶を運ぶ。

ファ「あわ！？．．わわわわ．．わた！！」

ところがファリンさんは急にバランスを崩し、遂には何もなかったところで躓いて仕舞いました。どうでもいいんですけど、何もないところで躓くなんてある意味、才能だと思いませんか？

おっと、話しがズレて仕舞いましたね。

ファリンさんの手から離れたティーカップ達は、

空中でキレイな放物線を描き、
絶賛私に殺到中です。

ふむ、私1人だと全部取るのは難しいですね。
仕方ありません、ここは影でも使いますか。
恭也さんにも見せていますし、今更問題無いでしょう。

ファ「え？．．．え？え？」

私から延びた影はファリンさんを支え、
宙に舞ったティーカップ達は全てキャッチしました。

レ「大丈夫ですか？」

ファ「は、はい．．．大丈夫です」

レ「良かった、大事がなくて何よりです」

私はファリンさんの無事を確認したあと、
ファリンさんをゆっくりと立たせ、
紅茶をテーブルに並べて行きました。

レ「さて、私の正体でしたよね？私は――」

私は一口紅茶を飲んで、言葉を紡ぐ。
あ、この紅茶美味しいですね。

レ「吸血鬼と言う存在ですよ。

名前で言えば忍さんと同じですね」

忍「吸血鬼ですって!?!」

私の言葉に驚きの声を上げる忍さん、
よく見たら他の2人も同んなじ表情をしていますね。

そう言えばファリンさんも居たんですよね、
ファリンさんだけポカンとしていますけど、
まあ、大丈夫でしょう。

忍「あり得ないわ!夜の一族は首を切られて再生しない
それに、さっきの様な能力も持っていないわ!」

レ「まず、その夜の一族と言うところで間違っていますね」

私は忍さんの言葉に訂正をする。

レ「確かに私は吸血鬼ですが、忍さん達夜の一族と大きく異なっている点が多々あります。

まず最初に、忍さんは不老不死ですか?」

忍「い、いえ、夜の一族は長寿であって不老不死では無いわ」

レ「そこがまず可笑しいんですね、

忍さんは純血種なのに不老不死じゃない、

その時点で私は夜の一族と言う者ではないんですよ」

忍「夜の一族では無い、他の吸血鬼・・・まさか・・・」

おや、忍さんはどうやら心当たりがあるみたいですね。

忍「もしかして・・・始まりの夜？」

レ「始まりの夜？」

何でしょう？聞いた事がありませんね。

忍「私達夜の一族に伝わるおとぎ話の様な物よ、

夜の一族より遙か昔に存在していた原初の吸血鬼。

1000年以上前に姿を消したらしいけど、

確かその純血種は不老不死だと聞いているわ」

成る程、1000年以上前に・・・

確かに一族を皆殺しにしたのはそれ位でしたね。

レ「そうですか、その話しを聞く限り、

私は始まりの夜と言う者らしいですね」

忍「まさか！．．．それじゃあ本当に．．．」

レ「ええ、忍さんの思った通り、

私は純血種、真祖にして不老不死の吸血鬼です」

あ、皆さん凄く驚いていますね。

まあ、無理ありませんか、

なんたつて不老不死ですからね。

ちなみに不老不死と言っていきますけど、実は私も死ねるんですよ？
ただ肉体の損傷だけでは死なず、魂そのものを殺すような．．．
例えば【有償の奇跡】で魂を殺したら私も死ぬですよ。

不老不死と言うよりも、不老不死身と言った方が正しいですね、こ
こ、重要ですよ？

つて、私は一体誰に話しかけているんでしょうか？
そんな事よりも．．．

レ「すみません、おかわりをお願い出来ますか？」

ファ「は、はい、かしこまりました」

紅茶がなくなつたので、おかわりをしましょう。

それにしても、この紅茶は美味しいですね。

あとで分けて貰えないでしょうか？

恭「レイ．．お前って奴は．．．」

忍「なんと云うか．．威厳が無いわね」

恭也さん忍さんは呆れた様子でした。

レ「重たい空気は苦手なんです」

それから緊迫した空気はなく、皆さんと他愛ない会話を楽しんでいました。

~~~~~

忍「と言う事で女装してみない？」

レ「何故その会話になるのか分かりませんが、全力で辞退させて頂きます」

どうやら忍さんも、はやてと同じ側の人みたいです。

忍「残念ね、またの機会にしましょう」

次の機会もありません、諦めて下さい。  
そんな会話をしていると・・・

す「お姉・・・ちゃん」

ドアからすすかさんが出てきました。  
どうやら薬が切れたみたいで、目を覚ました様ですね。  
目をゴシゴシと擦っています。

忍「あら、目を覚ましたのね、すすか」

す「うん・・・誰？お客さんが来てるーレイ君？」

あら、すすかさんも未来の私の事を・・・

忍「違うわよ、確かに同んなじ名前だけど、別人よ」

本当は同一人物なんですけどね。

す「そうだったんですか、いきなりすみませんでした」

レ「いえいえ、気にしないで下さい」

未来の私はどれだけ交友関係を持っていたのでしょうか？  
少し気になりますね。

忍「残念だったわね、初恋の人じゃなくて」

レ「ブツ!!」

す「お、お姉ちゃん!!」

突然忍さんが爆弾発言したので反応してしまいました。  
忍さんはまるで悪戯が成功した子供の様な表情でした。

忍「あら？なんで貴方まで反応しているのかしら？」

マズイ、矛先が私に・・・

レ「い、いえ、別に・・・」

忍「ふん、そう、それでね、すずかったら・・・」

す「ヤメテエエエエエエエエエエ!!!!」

それから忍さんが延々と、すずかさんをからかい、私は、すずかさんが未来の私に抱いている気持ちを聞かされる羽目になりました。

結構恥ずかしいものですね・・・

すずかさんに至っては体の色素が抜けていますし。

あ、口から靈魂が・・・

レ「・・・ていつ!」

す「はっ!・・・あ、あれ?わたしは・・・」

レ「・・・思い出さない方がいいです」

寧ろ私が忘れたいくらいです・・・

と、まあ、愉快?な会話をしていたら日がくれてしまいました。

忍「今日は本当に感謝するわ」

忍さんは今日の事で改めて頭を下げる。

結局、誘拐の事はすずかさんに話しませんでした。

子供に話すには血生臭いですからね。

レ「お礼を受ける資格なんてありませんよ」

最初は見捨てようか悩んでいましたしね。

レ「こちらこそ茶葉を分けて頂きありがとうございます」

ノエルさんに話したところ、茶葉を分けて頂きました。  
いや、良いお土産が手に入りました。

レ「それでは、機会があればまた会いましょう」

早く家に帰って皆んなに飲ませてあげましょう。  
私は皆さんに一礼した後、家へと帰って行った。

（その後の月村邸）

忍「どうだった？ノエル」

ノ「はい、声紋、網膜、全てレイ君と一致していました」

忍「つまり同一人物って事？」

ノ「確実にそうかと・・・」

忍「じゃあなんで知らない振りを？」

ノ「私にも分かりません」

忍「ふん、まあいわ、それよりも・・・」

す「お、お姉ちゃん・・・」

忍「良かったわね、すずか、想い人に気持ちを伝えて」

す「いやあああああああ！！！」

なんて事がありましたとさ。

す「うう~~~~~、穴があつたら入りたいです・・・」

第17話 吸血鬼×吸血鬼（後書き）

ストックを貯めるんだ、俺……



第18話 命の期限（前書き）

ようやく本編に少し入ります。

## 第18話 命の期限

レイ視点

シグナム達が家族になって4ヶ月、  
最も恐れていた事態が起きました。

シ「命の・・・危険？」

シャ「はやてちゃんが!？」

2人はその事実には驚愕している。  
嘘であつてほしいと・・・

石「・・・ええ」

だけど石田先生から出た言葉は変わらない。

石「はやてちゃんの足は、原因不明の神経性麻痺だとお伝えしまし  
たが、

この半年で、麻痺が少しずつ上に進んでいるんです。

この2ヶ月は、特に顕著で・・・

このままでは、内臓機能の麻痺に発展する危険性があるんです」

その言葉に、私達の頭は真っ白になった・・・

~~~~~

シ「何故！何故．．気付けなかったっ！！」

石田先生が去った後、シグナムは壁を叩きつけた。

シャ「ごめん．．ごめんなさい．．私．．」

シャマルは両手で顔を覆い、涙を流す。

シ「お前にじゃない、自分に言っている．．」

シグナムの顔は、はやての病状に気付けなかった事に、後悔の念一色だった。

レ「仕方ありませんよ、シグナムは騎士であって医者ではありません。
ん。

気付けないのも無理はありません」

シ「そうじゃないっ．．そうじゃないんだ、レイ」

レ「．．．．．どつどつ言っ事です？」

シ「主はやての足は病気で動けないんじゃない、
全ての原因は闇の書の呪いなんだ．．．」

レ「呪い．．．ですか．．．」

シ「そうだ、主はやてが生まれた時から共にあった闇の書は、
主の身体と密接に繋がっていた。

抑圧された強大な魔力は、リンカーコアが未成熟な主の身体を
蝕み、

健全な肉体機能どころか、生命活動さえ阻害していた、
そして、主が第一の覚醒を迎えた事で、それは加速していった
んだ」

レ「．．．．．．．．．．．．．．．．」

成る程、何故私の【有償の奇跡】が効かなかったのかこれで分かり
ました。

ただの病気ならまだしも、私の知らない力によって起こされていた
のなら原理が構築されず不発に終わる。

確かに私の知らない魔法の力なら私の【有償の奇跡】は意味を為さ
なくなる。

シ「私がつ！！闇の書の一部である私が気付かなければいけないかつ
たんだ！！

それなのにつ．．．．私はっ！！！！」

シグナムは後悔の念と共に、また壁を叩きつける。その手からは血が滲み出ていた。

レ「シグナム、それ以上は・・・」

シグナムを止めようと肩を掴んで向き直したら、その目からポロポロと涙を流していた。

シ「レイ・・・私・・・どうすればいいんだ？」

レ「シグナム・・・」

気が付いたら私はシグナムを抱き締めていた。

レ「はやての事はみんなで何とかしましょう、

大丈夫です、きっと何かできる事がある筈です。

だから1人で抱え込まないで下さい・・・ね？」

シ「レ・・・レイツ・・・うああ・・・あああつ」

シグナムは私の胸で泣き続けた。

全く、1人で溜め込み過ぎなんですよ、

でもそれだけ、はやての事を大事に思っているんですよね、兄としては嬉しい限りですよ、ホントに。

私は暫く、シグナムが落ち着くまで背中を摩っていた。

~~~~~

シャ「で・・・もう終わりましたか？」

シグナムが落ち着くのと同時にシャマルが声を掛けた。

レ、シ「~~~~~つ／／／／／」

私達は慌てて体を離れた。

シグナムは恥ずかしさで顔を真っ赤にしていました。

多分私も真っ赤になつてる筈です、顔が少し熱いです。と、とても恥ずかしいです・・・

シャ「全く、はやてちゃんの事は分かりますが、

少しは自重してください」

レ「す、すみません・・・」

シ「すまなかつた・・・」

私達はシャマルに謝る。

シャ「さあ、早くみんなを集めて事情を説明しないと、  
2人とも行きますよ」

シャマルはそう言い、病院を後にした。

レ、シ「……………」

後に残った私達に気まずい空気が流れた。

レ（き、気まずいです、何とかこの空気を……）

そう思って悩んでいると、シグナムと目が合った。

レ、シ「っ／＼／＼／」

目が合った瞬間、私達は慌てて目を反らした。

ダ、ダメです、変に意識して目が合わせられません！

ああ！顔がどんどん熱くなってしまいました！

永く生きてますけど、ここの言う事は慣れていないんです。

シ「レ、レイ．．．．」

するとシグナムが声を掛けてきた、  
勿論向こうも顔は真っ赤です。

ちなみにシグナムは泣いていたので、  
ちょっとだけ目の付近が赤くなっています。

レ「な、なんででしょう?」

シ「その．．この事はお互い忘れよう．．．な?」

レ「そ、そうですね、そうしましょう．．．」

確かにこの事はお互いに忘れた方がいいですね、  
でも、そんな簡単に忘れれるでしょうか?

なにせ、いつもは冷静のシグナムが目をウルウルしているんですよ?  
あんな可愛い姿のシグナ．．ゲフンゲフン、なんでもありません、  
だから鋭い目つきでデバイスとやらに手を掛けるのはヤメテ下さい、  
シグナム。

レ「それじゃあ．．私達も戻りますか」

さっきとは別の、気まずい空気（主に私）が漂ってきたので、  
私達もシャマルを追って病院を後にしました。



~~~~~

石田先生から、はやての命の危険を知らされた後、はやてが寝静まった夜に皆んなを集めた。

ヴィ「なんだよ？急に呼び出したりして」

ヴィータは眠いのか、欠伸を我慢して問いかける。

レ「すみませんねヴィータ、実は大事な話があるんですよ、
そう、とても大切な話しが・・・」

ヴィ「・・・どう言う事だ？」

ヴィータも私の言葉にただならぬ雰囲気を感じ取ったのか、目付きを真剣なものに変える。

シ「実は、主はやてに命の危険が迫っているんだ」

そしてシグナムが、はやての病状を皆んなに伝えた。

シ「……それは、私達4人の活動を維持するため、ごく僅かとは言え、主の魔力を使用している事も無関係とは言えない筈だった……」

病院での説明に加え、更に深くを説明するシグナム。

ザ「……っ!?!」

ザフィーラはその事実言葉に言葉を失った。

まさか自分達のせいで、はやてが命の危険に晒されているなんて思いもしなかつたんでしょね。

全く、はやてが欲しがっていた家族が、はやて自身の寿命を縮めるなんて、

これを皮肉と言わずして何と云うのでしょうか。
生憎私は無神論者ですが、もし、神と云う者がいるのなら、こんな運命を仕組んだ神を殺してやりたいですね。

ヴィ「……助けなきや」

するとヴィータが何かを呟いた、

ヴィ「はやてを、助けなきや!?!」

肩はプルプルと震え、次第に感情は大きく膨らみ、
シャマルの肩を掴んだ。

ヴィ「シャマル！、シャマルは治療系得意なんだから！？」

そんな病気くらい、治せよお！！」

ヴィータは涙を流しながらシャマルに懇願する。

シャ「・・・ごめんなさい、私の力じゃ・・・どうにも」

だがシャマルの口から出た言葉は“できない”と言う悲痛の言葉。

ヴィ「レイ！確か前に“大概の事は出来る”能力があるって言ったよな！？

それを使えばはやての病気も・・・」

ヴィータは私が前に言った【有償の奇跡】を思い出したのか、
私に最後の望みを賭ける、だが私も同じく・・・

レ「すみません、私の能力はその事柄を理解しないと効果がありません、

“魔法”と言う未知の力の前では私の能力は意味を為さないんで

す

口から出る言葉は“できない”と言う言葉だけ。
私もその言葉に悔しさを噛み締めた、
ヤバイ、口から鉄の味がしてきました。

ヴィ「なんで．．．なんでなんだよお！！」

ヴィータはその事実には涙を流した。

ザ「シグナム．．．レイ．．．」

シ「．．．我等に出来る事は、余りに少ない．．．だが」

レ「ええ、だけど0じゃない、出来る事はある！」

はやてを見捨てはしない、どんな少ない確率でも継り付いてみせる。
例えそれが、0に限りなく近いものであると。
私達はそう決心し、拳を握りしめた。

だけど、解決策はすんなりと決まった。

レ「蒐集．．．ですか．．．」

シ「そうだ、主の身体を蝕んでいるのは、不完全な覚醒をしている
闇の書の呪いだ」

シャ「はやてちゃんが、闇の書の主として真の覚醒を経れば」

ザ「我等が主の病は消える、少なくとも進みは止まる」

ヴィ「はやての未来を血で汚したくないから人殺しはしない、

だけどそれ以外なら、なんだってする！」

シグナムとヴィータは剣と鎚を構えた。

どうやらアレが魔導師の武器であるデバイスと言う物らしいです。

シ「申し訳ありません、我等が主、ただ一度だけ、

貴女との誓いを破ります」

すると、4人の足元を囲む様に黒い三角形の模様が現れた。

次第に4人の服は姿を変え、それは私とはやてで考えた騎士甲冑になった。

成る程、コレが魔法と言うやつですか。

シ「我等の不義理を、お許し下さい！」

すみません、はやて、優しい貴女の事だから、

こんな私達を見たら怒るでしょうね。

だけど、それでも私達は貴女が死ぬなんて嫌なんです。

だって貴女は私の・・・私達の・・・

―――大切な家族なんですから―――

そして私達は、この世界から姿を消した。

第18話 命の期限（後書き）

くそ

シグナムのフラグ強化しか出来ない

はやてやヴィータのフラグも強化したいです

第19話 蒐集開始(前書き)

不定期と言っておきながらちやっかり月曜日に更新出来てる俺・
定期更新に戻そうかな(^ | ^ ;)

またも文の構成を変えました。

安定しないな

第19話 蒐集開始

レイ視点

と言う事でやって来ました次元世界。

レ「ほお、ここが次元世界ですか」

着いた世界は暑い日差しが照り付き、
砂漠が辺り一面に広がる砂漠世界、その景色は正しく・・・

レ「・・・ゴビ砂漠？」

おっと、以前行ったゴビ砂漠を思い出して仕舞いました。

ザ「レイ・・・余りふざけるなよ・・・」

シ「そうだぞ、一瞬の気の緩みが死に直結するんだ。

何時でも対応出来るように構えとけ。

敵は何時、何処で出てくるか分からないぞ」

ザファイラとシグナムに怒られて仕舞いました。

確かに初めての事なので、

少し浮かれてたかもしれませぬね。

反省です。

レ「そうですね、肝に命じておきます。

っと、どうやら言った傍からお出ましのようですね」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

私の言葉にみんなが警戒した。

シャ「何処にいるんですか!?!」

レ「ふむ．．．どうやら下に．．．この砂の中に居るみたいですね。

私達がこの世界に来た時から集まって来たようです。

数は．．．．．ざっと4匹ですね」

ヴィ「来た時って．．．何で最初から言わなかったんだ!?!」

レ「ごめんなさい、気のせいかと．．．」

初めて来た世界に浮かれてた、なんて口が裂けても言えませんね。

シ「無駄話は後だ!みんな構えろ!!!」

シグナムの一喝にみんなが構えた。

成る程、烈火の将の名は伊達じゃないですね。
さてと、巫山戯るのはここまでにしておきますか。

「グオオオオオオオオオオオオ！！！！！！」

みんなが構えたと同時に砂が吹き上がり、
出て来たのは蛇とも竜とも言えない生物でした。（第6話でヴィー
タが戦ってたアレです）

レ「これが異世界の生物——何をボケっとしている！逃げろレ
イ！！」．．ん？」

気付いたらシグナム達4人は空に浮かんでいた。
当然私は地上に残ったまま、
砂竜（取り敢えず命名しました）は、
私に向かって一直線に突進して来ました。

レ「面白い．．力勝負といきますか」

私はそれを真っ向から受け止める

レ「ふっ！．．．うおおおおおおお！！！！！！」

砂と言う足場の悪さのせいで数十m押されましたが、何とか押し止めました。

「グツ？オオオオオ・・・」

砂竜は押し止められたのが予想外だったのか、戸惑いの声を上げている様に聞こえました。

レ「ぶっっい・・・しょっ！・・・」

私は砂竜と向き会った状態から身体を半回転し、丁度背中に背負う様な形で砂竜を投げた。柔道で言う“背負い投げ”ですね。

「グオオオオオオオオオ！？」

投げられた砂竜は、もう1匹の砂竜とぶつかり、2匹とも目をグルグル回して気絶した。

レ「1本！、よし次です！！」

私は気合いを入れ直して、残る2匹を見据える。

「グ．．オオオオオオ．．．．」

2匹の砂竜は仲間が沈められたのを見たせいか、私に怯え、後ずさり、見事な逃げ腰。

「オオオオオオオオ！」

そして対に砂竜は私から逃げ出した。

《ガシャンツ》

突如力の昂ぶりを感じ、空を見上げてみると、シグナムは剣を鞘から抜いたと同時に、剣は激しく炎を纏い、ヴィータの鎚は形を変え、片方をスパイクに、もう片方はジェット噴射しながらクルクルと回っていた。

シ「紫電一閃ッ！！」

ヴィ「ラケーテンハンマー！！」

シグナムは炎を纏った剣で砂竜を斬りつけ、
ヴィータは回転の力を威力に加え、
砂竜を叩き付けた。

「グルオオオオオオオオ！！！」

砂竜は苦悶の声を上げながら、
地面に自らの身体を沈めていった。

シャーーーーー蒐集」

シヤマルが闇の書を広げると、
砂竜から光の玉が浮かび上がり、
ソレは闇の書に吸収されていった。
どうやらアレがリンカーコアと言う物らしいですね。

シ「レイ、大丈夫か？」

シグナム達は地面に降り、私の無事を確かめる。

レ「ええ、何ともありませんよ」

まあ不老不死ですからね、
仮に心臓が吹き飛ばされようと死にませんよ。

レ「しかし、これが魔法を使った戦いですか・・・
いささか私の思っていた物と違いますね」

私の想像ではデッカい光線とかが出てくると思ったんですけど・・・

シ「我々の使う魔法はベルカ式と言われて近接特化型だからな、
遠距離での攻撃方法ほ殆ど持っていないんだ」

レ「成る程、魔法にはそういった形式があるんですか」

魔法にも色々あるんですね。

レ「それにしても、どうして砂竜は私達が来た瞬間に向かって来た
んでしょうね？」

シ「砂竜？ああ、こいつ等の事が、
どうやらこいつ等の餌は魔力を持つ生物の様だな、
膨大な魔力を持っているお前に気付いたのだろう」

.....あれ？

レ「ちょっと待って下さい、

私にも魔力があるんですか？」

シ「あるぞ、我々よりも遥かに膨大な量がな、

私もこれだけの量を持っている奴は見た事がない」

レ「それなら最初っから言っして下さいよ。

私の魔力も蒐集出来るんでしょ？」

シ「もちろん蒐集できー！まさか！？」

レ「そのまさかです、私の魔力を蒐集してください」

そんなに沢山あるなら寧ろ蒐集すべきです。

はやてを助ける為なら私の身体など、

幾らでも捧げますよ。

シャ「本当に.....いいんですか？」

レ「お願いします、なに、私の事なら心配いりませんよ」

私の身体は再生を始めた。

シャ「うそ．．．本当に治っていく．．．．．」

シヤマルは私の再生力に驚いている。

私が不老不死と言ったのを忘れているのでしょうか？

レ「言っただでしょ？私は不老不死だと」

ふむ、どうやら完治してみたですね。

それにしても壮絶な痛みでした。

危うく発狂するんじゃないかと思いましたよ。

レ「どうやらリンカーコアは心臓に近い位置にあるみたいですね。

何度か潰れかけーあれ？」

私は立ち上がろうとしたが、足に全く力が入らなかった。

よく診ると身体全体が疲労で力が入らなかった。

どうやらコレもリンカーコアの蒐集が原因みたいですね。

懐かしいですね、疲労を感じるなんて何百年振りでしょう。

シ「レイ．．．．．」

気が付くと疲労で立てない私の目の前にシグナムが立っていた。

レ「シグナー―わぷっ」

シグナムを見上げようとした瞬間、

私の視界は2つの柔らかいものによって遮られた。
つて、こ、これはシグナムのむむ、胸!?

レ「シ、シシシシ、シグナム!?! なな、何を!?!」

シ「.....」

私が問い掛けるがシグナムは全く反応しない。
寧ろ抱き締める力が強くなってきた。

おおおお、落ち着くんです私!!

そ、そうだ! こんな時は素数を数えるんです!!

1と自身の数でしか割り切れない孤独の数字を今!!

2、3、5、7、11、13、17、19、23、29.....

《ポタ》

素数を数えていると、私の頬に水滴が落ちた。
私は視線を上に向けると・・・

シ「バカ者、誰がここまで無茶をしると言った・・・
あんな苦しそうな声を上げて・・・本当に心配したんだぞ・・・
死んでしまうんじゃないかと思ったんだぞ・・・」

シグナムは涙を流していた。

レ「シグ・・・ナム・・・」

シ「お願いだ・・・もう二度と無茶しないでくれ。
例えお前が不老不死であつたとしてもだ。
お前が傷付く姿は見たくない」

シグナムはそれつきり黙ってしまいました。
不老不死の私の身を案じてくれるなんて・・・
本当に私の家族は良い人達ばかりですね。
私は了解の意を込めて静かに頷いた。

~~~~~



く八神家

と言う事で着きました我等のMy home八神家

シ「レイ、着いたぞ」

レ「ええ、見れば分かりますよ。

そろそろ降ろしてくれませんか？」

好い加減この恥ずかしい体勢を何とかしたいです。

シ「しかし……」

レ「大丈夫ですよ、もう完全に治りました。

1人で立てますから心配ご無用です」

私は大丈夫の意を表すため両手でガッツポーズの形をとる。

シ「……分かった」

シグナムも何とか納得し、私を降ろしてくれました。

レ「と、とととっ!? わぶっ」

ですが足に全く力が入らずバランスを崩してしまい、シグナムの肩にぶつかってしまいました。

シ「全然治っていないではないか・・・」

レ「め、面目ないです・・・」

シグナムの呆れた声に只平謝りするだけでした。

シ「ほら、肩に掴まれ」

レ「重ね重ね申し訳ありません」

シグナムの肩に捕まり、何とか立つ事が出来ました。と言うか、最初っからそうして欲しかったです・・・

レ「あれ?・・・なんか・・・急に眠気が・・・」

疲れが最高潮に達したのか、急に眠気が襲って来ました。眠気を覚えるのなんて、疲れと同じで何百年振りでしょうか。



シ「全く仕方のない奴だな、ほら、横になれ」

シグナムは私をソファーに寝かしつけた。

レ「本当に・・・今日はすみませんね・・・  
でも・・・何故膝枕なのか聞いても？」

シ「・・・何となくだ」

だめです・・・突っ込む気力もありません・・・

レ「・・・そう・・・ですか・・・」

それと・・・どうしてヴィータは私のお腹の上に頭を？」

ヴィ「・・・あたしだって心配したんだぞ、

あんな無茶しやがって・・・・・・バカ」

レ「は、はは・・・皆んなには迷惑を掛けてばかりですね・・・  
申し訳・・・ないです・・・」

だめですね・・・眠気で上手く考えられません。  
むくれた顔のヴィータが可愛くて、つい撫でてしまいました。

ん・・・どつやら限界みたいですよ・・・

レ「ああ・・・どんどん瞼が重く・・・

すみませんが・・・先に眠ります・・・

いやぁ・・・寝るのなんて・・・何百年・・・振り・・・」

そして私は、意識を闇に沈めていった。

シグナム視点

レ「すう・・・すう・・・すう・・・すう・・・」

レイは目を閉じたと思ったら、直ぐに眠りだした。  
余程疲れていたのだろうか。

それにしても眠るのは何百年振りだと？

今まで私達が寝ている間、レイは一度も寝てなかったのか、  
目を覚ましたらキツチリ問い詰めてやろう。

だが・・・

シ「今はゆっくり休め、疲れを癒すんだ」

私は優しくささやき、レイの髪を撫でた。

髪はサラサラと私の手を流れ、まるで黒い砂金のように煌めき、  
その顔はまるで不可侵の神秘さを思わせるような幻想的な寝顔だっ

た。

シ「女として嫉妬してしまうような美しさだな」

その言葉に私自身が驚いた。

思い返せば私は、私自身を女とし見ていなかった。

私は剣、主の命で相手を傷付けるただの“力”だった。

その事に何の戸惑いも無かった。

だがこの数ヶ月で私は変わった。

頭を撫でられた時はとても嬉しかったし、

レイに抱き締められた時は恥ずかしくて、どうにかなりそうだった。

何よりレイの前では1人の“女”として見てほしかった。

シ「そうか・・・私はーー」

私はその事を思っただけで初めて自分の気持ちに気付いた。

シ「なあ、ヴィータ」

ヴィ「・・・あんだよ」

シ「私はレイが好きだ」

ヴィ「なっ!? すすす、好きって・・・」

シ「もちろん、“1人の女”としてレイが好きだ。  
お前もそうなんだろ？」

あれだけの反応を見せれば誰だって分かる。  
まあ、約一名分かっていないのがいるが・・・

ヴィ「お、おう！あたしもレイが好きだ！

シグナムが言う“好き”かどうかは分からねえけどな・・・  
だけど・・・レイと居ると胸がポカポカして幸せなんだ」

そう言うと、ヴィータは本当に幸せそうな顔をした。  
あんな顔したヴィータは初めて見たな。

シ「そうか・・・それなら私達はライバルだな。

言っておくが絶対に譲らんぞ？」

ヴィ「おう！あたしも絶対に負けねえからな！！」

ヴィータはそう言い、闘志を燃え上がらせた。  
これでお互いに正々堂々と戦える。

・・・レイ。

私はまだお前に気持ちを伝えられない臆病な女だ、  
だが、いつかお前に私の気持ちを伝えてみせる。  
だからそれまで待っていてくれ。

私の愛しき人よ。

第19話 蒐集開始(後書き)

だあ~~~~!!!!

シグナムのフラグしか強化出来ない!!

他のキャラとイチャイチャしたい!!!!

第20話 久々のお目覚め(前書き)

うおおおおおおおおお!!!PV100、000突破!!!  
皆んなありがとおお!!! O ) ( O

そして偶然か必然か、今回はギャグ回です。

え?そんなもんより話しを進めろって?

ははは、ストックが無いんですよ(――;) )

つてそこ!自分の実力考えろと言わない!!!全く以ってその通り  
なんだから。

と言う事でどうぞ(^O^)/

## 第20話 久々のお目覚め

はやて視点

は「なんや．．．これは．．．．．」

私は目の前にある光景の言葉を失った。  
私の目の前にあつたのは．．．．．

レ「すう．．．すう．．．すう．．．」  
シ「．．．．．コク．．．コク．．．」  
ヴィ「んゝ．．．．．」

レイ兄いに膝枕しているシグナムと、  
レイ兄いのお腹の上で幸せそうな寝息を立てているヴィータ、  
そして何より驚いたのは．．．

は「レイ兄いが．．寝とる．．．」

レイ兄いが寝ていたんや。

一回でも良えからレイ兄いの寝顔を見ようと、  
早起きもしたし、夜更かしもした。  
だけどレイ兄いはいつも起きていたんや。



そのレイ兄いが今寝ているんや。

レ「すう．．．すう．．．んに」

そにしてもレイ兄いの寝顔は綺麗やな  
これで男って言うのが信じられんわ。

てか「んに」って．．．

レイ兄い、可愛すぎやろ．．．

なんか急にレイ兄いが幼く見えてきたわ。

は「って、なに感慨にふけっているんや！何やこの場面！！

ギャルゲーか！？これギャルゲーなんか！？」

私はこの羨ましい場面に叫んだ。

だってシグナムはレイ兄いに膝枕してるし、

ヴィータのあの幸せそうな寝顔。

めっちゃ羨ましいやん！！

シ「ん．．．主はやて．．．おはようございます」

ヴィ「あ、はやて．．．おはよ」

私の声に2人が目を覚ました。

ちよっと申し訳ない気持ちやったけど、

其れと此れとは話しが別や。

は「おはようさん、2人とも」

私は2人に笑顔で語りかける。

それはもう虫も殺せない程の満面の笑みで。

は「さて、詳しく話しを聞かせて貰おか？」

シグナム視点

は「さて、詳しく話しを聞かせて貰おか？」

主はやては私達に笑顔でそう語りかけた。

それはもう満面の黒い笑みを浮かべて。

は「何でこんな嬉し羨ましい状態になっているんや？」

シ「え？・・・」

私はその言葉に訳が分からず、周りを見た。

私の周りには目をシヨボシヨボとしているヴィータと、

相変わらず黒い笑みを浮かべている主はやて、  
そして私の膝には……………

「シレ!? レレレレ、レイ!?」

穏やかな寝息を立てているレイがいた。  
思い出した、蒐集が終わった後レイを膝枕したんだ。  
どうやら私達はそのまま眠ってしまった様だ。

は「ええな、シグナムはレイ兄いに膝枕、

ウィータはレイ兄いのお腹でグツスリと、

羨ましいな、なあ? 2人とも?」

《ビクッ!》

マ…マズイ…

主はやての黒い笑みがより一層濃くなった。

マズイぞ…この状況は非常にマズイ…

ヴィ(シ、シグナム…はやてが怖いよ…)

ウィータも主はやての只ならぬ雰囲気には怯えている。  
落ち着くんだ…こんな時にこそ冷静になるんだ、

…そうだ!!

シ「お、おい、起きるんだ！起きてくれレイ！！」

レイを起こして、この場を任せよう。

決して逃げた訳でも転嫁した訳でもない。

私はレイを起こそうと体を揺するが...

レ「.....んにゃ」

レイが私の腰に手を回してきた。

シ「ひゃ！」

妙なくすぐったさで思わず変な声が漏れてしまった。

ええい！可愛いではないか！！

だが残念なことに今はそれ所ではないのだ。

主はさっきのを見て眉をピクピクと動かしている。

最早、体からは黒いオーラが漏れていた。

シ「レイ！お願いだ起きてくれ！！」

私は更にレイを揺するが...

レ「んふふ〜．．．．．み〜んな大好きですよ」

レイは手を離してくれない。

くそっ！私も大好きだ！！

レイの手はきつ過ぎず、ゆる過ぎず、絶妙な力だった。

それが何とも心地良く．．．．．

イカンイカン！そんな気持ちに浸っている訳にはいかないんだ！！

シ「好い加減に．．．起き．．．ろっ！！」

今度は剥がすような形でレイを揺すった。

レ「んにゅ〜！．．．．．へぷっ」

だが力が強すぎたみたいで、

レイは床に顔面から落ちてしまった。

す、すまない．．．．．レイ．．．

レ「ん〜．．．．．ぐう．．．」

だがレイはそれでも起きなかった。

一瞬起きそうだったが、直ぐにねむってしまった。

シ「ヴィータ！カーテンを開けるんだ！！」

ヴィ「お、おう！」

私はヴィータに頼み、カーテンを開けさせる。  
窓から眩しい日の光が降り注いだ。  
これでレイも起きるだろう。

レ「うが〜・・・焼け死ぬ〜・・・」

は「ええ加減に起きんかあ！！」

レ「へばあああ！？（；・・・）」

《パシーンツ！！》

まるで悪役がやられたような声を出したレイを、  
主はやてはハリセンで引つ叩いた。

その音はとても小気味よく、快音だった。

ところで主・・・そのハリセンはどこから出したのか聞いてもいいの  
でしょうか？

レ「う〜ん・・・あ、皆さん・・・おはようございます」

主のハリセンが効いたのか、  
ようやくレイが目を覚ました。  
いまだに目をシヨボシヨボさせているが・・・

は「おはようレイ兄い、お目覚めのとこ悪いけど、  
話を聞かせてほしいんやけど」

一体この先どうなるのだろうか・・・

レイ視点

目が覚めたら目の前にはやてがいた。  
しかも満面の黒い笑みを浮かべて・・・

は「おはようレイ兄い、お目覚めのとこ悪いけど、  
話を聞かせてほしいんやけど」

レ「え？・・・話してて・・・」

その言葉に一瞬ドキッとした。  
まさか蒐集の事がばれたのでしょうか？

は「とぼけたって無駄やで。

何でレイ兄いはシグナムに膝枕されてたんや？  
まるで恋人みたいに」

シ「こっ！？ここここ、恋人！？」

は「しかもヴィータはお腹の上で幸せそうに寝て．．  
こっちもまるで恋人みたいやわ」

ヴィ「は、はやて！？」

はやての言葉にシグナムとヴィータは赤面した。  
良かった．．蒐集の事ではないみたいですね。

それにしても恋人とは失礼な．．  
私と2人がそんな関係な訳ないでしょう。

レ「はやて、恋人だなんて2人に失礼ですよ。  
私と恋人になっても．．ねえ？」

は、シ、ヴィ「．．．．．」

私の言葉に3人が沈黙した。  
まるで信じられないモノを見るかのような視線を向けて．．．

は「．．．レイ兄い？」



レ「はい？」

は「往生するんや」

な、なんでそうなるんですか!?

と言つか笑顔でサムズアップしないで下さい!!

レ「ちよっ!..はやて待っー」

は「ちゃんと往生するんやよ」

はやては笑顔で手を振りながら部屋に消えて行った。

な、なんでこんな事に..

シ「.....レイ」

すると、シグナムが話しかけてきた。

心なしか声が低いような..

レ「な..なんですか？」

シ「炎上しろ」

なんですか炎上って!?

あ、待って下さいシグナム!!  
シグナムも自分の部屋に戻ってしまいました。  
あれ?この流れはもしかして・・・

ヴィ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ヴィータに向き直るとヴィータは黙ったままだった。  
もはや名前すら呼んでくれないのですね・・・

ヴィ「・・・・・・・・くすっ」

ヴィータは何も言わず、少し涙ぐみながら部屋に言ってしまった。  
い、今迄で1番心にグサツとききました・・・・  
リビングに残ったのは私1人だけになりました。

シャ「レイ君・・・・・・・・」

ザ「・・・・・・・・」

すると、さっきの騒ぎに気付いたのか、  
シャマルとザフィーラがリビングにいた。  
そうだ、2人なら私の話を聞いてくれる筈です。

レ「シャママー」  
シャ「Go to hellです」

ぬああああ！やっぱりそうなるんですね・・・  
いや違う、最後の誓のザフィーラは違う筈です。  
ほら、同じ男性陣ですしきつと分かって・・・

ザ「今回はお前が全面的に悪い、素直に謝るんだな」

くれなかつたです・・・  
でも何故かザフィーラの言葉が1番優しく感じました。  
あれ？目からしょっぱいお水が出てきました・・・

あの後、私は皆んなに全身全霊の土下座をして何とか口をきいてくれるまで回復しました。

## 第20話 久々のお目覚め（後書き）

と言う事で久々のギャグ回でした。

いやあ、いつも以上の駄文……おいこら作者「レ、レイ!?

レ「何ですか、この体たらくは、普通こう言うのは本編に+で出す  
ものでしょう

しかもPV100,000突破のこの記念すべき日にギャグ回一話  
つて……」

う、うるさい!!ストックが無いんだから仕方ないじゃん!!

レ「今お前スパロボZのゲームとWガンダムのプラモ作ってるだ  
ろ、しかもWガンダムはパーフェクトグレード」

うっ!! (。・111)

レ「別にやるなとは言いません、でもお前、執筆そっちのけでやっ  
ていただろ。

情状酌量の余地もありません」

ど、どこが悪い!俺は決して悪くないぞ!!

レ「開き直りやがったよ……ちょっと仕置でもしますか……

」

ちよっ、ちよっと待て!

レ「……………」

.....

〃 〃 〃 〃 ( ∴ ° 〇 ) 〵 ( ^ - ^ ) 《ガシッ》

レ「何所へ行くところというのです?」

ははは〜!まるでムスカみたいなセリ〜」それがお前の遺言です  
ね」

目があああ!!目があああああああ!!!!

レ「目に当たっていないでしょう、全く・・・  
さてつと、それでは皆様、またいつかお会いしましょう」

ム・・・ムス・・・カ・・・

レ「好い加減にしないで!」

peg あああああああああ!!!!!!

## 第21話 日輪の王（前書き）

レ「皆様どうもおはようございます、こんにちわ、そしてこんばんわ、

この話しの主人公、レイです。

え？作者ですか？

作者は「スパロボ一周目クリアアアア！ーうひよおおおおお！ー！！」

って言ってたのでヤっちゃいました。

だって「うひよおおおおお！！！！」って・・・  
なんか気持ち悪いです。

と言う事ですので暫くは、不肖の身ですが私が前書きと後書きに登場します。

おっと、長話が過ぎましたね、それではどうぞ（＾・＾）ノ

## 第21話 日輪の王

レイ視点

蒐集を始めて1ヶ月が経ちました。

はやてが寝静まる夜の時間限定ですが、  
少しずつ、ただど着実にページが埋まってきました。

あ、そうそう、この1ヶ月の間に色々ありました。

蒐集された私の魔力は無事、元に戻ったそうなのですが、  
シャマルが言うには私は魔力をただ漏れに流しているらしく、  
探知魔法で探せば一発で見つかってしまみたいいです。

と言う事でシャマルに魔力を隠す結界魔法をかけてもらいました。

さらにもう一つ、どうやら私は念話が使えないみたいなんです。

私からは話せるみたいなんですが、

向こうが話そうとするとノイズが酷くて話せれないみたいです。  
どうやら私の中にある膨大な量の命が回線に割り込んでいるらしく、  
それが原因でノイズが発生しているみたいです。

最後に、家族のみんなが、私に睡眠を義務付けました。

「別に私は睡眠を必要としないので大丈夫です」と言ったら、

「家族としてそんな不健康な生活は認めない！」と言われてしま  
いました。

“家族として”なんて言われたら認めない訳にはいきませんよね。  
でも私、朝とか弱いんですね。

これも吸血鬼なのが原因ですかね？

まあ、そんなこんなで色々ありました。

今夜も闇の書のページを埋めるため、  
異世界に赴いています。

レ「よつと．．．今回はこの世界ですか」

着いた世界は沢山の巨石と苔が生えただけの寂れた世界。  
見た限り生物は見当たりませんね。

ヴィ「こんな所に生き物なんているのかよ？」

今回の蒐集はハズレだと思ったのが、  
不満の声をだすヴィータ。

レ「まあまあ、この世界に転移した以上、  
必ず生き物は生息していますよ。  
気長に探すとしましょう」

ヴィ「で、でもよぉ〜」

私の言葉を聞いても、まだ不満そうなヴィータ。  
どうでしょう？

レ「うん．．．．．そうだ！



いい事を思いつきました。  
皆さんは少し下がって下さい」

私はみんなを後ろに下げて、足を高く振り上げた。  
そして……

レ「ー」咩ッ!」

渾身の震脚で地面を震わせた。

見た限り生物がないと言う事はつまり、

“見えない場所”地面の下にいる可能性が最も高いと言う事です。

ならば地面に振動を与えて、私達の居場所を教えればいい。

獰猛、或いは本能的に生きている生物なら、

私達に気付いて襲ってくる筈です。

ほら、言ったそばから出てきました。

「ヴロオオオオオ!」

出てきたのは体全体が石で出来た、

巨大な人型の形をした生き物。

あれが“ゴーレム”と言う物なんでしょうか？

なんか以前読んだ美食屋の漫画にそっくりな敵がいたので、  
名前をロックドラムと命名しましょう。

大理石とか出てくるんでしょうか？

「ヴアアアアアアアアアア！」

するとロックドラムは周りにある巨石を持ち上げ、私に向かって投げてきました。ふむ、当たったらひとたまりもありませんね。

レ「よっ……せいつー!!」

「ヴバアアアアアアアア!？」

私は巨石を無理に受け止めず、受け流すように巨石を掴んで、そのまま回転の力+私の力を足してロックドラムにぶつけた。

レ「フライ返し……なんてね」

さてと、ロックドラムは……  
おや、まだ沈んでいませんね。

「ヴ□□□□□□□□……」

あらあら、どうやら怒ってしまったみたいですね。  
もの凄い勢いで私に突っ込んできました。

「ヴガアアアアアアアアアア！！！」

そのままロックドラムは私を殴りつけてきた。  
やはり短慮ですね・・・

レ「よつと・・・・・・・・」

そんな一直線で単調な攻撃なんて余裕で躲せます。  
私は横に軽くステップし、ロックドラムの拳を避ける。  
轟音と共に私が元居た場所は大きな穴ボコが空いた。

シ「レイ！加勢するぞ！！！」  
ヴィ「あたしもやるぜ！！！」

すると、シグナムとヴィータが加勢に来た。  
うーん、此処は私1人で大丈夫ですし、みんなを危険な目に合わせ  
たくないんですが・・・

シ「ーーーーはあっ！！！」  
ヴィ「ーーーーでりゃあ！！！」



拳は私の目の前で流れるように横に逸れた。

レ「我が攻撃は過ぎ去った一撃――過撃ッ」

そうして出来たガラ空きの胴体に高速で踏み込み、私の拳はロックドラムの体にめり込んだ。

「ヴロ．．．オオオ．．．」

今度はちゃんは効いたらしく、ロックドラムは意識を失った。

レ「ふう、ひとまず終了です」

取り敢えず戦闘が終わったので一息つく。ちなみに大理石は出てきませんでした。ちよつと残念です．．．

ヴィ「やっぱ．．．レイは規格外だな．．．」

するとヴィータが呆れた声を出した。

シ「だな、あの硬さを一撃で砕くとは・・・」

その言葉に続くシグナム。

シャ「巨石も難なく受け流して投げ返していましたしね」

シヤマルも続いて呆れた様子。

ザ「最後の攻撃なんて殆ど見えなかったぞ」

ザファイラは呆れ3割、さっきの技に興味7割、と言った感じ。  
同じ素手で戦う者として興味があるのでしょうか？

レ「まあ過撃は文字通り“過ぎた”“攻撃”ですからね。

踏み込みの初動すら見せず、相手に踏み込み、攻撃を打つ。

この動作を全て同時に行う事で、相手は既に攻撃を受けた錯覚に陥る。

この技は【六宝むほう】と言われる究極の武技の一つでしてね、  
体術を極限まで極めれば修得出来ますよ」

ザ「成る程・・・初動を見せず、踏み込みと攻撃を同時に・・・  
とても興味深い話だ」

私の説明を聞いて、ザフィーラの眼が微かに燃えていた。どうやら“過撃”を修得したいようですね。

レ「宜しければ教えますよ」

ザ「本当か!？」

レ「ええ、今は蒐集で忙しいですけど、

蒐集が終われば何時でも教えてあげますよ」

ザ「そうか、その時は宜しく頼む」

そう言つてザフィーラは頭を下げた。

まあ、ザフィーラ程の腕を持っていたら直ぐに修得出来るでしょう。と言つても最低10年はかかりますが……

ザ「ちなみに六宝むほつと言つていたが、

他にも技があるのか？」

レ「ええ、文字通り六つありますよ。

一つ目はさっき言つた過撃。

次に侵撃、陽炎、攻死、柳流、

最後に共逝きよせし、これを総じて六宝むほつと言います。

と言つても最後のは余りカウントしたくありませんが……」





レ「うおおおおおおおおお！！！！！」

その亀裂が入った大地を私は持ち上げた。

私達の目の前にそびえ立つは、ロックドラムが投げた巨石よりも遙かに大きく、

100mを優に超える、まさに大地の一部そのもの。ただとまだ足りない……………

レ「ザフィーラ！この岩と貴方達4人に防御魔法を！！

他の皆さんも防御魔法をありったけかけて下さい！！！！！」

ザ「だ、だがお前は……………」

レ「私の事はいいですから早く！！！！！」

これを聞いたら皆さんは絶対に怒りますが、今の状況で私の身の安全程どうでもいい事はない。

ザ「分かった……………鋼の軛ツ！！！！！」

ザフィーラも何とか分かってくれ、岩と自分達に防御魔法をかける。

皆さんも渋々と言った様子ですが、自分自身に防御魔法をかけていた。

これでひとまず安心ですね。

レ「……………来る!!!」

次の瞬間、眼を開ける事が出来ない程の強烈な閃光と、身を焦がすような熱さが私達を襲った。

閃光が収まり、私は眼を開けてみると……

《シユウウウウウウウ……》

目の前にあった筈の巨大な岩は無惨に溶け、ザフィーラの鋼の軛は所々ボロボロになっていた。ただどこの2つのお陰で4人は全くの無傷、私は軽い火傷を負う程度で済みました。

流星は盾の守護獣です。

?「ほお、我が光の日の出を防ぐか……」

「……………ツ!?!」

突如した声に、私達全員が空を見上げた。すると其処には……………

太陽の如く光り輝く黄金の龍が大空に鎮座していた。

## 第21話 日輪の王（後書き）

レ、如何でしたか？

なんかザファイラの強化フラグが立ちました。

と言ってもストライカーズ入ってからです・・・

え？ストライカーズ入るのかって？

それは私にも分かりません。

アノ作者はVividまで続けるとのたまってますが・・・

どうなんでしょうね？

さて、話しは変わりますが、次回の前書きと後書きからはゲストが登場します。

一体誰がゲストとして登場するのか、

それでは皆さん、また会いましょう（＾|＾）ノ

## 第22話 夜と太陽が出会う時（前書き）

レ「皆さん先週振りです。今回も前書き、後書きの担当を務めます  
レイです。」

さて、今週からゲストを迎える事になりました。  
記念すべき最初のゲストは、八神はやてです」

は「ども、はやてです」

レ「今回はよろしく願います」

は「任せとき、って、その前に良えんか？

この話しは蒐集している時の話しやる？  
わたしが居ても大丈夫なんか？」

レ「その点のご心配なく、私達はこの話に出てくる私達であって、  
私達ではありませんので」

は「いわゆる、作者のご都合、と言う訳やな」

レ「ええ、その通りです。」

それでは、そろそろ始めるとしましょう」

は「そうやな、魔法少女リリカルなのは、悠久の吸血鬼、始まりま  
す」

## 第22話 夜と太陽が出会う時

???視点

今日もいつも通り統治世界を見て回ってた。

各世界は変わらず生命が生まれ、そして死に、

命のサイクルは歪む事なく延々と回り続けていた。

うむ、異常が無くて何よりだ。

最後に岩石の世界、ギ・コズモスを見回って帰ろうとした時・・・

?「ん?、これは・・・転移魔法か?」

魔法の発動を感じ取った。

性懲りもなく、また管理局が来たと思ったが違うみたいだな。

転移して来た数は5、皆高い魔力値をもっており、1人は別格だ。

管理局はここまでの戦力を保有していたか?

いや、何より奴等は知っている筈だ、

幾ら魔導師を集めようと、我が前では何の意味を持たないと。

そう言えば最近、様々な世界に出没し、

そこに住む生物を襲っては魔力を奪っている輩がいると聞いたな。

もしかしたら其奴等かもしれん、

?「だとしたら、我が手を下さねばならぬな」

我が統治世界での蛮行は見過ごす訳にはいかぬ。

それに他の生物も怯えているのだ、

“王”として民草の願いは聞いてやらねばいかぬしな。

？「では、行くとするか」

我は黄金の翼を広げ、下手人のいる場所へ飛んで行った。

~~~~~

？「ふむ、此奴等か・・・」

反応があつた場所に赴けば、案の定奴等がいた。

側にはギ・ギガンダスが倒れており、魔力を奪われていた、やはり奴等が襲撃犯で決まりだな。

？「民草を傷付けた罪は償ってもらつぞ」

我は大気圏ギリギリまで飛翔し、右手を奴等にかざす。
右手から迸る閃光と膨大な熱量が生まれ・・・

？」

フォス・アナトリ
光の日の出」

我が呟くと同時に光の塊が放たれた。

長い黒髪の女．．．いや、体の作りを見る限り男だな、

男は私の攻撃に気付いたようだが、もう遅い、

光は無慈悲に奴等を焼き尽くす

筈だった

男が地面を蹴り付けたと思ったら地面に大きな亀裂が入り、男はそれを持ち上げ、そして、沢山の防御魔法が巨石を覆い尽くした。

光は巨石に着弾すると同時に、周囲を焼き尽くさんと熱線が辺りを覆う。

だが肝心の奴等はと言つと……

？「ほお、我が光フォス・アナトリの日の出を防ぐか……」

黒髪の男が軽い火傷を負った程度で、皆全て無傷だった。

成る程、あの防御魔法かなりの強度を誇っているな、素晴らしい術者がいるようだな、

それにあの男の行動、“回避”ではなく“防ぐ”か、良い選択だ、もしあのまま回避しようとするれば、皆消し炭になっていたであろう。

それにさっきの言葉で皆、我の存在に気付いたな、此処は我も地上に降りるとしよう。

？「ようこそ、異世界の侵攻者よ」

レイ視点

？「ようこそ、異世界の侵攻者よ」

黄金の龍はそう言いながらスタツと地面に降り立った、龍の大きさは約5m程と、ロックドラムと同じか、少し大きい程度私の想像していた龍と違い、まるで人の様な立ち姿と、スラツとした体のライン、その姿は龍と言うより龍人の方がしっくり来る。

極めつけが龍の背中に生えている7対の光り輝く翼、並の黄金では敵わぬ程の輝きを発し、更にその後ろでは、光の円が私達を照らす、まるで太陽その物が、私達の目の前にいるみたいだ。

そして、私の直感が叫んでいる、

奴は私と同じで“最強種”だと

まさか【真祖の吸血鬼】と並ぶ種族がいるなんて、私は瞬時に対応できる様に身構えていると・・・

「そう言えば名乗るのを忘れていたな、失敬した。

我が名はイリヨス、この周辺の世界を統治する者で、皆からは王と呼ばれている」

いきなり向こうが名乗って来ました。

予想外の出来事で思わずコケそうになったのは秘密です。

レ「こほん．．．これはご丁寧にとつても、

私の名はレイ・D・クロムハイツと申します。

隣にいるのは、シグナム、ヴィータ、シャマルとザフィーラです、

以後お見知り置きお」

相手が礼を尽くすなら、こちらも礼を尽くすのみです、
これでも一応“元”王子ですからね。

イ「さて、お互い名乗りあつたし、

これで話しに入れるな」

イリヨスの言葉と同時に放たれる威圧感、
私以外の4人は、立っているのが辛い様子。

成る程、流石は最強種、常人なら心が折れてしまつ程の重さです。
ですが私も最強種、これ位なら柳に風と言つた感じで受け流す。

イ「何故他の生物を襲い、魔力を奪う、

お主等の目的は何だ？」

イリヨス視点

イ「何故他の生物を襲い、魔力を奪う、
お主等の目的は何だ？」

我は虚偽の言葉は許さないとばかりに男を．．．レイを睨み付ける、
だがレイは我が威圧感に全く揺らいでいなかった。

うむ、此奴を見た時から思っておったが、
此奴は我と同じで最強種か？

人の形をしながら、その中にとんでもない数のナニかを内包して
おるな。

レ「．．．．救いたい人が、

どうしても助けたい人がいるんです」

するとレイは、絞り出すかの様に我が問いに答える、
だがその眼は絶対に揺るがぬ信念の炎が燃えていた。

イ「助けたい人．．．．か、

その為に他の生物を襲い、魔力を奪っておるのだな？」

レ「．．．ええ、その通りです」

イ「そうか．．その者はお主等にとって大切な．．命を賭けてでも
助けたい存在なのだな？」

レ「はい、はやては私達の大切な家族であり、私の太陽です。

この行為が“悪”だと言う事は勿論分かっています、何と言わ
れても仕方ありません。

ですが、私達は諦める訳にはいかないんです」

イ「……………」

これは困ったな……………」

私利私欲の為に魔力を奪っていたのなら問答無用で焼き尽くしてやるのだが……………」

此奴の眼を見る限り嘘ではないな、

いや、此奴は悪意を以って他者を騙す様な事はしない、

これでも人を見る目は確かだ……………ん？此奴は人ではないからこの場合、“人”と言った言葉は正しいのか？うむ……………分からんな。

おっと、話しがズレてしまったな。

それにしても、“救いたい”……………か、

我にはその様な存在がないから分かんが、

余程“はやて”と言う人物は愛されておるのだな、

そして、そこまでして救おうとしている彼等にも非常に好感が持てる、

我個人としては応援したいし、できる事なら協力もしたい。

だがそれ以前に我は“王”

非情かもしれないが、其れと此れは話しが別だ。

イ「……………」お主達の言いたい事は分かった。

だが、幾ら家族を助けたいと言う願いであっても、

それが他の生物を襲う免罪符にはなり得ぬ。

お主達がこれ以上、他の生物を襲うのであれば、

我は“王”としてお主達を裁かねばならぬ。

「……心苦しいがな」

レ「いえ、貴方の判断は何も間違っていない、
それどころか、至極真つ当、
寧ろ賞賛されて然るべきです。
気を落とさないで下さい」

イ「……………済まぬ」

レ「ですが……私達も退く訳にはいかないんですよ」

イ「　　ッ！！！！」

これは我と同じか、それ以上の威圧感だな、
成る程、流石は最強種、全ての生命の頂点に君臨する種族なだけあ
るな、

此れ程に重い威圧感を受けた事など今まで一度たりとも無かったぞ。

イ「そうか……お主達がそう言うのなら仕方ないな、

お互いの意義、主張が双方に受け入れられなかった場合、
どうするのか、お主もよく知っておるう？」

レ「ええ、よく知っています。

とても原始的であり、絶対の強制力を持つ、
まさに生物の本能とも言つべきモノ」

そう言いながら、我とレイはお互いに向かつて歩みを進める、

一步、また一步と。

当然我等2人の距離は1つの例外も無く縮まっていく、それと同時にお互いの威圧感はずつかり、飛び散りつつも、急激に濃度を上げていく、

此処までくると、もはや質量を持っているのに等しい、気が付けばレイの姿は余りに膨大な威圧感のせいで、その姿も、レイの後ろにある筈の景色も歪んでいた、おそらく、レイから見た我もそう見えておるだろうな、だが我等は決して歩みを止めない、一步、また一步と。

そして、我等の距離は対に0になった。

『それはっ

』

拳を握り締めた音なのか、或いは質量を持った威圧感に決壊寸前の空間が悲鳴を上げているのか、我等が拳を握り締めた時にギチギチと言った音が静かに響いた。

そして

『一方を力でねじ伏せるつつっ！！！！！』

爆音と共にお互いの拳がぶつかり合い、

余波で周囲の地面は砕け、大気は震える。
こうして我と^{太陽}レイの^夜闘争は幕を開けた。

だが、まだこの時お互いに気付いていなかった。

イリヨスはレイが最強種の中でも一線を期す存在だと言う事を。

レイはイリヨスの攻撃を防いだ時に負った火傷が治っていない事に
.

第22話 夜と太陽が出会う時（後書き）

は「これまたエライ敵が現れたな」

レ「そうですね、なにせ私はここまで来て、まだ一度も本気を出して戦っていませんからね。そろそろ作者も私を本気で戦わせたいんでしょう」

は「あれだけやって本気やないんか・・・
めちやくちややなレイ兄いは」

レ「まあチートですからね。

それに作者も言っていましたし、
「強くしすぎた」って」

は「そのチートに魔法が加わったらどないするんやろ？
てか何時になつたらレイ兄いは魔法覚えるんや？
これ魔法が主な話しやる？」

レ「・・・それは作者に聞いてください。

私だって使いたいですから」

は「うん、アノ作者やから　ん？何か変な電波受信したで。
何々・・・「ストライカーズ本編までには覚えさせます」やって。
ふむふむ、どうやら作者からやったみたいやな」

レ「はやて、そんな毒電波すぐにペツしなさい、
そして家に帰ったら手洗いとうがいをしましょう」

は「作者はカゼ菌と同じやんね、分かるで」

レ「ええそうです。早く家に帰って消毒しましょう」

は「分かったで、レイ兄い」

レ「それでは皆さん、またお会いしましょう」

は「皆んなまたな」

第23話 夜VS太陽（前書き）

レ「皆さんお久し振りです。」

今回もわたくしレイと、ゲストの八神はやてがお送りします」

は「よろしく〜 って何でまた私なん？

出れるのは嬉しいけど、これは作者の怠慢やない？」

レ「まあ仕方ありませんよ。」

今回の話でヴォルケンを出すのは難しいですし、
除去法ではやてが選ばれたんです」

は「うーん、なんか釈然とせえへんな」

レ「それに、今回の話しは約10,000文字と、
何時もより長いですからね、

作者も頑張りましたし、今回だけ大目に見ましよう」

は「おお、レイ兄いが作者に優しなるなんて・・・
以外やな」

レ「今までで一番頑張りましたからね、
少しは褒めてあげないと」

は「それもそうやな」

レ「では皆さん、今回は長めですがご覧ください」

は「楽しんで見たってな〜」

第23話 夜VS太陽

三人称

岩石と苔、それと少しの動植物だけが生息しているとある無人世界、そんな世界に2つの生物が死闘を繰り広げていた。

レ「はあああああああ！！！！！！」

1人は黒い長髪を揺らし絶世の美女と見まごう様な美貌を持つ・・・
まあ、いつもと同じわれらの主人公レイ・D・クロムハイツその人。

イ「うおおおおおおお！！！！！！」

もう1人は眩い黄金の様な輝きを放ち、その姿は莊嚴の一言、
レイとはまた違った美しさを持つ獣達の王イリヨス。

その2人は互いに互いの拳をぶつけ合っていた。

どうして2人は争っているのかについては22話を参照、と言いたい所だが一応説明させてもらおう、

レイ達はいつも通り魔力を持つ生物から魔力を蒐集、
ところがその蒐集行為が獣達の王であり、周辺世界を統治しているイリヨスに見つかってしまった。

2人は話し合い、レイ達が私利私欲の為に魔力を蒐集しているので

はなく、
はやてを助ける為に蒐集行為をしていたのだと話し、
イリヨスもレイ達が性根の腐った悪人ではないと言う事を分かって
くれた。

それでこの話しが終わってくればさぞかし良かったのだが、
レイ達ははやてを助ける為に蒐集行為を続けなければいけない、
一方イリヨスは獣達の王として皆を守らなければいけない、
そう言う事でお互いの意義、主張が相反してしまい、2人は自分の
主張を通す為に戦っているのだ。

長々と話してしまったが、事のあらまはそんな感じだ、
さて、説明も終わった事だし視点を2人に戻そう。

レ「 ふんっ!!! 」

イ「 はっ!!! 」

2人は拳がぶつかり合った瞬間、すぐさまもう片方の拳で殴りつけ
る、
だが、まるで合わせ鏡の様にお互いの拳はまたもぶつかり合う。

イ「 これでええっ!!! 」

イリヨスはそのままクルリと一回転しながら、
裏拳の形でレイに拳を振るう。

レ「　　まだまだあぁっ！！！！」

対するレイもクルリと一回転し、回し蹴りで迎え撃つ。

2つの膨大なエネルギーが衝突し、爆音が響く、大地は衝突の余波で粉々に砕け、

空間は引き千切れんばかりに悲鳴を上げて歪む、まるで、この2人の存在が空間の許容量を超えているみたいに。

そして2人は一旦距離をおいて離れる。

イ「やるなレイよ、流星は最強種だ」

レ「貴方こそイリヨス、此処まで持ったのは貴方が初めてです」

2人はお互いの力量を褒め称える。

この会話の雰囲気を見る限り、2人が争っているなんて到底信じられない、

だが会話が終わると、2人の目付きは鋭いモノに変わる。少しの沈黙が続いた後、2人は……

駆ける。

レ「でりゃあぁあぁあぁあぁ！！！！！！」

イ「うらあああああああ!!!」

そこからはお互いに次々と拳を打ち出すのだが、打ち出した拳は全て相手の拳とぶつかり合ってしまった、お互いに決定打を入れる事が出来ず、戦況は平行線のまま。

だが依然として、戦闘の余波で周辺が大変な事になっている事はお忘れなく。

レ「!!!　そこっ!!!」

イ「なっ・・・に!？」

その平行線と思われていた戦闘の天秤が僅かに傾いた。

今まで正面でぶつかり合っていた拳を、なんとレイは、側面から殴り付ける事でイリヨスの攻撃を弾き、決定打を入れるチャンスを見事に作り上げたのだ。

力、方向、タイミング、そして勇氣、その内どれか一つでも欠けていれば出来なかった事をレイはやってのけた、

幾ら不老不死で失敗しても死なないとは言え、その至難の技やってのけたレイの技量はまさに至高の域である。

レ「　　過撃ツツツ！！！！」

狙うはガラ空きになった胴体、使うは過ぎ去った一撃、
そうして出来た千載一遇の好機に六宝むぼが一つ、過撃を打ち込むのだ
が……

イ「……間一髪だな」

レ「　　ツ！？、くそっ！！」

イリヨスの前には黄金の壁が立ち塞がり、
レイの攻撃は完全に止められてしまった、
レイは悪態をつきながら直ぐ様後ろに下がる。

イ「ふむ、我がアルモニア・アスレタ調和の盾に罅が……
これは危なかったな」

レ「……少しシヨックですね、
まさか過撃を見切られるなんて」

イ「いや、我はただ攻撃が来ると思って遮ニ無ニプロテクションを
張っただけで、

決して見切っていた訳ではない。

それにしても過撃、だったか？

速いな、攻撃の瞬間お主が見えなかったぞ。

正直なところ、冷や汗をかいている。

さて、ではそろそろ此方も征くでしょう・・・」

レ「　　ッ!?!」

言つと同時にイリヨスはレイの後ろに一瞬で回り込む。

レイは回し蹴りで迎え撃とうとするが・・・

レ「どこに　　「後ろだ」くっ!」

イリヨスは既に後ろに移動しておりレイを追い詰めて征く。

此処に来てレイに傾いていた思っていた闘いの天秤は、完全にイリヨスの側に傾いていた。

レ「その巨体でその速さ、メンドくさいですね」

イ「我としてはその小柄な身で我と同じ膂力を持つお主の方がメンドくさいぞ、

　　つと、それは悪手だな、詰みだ」

レ「がつ!?!」

レイは何とかイリヨスの攻撃を避けていたが、その途中で上に飛び上がったのがいけなかった。

空中で身動きの取れないレイをイリヨスは尻尾で叩き付けた。

レイは地面に叩きつけられ、背骨をハンマーで叩かれた様な感覚が襲い、

明らかに折れてはいけないナニかが折れた悲痛な音が響く。

イ「今ので背骨が完全に折れたな、それに首も、

これで終いだなレイ、と言ってももう聞こえぬか」

イリヨスはレイに一瞥し、踵を返そうとするが・・・

レ「・・・勝手に終わりにしないで下さい」

イ「な・・・に？」

聞こえない筈の音が聞こえ、イリヨスは驚愕の表情で振り返る。

声の主はあり得ない程曲がっていた首をイリヨスに向け、
可動可能域を超えた関節は次第に元に戻り、
ひしゃげていた肉体は不気味な音と共にビデオの巻き戻しみたいに
戻っていく。

その様子は並のホラー映画よりもよっぽど怖い。

レ「人を勝手に殺すなんて失礼じゃないですか」

首をコキコキツと鳴らしながら、

レイは何もなかったかの様に喋り出す。

イ「何故だ．．確かに首の骨は折れていた筈だ．．．

確実に死に致る筈だったのに何故治っている」

レ「残念ながら私は不老不死でしてね、

幾ら肉体が減びようが私は死にませんよ」

イ「成る程、回復魔法ではなく、自己再生能力か．．

それも死に等しい程の傷をも治す．．．

もはや生物の領域を超えている存在だな、

いや、下回っていると書いてもいいな」

レ「まあ否定はしませんよ。

老いる事もなく、死ぬ事もない私はもはや生き物ですらない、

どちらかと言うと台風や嵐といった現象の方が私にはピッタリです」

イ「だが死ぬ法は他にあるのだろうか？」

レ「ええ、肉体ではなく魂を　　っと、少し喋り過ぎましたね、

それよりも続きをしましょう」

レイは途中で会話を区切り、構える。

イ「そうだったな、我等に余計な馴れ合いは必要ないからな」

イリヨスも少し溜め息を吐きながら構える。

まあ、お互い戦いたくて戦っている訳ではないので分からなくはないが・・・

イ「 シッ！！」

イリヨスは再び高速の踏み込みでレイの後ろに回り込み、レイを攻め立てて征くが・・・

レ「その攻撃は既に見切りました・・・咩ッ！！」

レイの震脚により大小様々な石が散弾銃の様に飛来して、イリヨスは攻撃を止めて立ち止まる、いや、立ち止まってしまった。

イ「くっ！何と強引な方法を！！」

レ「まだ終わりではありませんよ いけ！」

イ「む、これは影か？は、離れぬ・・・」

レ「【影の尖兵】は影が濃くなればなるほどその力を増す、

光の発生源である貴方にはさぞかし相性がいいでしょう、

これでようやく止まってくれましたね」

【影の尖兵】でイリヨスを捉えたレイは、深く腰を落とし、必殺の構えを取る。

イ「動きは止まっても魔法は使えるぞ!!」

対するイリヨスもプロテクション・アルモニア・アスピダ調和の盾を張り攻撃に備える。その色は先のプロテクションよりも数段強い輝きを放っている。

レ「防ぐ事叶わぬ侵攻の一撃　　侵撃ツツツ!!!!」

そんな事もお構いなしに、レイは必殺の一撃を叩き込む、だが拳はゴツツと鈍重な音を鳴らすだけで、プロテクションを砕くどころか、罅すら入っていない。

レイの攻撃は不発に思われたが……

イ「ゴハッ!? ……な、何が起こったのだ……」

イリヨスは突如口から血を吐き出して苦悶の声を上げる。

レ「侵撃・・・究極の武技の一つ、
如何な強固な守りもこの技の前では紙と同然です」

そう、レイが打ち出したのは【六宝^{むほう}】が一つ、侵撃、
その原理は遠当てと言われる相手に接触せずに相手を倒す技法で、
レイはプロテクションを殴った時、その全衝撃をイリヨスに当てた
のだ。

イリヨスからしたら腹の中で爆弾が爆発したような感覚だろう、
まさに防御不能で中々にえげつない技である。

レ「まだ終わっていませんよ・・・侵」

イ「くっ、おおおおおおおおお！！！！！！」

レイが再び殴ろうと構えたら、

イリヨスは雄叫びをあげながら無理矢理影を引き千切り、
大空高くまで飛翔する。

イ「はあ、はあ、はあ・・・

まさか調和の盾^{アルモニア・アスレタ}を突き抜けて衝撃だけを我が身に叩き込むとは

恐ろしくも素晴らしい技だな、

だが！今度は此方から征くぞー！！」

そう言い放つと、イリヨスの翼は輝きを増し、周りには数十個の黄金色に輝く炎の球が現れた。

その光景は圧巻の一言で、見る者を魅了する程に美しく、幻想で神秘的な美しさだった。

イ「降りしきれ

フロガ・ウロヒ
炎の雨！！」

その神秘的な光景は、イリヨスの号令によって敵意を以って降り注ぎ、敵を焼き尽くさんと襲い掛かってくる。

レ「無限の夜羽！！」

地上だと回避が困難だと判断したのか、レイは蝙蝠の羽を広げて空に飛び立つ。

レ「速くっ！もっとな速くっつっつ！！！！」

風切り音を出しながら、高速で飛来する炎球を躲し、イリヨスに向かって行くレイだったが、飛来する炎球の数は次第に数を増し、

60を超えた辺りで遂に被弾してしまった。

レ「っただまだあああああああ!!!」

腕は焼け落ち、目は潰れ、腹は穴が空き、
その身を降り注ぐ炎球に焼かれながらも、
耐え、忍び、ただひたすら愚直に突き進むレイ。

レ「くそっ!、羽が・・・」

だが飛行の要である羽も焼かれてしまい、
レイは重力の法則にしたがって急降下して行き、
地面に叩き付けられた。

イ「地上ではお主に負けてしまったが、
空の勝負では私の勝ちのようだな」

レ「ぐっ・・・まだですよ、

この程度の傷すぐに治・・・り、ま・・・」

イリヨスの言葉に反論しながら、
何とか立ち上がろうとしたレイだったが、
自分の身体の起こったモノを見て口を噤んだ。

レイの身体に起こったのは凄く不自然な．．
いや、普通の生命には至極自然な事だった。

それは．．．．

レ「き、傷が．．治らない．．」

不老不死である自分の身体が再生しないのだ。
当然、血は止めど無く身体から流れ逝き、
立ち上がった身体は血と力が無くなり、
レイは、またも地面に片膝をつく。

レ「な．．何故、傷が．．．．．
私に、私の身体に．．何をした．．」

イ「我が攻撃は全てを焼き尽くす太陽也、
その力は言葉通りに全てを焼き尽くす、
そう、例え“魂”であつてもだ。

肉体が幾ら滅んでも再生するお主でも、
流石に全ての生命の核である魂を焼かれてしまえばどうする事
も出来まい」

レ「くっ．．成る程、

まさか私達の一族以外に魂殺しの法を持っているなんて．．
私とした事が油断してしまいました」

イ「お主のただ一つの敗因はその油断だ。

では、今度こそ終いにしよう」

そう言うと、イリヨスの手から溶岩が生まれた。

最初はドロドロと不定形の形だったが、次第にイリヨスの手に集まって明確な形を創っていき、やがてそれは槍の形になった。

その槍は飾り気が全く無く、一直線に伸びた無骨な槍、だがその槍から感じるエネルギーは膨大で．．．まるで火山の噴火が目の前で起こっているみたいで、相手を斃す事一点に全てをつぎ込まれた、まさに目に見える“力”そのものだった。

ただ一つにつき込まれた存在は此処まで美しいのか、その無骨さ、その圧倒的なまでに凝縮された力、先の、炎の雨とは全く違う美しさが、その槍にはあった。

イ「さらばだレイ、

エクリクスイ・ロンヒ
噴火する槍！！！！」

そうして全てを焼き尽くす槍は、未だ地面に伏しているレイに向かって．．．不老不死を殺す為に一直線に突き進んで征く。

レイはその飛来する槍を睨むが、槍は進路を変えず、ただ無情に突き進み、生命全ての絶対急所、心の臓符を貫こうとした時．．．

「鋼の軋つつつ!!!」

「レヴァンティン!!!叩き斬れつつ!!!」

「へし折れええええ!!!グラーファイゼンツツ!!!」

聞き慣れた声と共にレイの目の前で白い壁が立ち上がり溶岩の槍を
食い止める、
続いて紫色の閃光と紅色の閃光がその槍を真ん中から叩き折った。

レ「あなた達は...!!!」

このっ...このバカ野郎!!!」

レイはその光景に目を疑った、
彼の前に現れたのは...

レ「このっ...大オバカ野郎ウ共めえええええ!!!!!!」

彼が愛してやまない家族たちだった。

シ「このまま黙って見る事は騎士の誇りとして...
いや家族として見過ごせないっ!!!!!!」

ザ「お前が我々を傷付けさせたくないのと同じで、

我々もお前が傷付く姿を見たくない!!」

シャ「だから今こうして傷付いているレイ君を私達を守ります!!

私の誇りに賭けて貴方の傷を癒します!!」

ヴィ「それにあたし達の家族を傷付ける奴はあたしが、

あたし達が絶手えにぶっ潰すっ!!!」

シグナムとヴィータは武器をイリヨスに突き付け、

ザフィーラは何時でも飛び出せるように構え、

シャマルはレイに寄り添い、ペンデュラムを輝かせる。

レ「む、無茶です！確かに皆んなの実力は高い、

ですが皆んなも分かっている筈です！

あなた達の腕を以ってしてもイリヨスに勝てません！」

シ「確かに奴は強い、私達4人が集まっても奴の実力には遠く及ばないだろう」

レ「だったら」

シ「だが、たったそれだけの理由でお前を見捨てる理由にはならない。

いや、例えどんな理由があってもお前を見捨てはしない、見捨てて良い訳がない」

レ「で、ですが……」

シ「それに、私達は一言も“勝てない”とも、“負ける”とも言っていない」

ヴィ「確かにアイツはあたし達よりも強え、

だけどな、絶対に勝てねえって訳じゃねえんだ」

ザ「それに、我々の目的はお前が回復するまでの時間稼ぎだ、

“勝つ”戦いではなく、“耐える”戦いなら我々にも出来る。

あわよくば、一撃与えたいがな・・・」

シャ「だから私達を信じてください・・・ね？」

レ「・・・分かりました」

最初はみんなが戦う事に反対だったレイも、
皆んなの言葉を聞いて何とか納得した。

レ「ですがお願いします。

絶対・・・絶対に死なないください。

もし死んだら一生許しませんよ」

シ「ふっ・・・一生か・・・

お前の一生なら、それは大変だ、

必ず生きて帰ってこよう」

ヴィ「あたしは死ぬつもりなんてこれっぽっちもねえけどな」

ザ「それに私もいるのだ、

盾の守護獣の名に賭けて皆を護ろう」

シ「よし．．．皆んな行くぞ！！！！」

皆がそれぞれ決意や意気込みを固めると、

シグナムは開戦の号令を出し、

それと同時に、シグナム、ヴィータ、ザフィーラの3人は、イリヨスのいる大空へと飛びたった。

その3人の後ろ姿を見つめる事しか、今のレイに出来る事はなかった。

レイ視点

シヤマルを除く3人は、イリヨスのいる空に飛んで行ってしまった。

くそっ、くそっ、くそっ、くそっ、くそっ！！

傷付かないでほしいのに．．．傷付いてほしくない為に私が戦っていたのに．．．

それを．．．私を、私なんかを守る為に戦うなんて．．．

とんだお人好しです、とんでもない大バカ野郎です！

全く．．．本当に全く．．．

レ「．．．嬉しいじゃないですか」

皆んなの優しさに、皆んなの想いに、

私の胸は次第に温かくなり、
思わず涙が出そうになった。

シャ「さあレイ君、早く傷を治しましょう」

私が感傷に浸っていると、
シャマルが治療の提案をしてくる。

ですが……

レ「む、無駄です。

生命の核である魂が焼かれたのです。

幾らシャマルでも魂を治すことは出来ません」

魂というモノは言ってしまうえばもう1つの自分の身体、
例えば魂の腕が死んだとしたら、肉体の腕も死ぬ、
肉体は魂に比例するのだ。

そして、私の身体は著しく破損していた。

左腕は肘から先が消え、右腕も手首から先が無い、
右目は完全に潰れ、お腹はテニスボール程の穴が4〜5箇所空いて
いて、

左足は太ももの肉が抉れて大腿骨がキレイに見えている。

シャマルは歴戦の騎士ですから大丈夫みたいですけど、

普通の人が見たら、気絶、若しくは吐くでしょう、それ位私の肉体は激しく破損して、同時に魂も破損しているのです。

【有償の奇跡】を使えば魂も修復出来るのですが、私本体の魂が傷付いてる今では、下手に他の魂を使うと、私の魂が負けてしまい、最悪私という自我が消えてしまう、今の現状では八方塞がりの状態です。

シャ「確かにレイ君の言う魂というモノは、私にはよく分かりませんが、

でもねレイ君、湖の騎士を甘く見ないでください。

クラールヴィント、お願いね」

シャマルのペンデュラムが輝いたと思ったら、私を中心に明るい緑色をした三角形の魔方陣が広がった、すると、私の身体にとんでもない事が起こった。

レ「傷が・・・治っている・・・」

魂ごと傷付けられた筈の肉体が治っているのだ。

決してシャマルの魔法が魂を治している訳ではない、再生している肉体に引っ張られて魂までも回復しているのだ。

成る程、肉体が魂に比例するのなら、
逆の、魂が肉体に比例するのもあり得る。

そして、私の魂は【有償の奇跡】を耐えうる程に回復し、
私は【有償の奇跡】を使用して一気に回復した。

レ「まさか、魂を超える程の肉体治癒とは・・・

恐れ入りましたよ、シャマル」

シャ「当然です。

湖の騎士である私の本領は全てを癒す回復魔法です」

シャマルはペンデュラムを輝かせて、
自信満々に笑ってみせた。

さてと、肉体も魂も治つたので戦線に復帰したい所なんです、
このままだとちよつと拙いですね、
なにせ相手の攻撃は私を殺す事不老不死が出来る魂殺し、
私の最大の長所が封じられたのはイタイですね・・・

仕方ありません、アレをする事にしましょう。

シャ「行くんですか？レイ君」

レ「いえ、今の状態だと危ないので、

少し、私の身体と魂に細工をします」

そう言つて私は自分の意識に潜り込む。

深く、奥へ．．。深く、沈んで．．。深く、潜つて．．。深く、落ちて．．。

深く、深く、深く．．ふかく．．ふか．．く．．。

そして、私の意識は深い深い．．深淵の奥深くまで沈んでいった。

三人称

レイが治療に専念している一方で、

シグナム達3人はイリヨスと対峙していた。

シ「私達の会話の間、待つてくれたみたいだな、

済まない、そして礼を言う」

イ「なに、気にしておらんよ。

それより良かったのか？

お主達の行動を否定するつもりではないが、

レイの言つた通り、お主達では我に勝てぬぞ」

シ「確かにな。

あれ程の戦いを見せ付けられたら嫌でも分かる、

悔しいが、私達の勝てる確率は限りなく0に近いだろう」

ザ「だが、今回の我等の目的はレイが回復するまでの時間稼ぎ、

悪いが少しの間付き合つて貰うぞ」

イ「どうした、その程度の攻撃では防ぐ前に撃ち落とされるぞ」

まるで踊りを彷彿させるような綺麗なターンを描き、そのターンに連動した尻尾によって、4つの鉄球は打ち砕かれた。

だけどヴィータの顔に失意の表情はない、まるで最初から分かっていたみたいなの……

シ「レヴァンティン！カートリッジロード……！」
R「了解、ロードカートリッジ……！」

イ「ん？上か！」

そう、これは初めから予定されていた事、まずヴィータがイリオスの注意を引きつけ、その瞬間をシグナムが斬り込む。

イリオスが鉄球を撃ち落とす為に一回転した時、当然イリオスは3人を見る事が出来ない、その僅かな隙を突いて、シグナムはイリオスの頭上に飛び、渾身の一撃を叩き込む。

シ「紫電一閃……！！！！」

イ「アルモニア・アスレダ
調和の盾……！」

だがシグナムの目の前にもレイの攻撃を防いだ黄金の壁が立ち塞がる、

その強度はレイの．．“あの”レイの攻撃を防ぐ程の堅牢さ、如何にシグナムの攻撃が強力でも、あの壁を砕く事は容易ではない。

シクツ、やはり紫電一閃では届かないか、あれを砕くにはバリア破壊．．いや、結界破壊クラスの威力が必要だな」

案の定、シグナムの渾身の一撃は壁を砕く事なく、少し焦げ跡が付いた程度に終わってしまった。

イ「では、此方も反撃させて貰うとしよう」

その攻撃を見届けたイリヨスは、シグナムに拳を振ろうとする。

だが．．．．．

ザ「反撃などさせんつつっ！！！！！」

白い軛がイリヨスの腕に絡み付き、反撃を許さない、

その間にシグナムは拳の射程圏外まで退避する。

ヴィ「うりゃあああああああ！！！！」

G「テートリヒ・シュラーク！！」

イ「ぬ！？」

まるでシグナムと入れ替わる様に、
ヴィータはイリヨスの懐に潜り込み、
魔力で強化された一撃を叩き込む。

その一撃はまさに、テートリヒ・シュラーク
痛烈な打撃。

ヴィ「まだまだあああああ！！！！！！」

G「フランメ・シュラーク！！！！」

ただこの程度でどうにかなるイリヨスではない、
それを知っているヴィータは攻撃の手を緩めない。

痛烈な打撃に加え、今度は炎の打撃を叩き込む、

その怒涛の攻めは必殺の攻撃たり得るのだが……

イ「……素晴らしい攻め立てだ、だが惜しいな」

なんとイリヨスは空いているもう片方の手で、それを受け切ったのだった。

だがあの二撃を食らって無傷では済まなかったらしく、その手からは血が滴っていた。

ヴィ「くそっ、なんつー硬さだ。

あたしの攻撃食らってその程度の傷かよ」

イ「残念だったな、小さな騎士よ。

我に炎の属性攻撃は余り効かんのだ、
因みに雷属性も余り効かん」

ヴィ「ちっ、そーかよ・・・

って何だよ小さな騎士って!!

あたしは子供じゃねえ!!!!」

イ「いや、そう言った意味で言った訳ではないのだが・・・

済まない、非礼を詫びよう」

腕を組んでお冠状態の、推定8〜9才の女の子に、
5mを超える龍が頭を下げている、
はたから見ればシニールとしか言い様がない。

だけど、こんな会話を繰り広げて、
案外、お互いに良き友達になれるのではないか？
と思ったのは私だけではないと思う。

と其処へ

レ「皆さん、お待たせしました」

皆んなが待ち望んだ人物が現れた。

第23話 夜VS太陽（後書き）

は「レイ兄いも凄いけど、イリヨスも凄いなあ
まさかレイ兄いが死にかけるなんて」

レ「ええ、ヴォルケンが止めに入らなければ間違いなく死んでいま
した」

は「でも最後になんか細工しとつたやろ？」

レ「それは次回のお楽しみです」

は「引つ張るなあ」

レ「それでは皆さん、またお会いしましょう」

は「ほなな」

第24話 決着（前書き）

レ「お久し振りです皆さん、今回のゲストはイリヨスです。
イリヨス、今回はよろしくお願いします」

イ「うむ、宜しく頼むぞ」

レ「さて、感想でも書かれてましたが、
イリヨスは人気ですね」

イ「ああ、神夜 晶殿、コメント感謝する」

レ「ついでに私の女装イベントで作者が何か言ってたので、
で潰しておきましょう」

後

イ「．．．程々にするのだぞ」

レ「分かっていますよ、3分の4殺しにしますから」

イ「逆だ逆、それだと作者が死ぬ、オーバーキルだ」

レ「　　ちつ、仕方ありませんね．．．」

イ「さて、話しは此処までにして、本篇に入るぞ」

レ「私はちょっと作者のそこに行ってきます」

イ「お、おい！レイ！！．．．行ってしまったか．．．
仕方ない、読者の皆よ、本篇をどうぞ」

第24話 決着

レイ視点

イ「待つておったぞ、レイよ」

レ「すみませんね、お待たせしたみたいで」

まるで待ち合わせをしていた友達のように、向かい合った私達は語り出す。

イ「いいや、それ程待つておらんよ。

それよりも傷はどうした？

あれ程の重傷を治したのか？」

レ「ええ、シヤマルの回復魔法のおかげで、まさか魂が肉体に引つ張られて回復するなんて初めてですよ」

イ「ほお、それは素晴らしいな。

他の3人も我に一撃当ておったからな、

いやはや、お主の家族達は素晴らしい者ばかりだな」

レ「当然です、私の家族なんですから。

そう言えば、いつの間にヴィータと仲良くなったんですか？」

ヴィ「仲良くなんてなつてねえ！！」

私の言葉を聞いたヴィータは、
物凄い勢いで地面に降りて反論する。

ヴィー「アイツはあたしの事を子供呼ばわりしたんだ！

それで少し言い合っていたただけだ！！」

ヴィータ、人に指差してはイケマセンと教えましたが、
デバイスで指すのもイケマセンよ。

イー「だ、だが、お主よりも我の方が歳は上なのだが・・・」

ヴィー「そう言う問題じゃねえ！！」

イー「う・・・済まなかった」

イリヨスもイリヨスで弱すぎます、
それにペコペコと頭を下げないでください、
女の子に頭を下げている龍の絵面なんて、
はつきり言っただけでシニカルとしか言い様がありません。

レ「ヴィータ、イリヨスもああ言ってますし、

好い加減許してあげなさい」

ヴィー「し、仕方ねえな、今回ただぞ！！」

イ「・・・恩に着る」

全く、さっきまで私を殺す一歩手前まで追い込んだのとまるで別人じゃないですか、

でも、なんか憎めない相手なんですよね、

蒐集なんて行為がなければ、きっと良い友達になれたでしょう。

レ「さてっと、話しはここまでにして、

第2ラウンドといきますか」

イ「うむ、そうだな、始めるとするか」

レ「ですが、その前に・・・」

私はイリヨスに近付き、イリヨスの身体に触れる。

そして・・・・・・・・・・

レ「 【有償の奇跡】 」

私の手から生まれた暖かい光が、

イリヨスの身体に吸い込まれていき、

傷付いていた筈のイリヨスの身体は見事に治っていった。

イ「……………どう言う事だ、レイよ」

レ「なに、私だけ回復して、

貴方は負傷しているなんてフェアじゃないでしょう？

それに……………

私の侵撃、かなり深くまで貴方の身体を蝕んでいるのを、
私が知らないとしても？」

イ「むっ、見抜かれておったか……………」

レ「ほんの少しだけ、貴方はお腹を庇っていましたがね、
おそらく、臓器の2〜3個は潰れていたんでしょう？
逆に、よくその重傷でシグナム達と戦いましたね」

イ「闘争とは、傷を負うのが常だ。

例え重傷を負ったとしても、退く訳にはいかぬ」

その心意気には感服しますよ、本当に。
威風堂々とした姿は、まさに王ですね。
だからこそ私は、全力の貴方を倒したい。

あれ？私ってそんなバトルジャンキー戦闘狂でしたっけ？

レ「でもこれで、貴方も全力で戦えますね」

イ「うむ、だが感謝の言葉は言わんぞ」

レ「勿論、それを言って欲しくて治した訳ではありません。

ただ、全力を尽くして貴方と戦いたいです」

私はそう言っつて、腰を深く落とし、腕をダランと下げ、腕を広げる、

その構えは人と言うよりも、もはや獣の構え。

これが私の本当の・・・つまりは本気の証、この構えをとるなんて、何百年以来でしょうか・・・

イ「それは奇遇だな、丁度我も今、

本気でお主と戦いたいと思っつていたところだ。

我と対等に戦つたのはお主が初めてであった。

だからこそ、我とお主、どちらが強いのか確かめたい。

王という責務を忘れてな」

これも男の性なのか、

イリヨスもどうやら私と同じ様子。

その証拠に黄金の翼はさつきよりも輝きを増し、彼から感じる力がより一層強まった

レ「どうやら私達2人揃つてガキみたいですね」

イ「そうだな、それも相当の悪ガキだな」

レ「ふふふ・・・」

そしてお互いに歩き出し。

レ「私が
」
イ「我が
」

拳を握りしめ。

『勝つつつつ！！！！！！！！』

殴りあつた。

それは奇しくも、私達が戦い始めた一撃と同じに、
お互いの拳にぶつかり合った。

ただ1つだけ違うのは、
戦いではなくケンカになっただけ、
やる事は同じですが、気持ちの問題です。

さあイリヨス、
お互いにバカやって、アホやって、
血も反吐も吐いて血反吐はきましよう、
ズタズタのボロボロになってズタボロになりましよう、
なんたってこれはケンカ、
私と貴方の、命を賭けた一世一代の大ゲンカです。

イリヨス、
貴方が死んでも、私が死んでも、
恨みっこ無しですよ。

三人称

拳がぶつかり合った2人は、
ズササツと音をたてて後ずさる。

イ「フォス・アナトリ光の日の出!!!」

イリヨスの右手からは閃光が迸り、
まるで噴火口の近くに居るかの様な熱さの光球が、
レイにかざされるが・・・

レ「過撃!!!!」

レイは神速の踏み込みでイリヨスの懐に潜り込み、
拳はイリヨスの身体にめり込んで、
イリヨスは身体をくの字に曲げながら苦悶の声をあげる。

イ「ゴハッ!・・・っのおおおお!!!」

レ「ぐがっ」

だがイリヨスも負けておらず、
口から血を吐きながらも、
攻撃が終わったばかりのレイに拳を振り下ろし、
ぐちゃつと音をたてて、レイは潰れた。

レイの身体は足などの末端部分が辛うじて残っただけだったが、
イリヨスの攻撃では、今のイリヨスの攻撃ではレイは死なない。

レ「影のふあげの尖兵せんふえい」

グチャグチャに潰されたばかりで、
満足に呂律が回っていないが、
レイの言葉で、数本の影が鋭利な刃物の形と成って、
イリヨスに向かって延びていく。

イ「フロガ・ヴロヒ炎の雨!!」

イリヨスは黄金の翼を羽ばたかせて空に舞い、
見る者を圧巻とさせる美しい黄金色の炎球が煌めき、
追随せんと延びていく影に向かって放たれる、
地面で、まだ潰れているレイも滅ぼそうとして。

炎の雨は向かってきた影を焼き切り、
その射線上にいる地面までも焼き、溶かす、
だが、そこにいる筈の人物は既にいなかった。

レ「残念でしたね」

イ「なにっ!？」

何時の間に移動したのか、
レイは蝙蝠の羽をためかせ、
イリヨスの後ろにいた。

イ「このっ
」

レ「遅い!!!」

イリヨスは振り返ろうとしたが、既に遅く、
さっきのお返しとばかりに、
今度はレイが、イリヨスに拳を振り下ろす。

イ「があっ!!」

イリヨスはレイの攻撃をまともに食らってしまい、
まるで流星の如きスピードで地面に激突して、
地面からは膨大な土煙が、辺りを覆った。

だが、そこから間はおかずして・・・

イ「
アナラビ・アリスイダ
閃光の鎖」

レ「っ！？」

突如、土煙から4本の鎖が姿を現し、
レイの手足を拘束する。

レイは力ずくで引き千切ろうとするが、
力を込めれば込める程、シュウウウと音をたてて、
レイ自身の身を焦がす。

イ「^{エクリクスイ・ロンヒ}
噴火する槍！！！」

その鎖を出した張本人であるイリヨスは、
槍投げ選手のような体制で構え、
その手からは止めど無く力が溢れ出し、
やがてその形は溶岩の槍と成って、
今度こそレイを殺そうと道中の空間を焦がしながら、
レイの心臓に向かって突き進む。

レ「こっのおおおおおおおおお！！！！！！！！」

レイは間に合わないと悟ったのか、

無限の夜羽によって手足を蝙蝠化させて、
鎖の拘束から無理矢理抜け出し、
遮二無二避ける。

だが、それも少し遅く、燃え滾る槍によって、
レイの右肩から先は蒸発した。

レ「く．．．ああつ．．．．．」

イ「はあ、はあ、はあ．．．これで、どうだ」

息を整え、その身を砂埃で汚しながらも、
その眼力は衰えることなく、
イリヨスはレイを見据える。

レ「
ニイ」

右肩から先は蒸発して消え、
魂殺しの攻撃を受けたというのに、
レイは不敵な笑みを浮かべていた。

次の瞬間．．．．．

イ「なん．．．だと．．．．．」

そのあり得ない光景に、
イリヨスは驚きで目を見開いた。

彼が見たモノとは……………

レ「残念ながらその攻撃ではもう、私は殺せません」

蒸発した筈のレイの右肩が、
まるで嘘であったかの様に元に戻っていたのだ。

イ「何故だ…何故我のあの攻撃を受けて傷が治っている。

レイよ、お主一体ナニをした？」

レ「私は膨大な数の命をストックしてしまっ
今までは私本体の魂を全面に押し出していました
今回だけは私の魂を奥に引っ込め、
他の命を前に出しています」

イ「成る程、命を使つての身代わり…か、
これでお主を見た時に感じたナニかが漸く分かつた。
いよいよ以つてとんでもない存在だな、お主は」

レ「…軽蔑しましたか？」

こんな卑怯な手を使つて貴方に勝とうとしている私を」

イ「なに、お主との殴り合いで勝てなかったから、

我も【魔法】という法外な力を使ったのだ、
全く気にしておらんよ、
寧ろ、これでお互いさまだ。

スリアンゾオス・スバスイ
勝利の劔

イリヨスが左手を天にかざすと、
爆音と共に雷が落ちた。

雷はイリヨスの手に帯電し、
次第に明確な形を帯びていき、
やがてソレはバチバチと音を鳴らす、
美しい劔つるぎに成っていった。

イ「それよりも安心したぞ、
これでまた戦い続けられる」

強敵ライバルと戦える喜びなのか、
イリヨスは劔を下ろしながらも、
どこか嬉しそうな笑みを浮かべる。

レ「それを聞いて安心しました。
さあイリヨス、私を殺し尽くしてみなさい」

イ「言われなくとも!」

イリヨスは直ぐ様大空に飛翔し、
レイに向かって逆袈裟斬りをする。

レ「．．．無限の夜羽」

だが、レイの身体は突如蝙蝠と化し、
イリヨスの剣戟はまるで雲を斬ったかのように空を斬り、
蝙蝠の群れによってイリヨスの視界は遮られた。

レ「沈め！！」

イ「ぬっ！？」

そしてレイはイリヨスの背後をとり、
両手を握り合わせ、ハンマーの様にして、
イリヨスに振り下ろす。

イ「タクスイ・アルマトスイア秩序の鎧！！」

レ「くっ、硬い．．．」

反撃も回避も間に合わないと悟ったイリヨスは、
自分の全周囲に黄金の壁を出現させ、

鎧はヒビが入りながらも主であるイリヨスを守り、
レイはその鎧いの硬さを忌々しげに眩く。

イ「はあああつ！！！」

レ「ぐっ」

攻撃が終わった僅かな隙を狙い、
イリヨスは回転の力を加えて胴切りを放ち、
レイの身体は真つ二つに斬られたが、
まだレイは死なない。

レ「せりやああああああ！！！！」

イ「ぬおっ！？」

直ぐ様身体を再生させたレイは、
斬り終わったイリヨスの左腕を掴み、
地面に向かって思いつ切り投げ飛ばす。

だがイリヨスも数十m飛ばされながらも、
なんとか踏ん張って、空中に留まる。

レ「うおおおおおおお！！！！！！！！！！」

イ「くっ、アルモニア・アスレタ調和の盾！！！」

レイは追撃の手を緩めず、急降下の力をプラスして、渾身の回し蹴りを放つ。

イリヨスは何とか耐えたが、レイに投げ飛ばされたせいで、踏ん張りが足らず、勢いまで殺せずに、地面に降りてしまった。

イ「しまっ
」

そう、最初からこれがレイの狙いだったのだ。

空中戦ではイリヨスの方に分がある、向こうは空で飛び慣れて、レイは飛び慣れておらず、ちゃんとした足場が無いからだ。

だが地上ならレイの方に分がある、何故なら地面にはちゃんとした足場があり、究極の武技が使えるからだ。

レ「侵撃ツツツ！！！！」

スタツと地面に降りたレイは、
すかさず防御不可能の一撃を叩き込む。

イ「させぬつつつ!!!」

その恐ろしさを身を以て味わったイリヨスは、
防御などせず、雷の劔を振り下ろす。

レ「ぬおおおおおおお!!!!!!」

イ「なつ．．に．．」

だがレイは両腕を雷で焦がしながらも、
その雷の劔を真劔白刃取りの形で受け止めた、

レ「　　シツ!!!」

そして、その劔の腹の部分をレイは拳でなく、
爪で引き裂き、雷の劔はガラス細工が割れた様な音を響かせ、
光の粒子となって消えた。

イ「くつ、フォス・グロスイヤ光拳!!!」

レ「・・・ふっ」

だがイリヨスもタダでは終わらず、彼の拳は光り輝いてレイに振り下ろされるが、レイはその場からバックステップして拳を躲す。

イ「アスツルビ・プリミラ稲妻の洪水！！！！！」

レ「っ！？」

だが、後退はイリヨスを相手にしては悪手だった。

イリヨスは両手両足を地面に着け、彼の口からは途方もないエネルギーが収束し、それはまさに稲妻の洪水と成ってレイに押し寄せた。

レ「っおおおおおおおおお！！！！！！！！」

右の脇腹が蒸発しながらも、

レイは洪水の射線上から飛び退く。

イ「フォス・グロスイヤ光拳！！！！」

レ「ぬがっ！！」

だがその回避先には既にイリヨスが先回りしており、
光の拳がレイ目掛けて振るわれ、
レイは両腕を交差させて防ぐも、
威力と衝撃は完全に防ぐ事が出来ず、
両腕は小さな破裂音と共に吹き飛び、
身体は風切り音を出しながらぶっ飛ばされ、
背後にある小さな丘に激突する。

イ「エクリクスイ・ロンヒ噴火する槍!!」

レ「ガハッ」

それでもイリヨスは追撃の手を断じて緩めず、
噴火目の溶岩の槍をレイに目掛けて投擲し、
レイの心臓は溶岩の槍に穿たれ、
彼の心臓と周辺の臓器を焼き焦がす。

レ「このっ!!...このふっ、まだまだ死にませぬよばだばだじにませんよ」

普通だったらとつくに死んでいる筈の傷なのに、
レイは自分の心臓に突き刺さっている槍を抜き、
口から盛大に血を吹き出し、
満足に喋る事も出来ないのにも関わらず、
何事も無かったかの様に喋り出す。

イ「全く．．．一体何回殺せばお主は死ぬのだ」

レ「がふっ．．．言った筈ですよ。

私を殺し尽くしてみなさい、ってね」

イ「そうだったな、失念しておった」

あの怒涛の連撃をまともに食らい、

何回殺しても死なないレイに、

イリヨスは小さな溜息を吐く。

だがイリヨスの瞳には諦めの色はなく、
寧ろ生き生きとしている。

イ「縛れ、アナラビ・アリスイダ閃光の鎖！！」

言うと同時に、レイを縛り付けた4本の輝く鎖が出現し、
レイの手足を拘束せんと迫り来る。

レ「　　ふんっ！！」

イ「ぬっ！？．．．おお！？」

だがレイも、みすみす捕まるつもりはなく、
4本の鎖を右腕1本で掴み上げて、
逆にイリヨスを引っ張る。

右腕はシューウと音を立てて焦げるが、
今迄のイリヨスの攻撃の蒸発、溶ける、焼き切れる、に比べれば、
この程度は火傷程度でしかない。

イリヨスも最初はレイの力に拮抗していたが、
此処に来て重大な問題が起こった。

レイは殺される度に他の魂が入れ替わり、
全てがリセットされる、

そう、それは傷であり、魂であり、そして疲労感も例外ではない。

それに比べてイリヨスはどうか？

此処までずっと戦い続けて疲れない訳がない、

そのせいで今まで平行を保ってきた“力”という天秤はレイに傾い
てしまった。

なればこそ、結果は必然、

イリヨスはレイに引っ張られ、

レイの射程圏内まで近づいて行く。

イ「くそっ、フロガ・ヴロヒ炎の雨!!!」

レ「.....」

何とかこの状況を打破しようと、
イリヨスは炎の雨を以ってレイを焼き払う、
その炎球の数は100を超え、
今までで一番の数だった。

それなのにレイは避ける事も、防ぐ事もせず、
100を超える炎球にその身を焼かれ、再生を繰り返しながら、
イリヨスを引つ張る力は決して緩めない。

そして対に、レイが動いた。

レ「はあああああああああツツツ！！！！！！」

一定の距離までイリヨスを引つ張ると、
まるで足に爆薬を仕掛けていのではないかと思う様な疾さで駆け、
拳ではなく、まるで死を連想させるような霧囲気を放つ爪をふるう。

イ「くつ、アルモニア・アスレダ調和の盾アアアア！！！！」

その只ならぬ霧囲気を感じ取ったのか、
今迄のどの盾よりも、光り輝く盾を顕現させる。

防御を突き抜ける侵撃を除けば、
レイは盾を砕く事が出来ず、
イリヨスは無敗を誇っていた。

イ「があああああ！！つ、アスツラビ・プリミラ稲妻の洪水アアアア！！！！」

左の脇腹を切り裂かれ、夥しい血を流しながらも、イリヨスは反撃を諦めず、

レイに向かって洪水の如く膨大で巨大な稲妻を放つ。

レ「無限のよばね」

レイは無限の夜羽を使つての回避を試みるが、そのスピードと近距離から放たれたのが重なつて、殆どの蝙蝠が稲妻の奔流に吞まれて蒸発し、僅かに残つた3〜4匹の蝙蝠も身体の大部分を失っている。

やがて蝙蝠達はその姿を放棄して黒い泥となり、モゾモゾと這いずりながら一箇所に集まつて、次第に泥はその量を増やして人の形をとり、ソレはレイと成つていった。

レ「はあ、はあ・・・間一髪でしたね・・・」

イ「そうか・・・そういう事だったのか・・・」

だがレイの様子は何時もと違い酷く息を乱していた、勿論あの一撃を受けて魂もリセットされているので疲労感ではない、

冷や汗を流すその姿は、まるで死を垣間見たソレだ。

その姿を見たイリヨスは、何かに気付いた様子。

イ「レイよ、お主の今の様子を見て分かった、

どうやらお主の命を使った身代わりも、

お主の身体全てを滅すれば発動しない、違うか？」

レ「あら、バレてしまいましたか・・・

ええ、その通りです。

この命の身代わりは私の身体全て・・・

血肉の一片も残さずに滅ぼせば発動しません。

だから私はさっきの攻撃を全身全霊で避けた、

あんなの食らったら、それこそ影も残りませんからね」

イ「そうか、これでお主を倒す法が見つかった。

本来なら戦略を組み立ててお主を倒したいのだが・・・

残念ながら我にはもう体力が残っていない。

このケンカが終わってしまうのは真に残念だが、

次の一撃で決着をつけるとしよう」

そう言うと、イリヨスの身体は太陽の如く光り輝いた、

その姿は果てしなく美しく、身を汚す血すらも、

直立不動で構える彼の威風堂々たる荘厳さを飾り付ける装飾に成る。

レ「……………素晴らしい」

ベッルス

その美しさにはレイすらも感嘆の声を漏らし、
イリヨスの姿に見惚れる。

イ「これが我の最強にして最後の一撃、

そして、我そのものだ。

故に敗北は無く、絶対の勝利を誓う」

イリヨスの輝きはより一層増していき、
周囲の大地を溶かし、果ては空間まで焼く。

レ「申し訳ありませんが、私は貴方の様な素晴らしい技は持ち合わせていません。

私に出来る事は、この一撃に全身全霊を込めるだけです。

貴方の期待に応える事が出来ない私を許してください」

レイの左腕にはイリヨスに匹敵し得る程のエネルギーが集結し、
彼の周りにある空間はヒビ割れる、
比喩などでは無く、本当に空間がヒビ割れたのだ、
まるでこの空間に数万の命が押し込まれているみたいに・・・

『 いくぞっ！！！！！！！！！！』

方や空間を焼き焦がし、方や空間にヒビをいれながら、

2人は背中を向けたまま何も語らない、
無音が世界を支配しているなか、
やがて1人が無音の世界を破った。

イ「
このケンカ」

イリヨスは静かに呟く、
だがその声はどこまでも届きそうな程、よく聞こえた。

イ「
お主の、勝ちだ」

イリヨスは最後にそう呟くと、
肩から大量の血を噴き出して地面に倒れた。

こうして太陽は堕ち、夜が勝利した。

レ「.....」

レイはイリヨスに向かって無言で、静かに歩き出す。
そしてレイは、イリヨスに爪をかざした.....

イリヨス視点

イ「ん、此処は．．．．．」

レ「目を覚ましましたか」

我が目を開けると、側にレイがいた。

イ「そうか、我は負けたのだな．．．」

その事実を口にして悔しさは無かった。

ただ、欲を言えば勝ちたかったがな。

それよりも気になるのが．．．

イ「何故、我の傷を治した」

我の傷が癒えているのだ。

はつきり言つて、我の命を救ったところで、

レイ達は何の益も無い。

我の統治世界で蒐集を続けるのなら、

我は何回だって止めさせる。

レ「そんなの簡単ですよ。

せつかく出来たケンカ友達に死なれたら困るからです」

シ「バツとして何をやらせるか・・・」

ヴィ「あたしはレイと一緒に寝る」

シ「ふむ、では私はレイと一緒に風呂を」

レ「ちよっ！ちよっと待って！イ、イリヨス！
貴方の方からも何とか言ってください！！」

むっ、そんな目で見られても困る、

此処で我が口を出せば確実に2人に殺られる。
それ程のオーラが2人から出ているのだ。

レ「・・・病み上がりなのでパスだ」

レ「イリヨスウウウウウウウ！？」

済まない、こればかりはどうする事も出来ない、
レイは2人に連れられて行ってしまった。

イ「・・・何時もこうなのか？」

ザ「まあ、日常茶飯事だな」

シャ「賑やかですよね」

我は隣にいたザフィーラとシャマルに話し掛ける。

そうか、何時もこうか・・・

レイ、何と言ったら分かんが強く生きてくれ。

だが、見てる分には面白いな・・・

~~~~~

ところ変わって此処は時空管理局艦船アースラ、  
レイ達はまだ知らないが、時空管理局の戦力だ。

リ「どう？次元震は？」

尋ねるは長い翠色の髪をした美しい美貌を持つリンディ・ハラオウ  
ン。

見た目は20代と言っても通りそうだが、  
14歳の子供がいるので実年齢は3      あ、ちょっと待ってゴメ  
ンなさい、

だからその魔方陣をしまつて下さい。

え？殺傷設定だから大丈夫？いやホントにゴメンなさい！！

ゲフンゲフン、20代前半です！！（涙）

エ「は、はい．．．なんとか収まりました」

答える人エイミー・リミエッタはぐだぐだっとコンソールの上で上半身を預ける。

ク「いきなり大規模な次元震が発生したからな、

疲れるのも無理はないさ」

そのエイミーの近くで肩に手を置くのはクロノ・ハラOWN。  
ファミリィネームで分かるかもしれないがリンディ・ハラOWNの息子だ、  
歳はさつきいったように14歳、年齢にそぐわぬ童顔がコンプレックスだったりする。

リ「第22管理外世界、確か“彼”の統治世界だったわね？」

エ「はい、超S級生体ロストロギア龍王イリヨス、

何年間も管理局が部隊を派遣しましたが全て全滅、

最終的に管理局は不可侵を決め、一切の手出しを禁止。

正真正銘とんでもない相手です」

ク「僕も映像だけでしか見てないが、

アレはどう足掻いても勝てない相手だな」

エ「うん、アレは手を出さない方が懸め．．．あ！  
今思ったんだけどさ、レイ君とイリヨス、どっちが強いと思う  
？」

ク「レイとイリヨスか．．．勝敗は分からないが、

その世界が滅ぶ事だけは分かる」

エ「あはは、そだね」

そこから2人はある事ない事を喋り出した。  
だがここに、1人だけ思案顔の人物がいた。

リ「．．．．．」

リンディはさつきから言葉を発さず、  
1人物思いに耽っていった。

リ「．．．．．まさか、ね」

だがすぐに思考をシャットアウトし、  
お茶が淹れてある湯呑みに手をのばす。

白い角砂糖をいれて・・・

リ「ずずっ・・・美味し」

## 第24話 決着（後書き）

レ「ただいま戻りました」

イ「．．．その手に付いている赤い液体は何なのか聞かない方がいいのか？」

レ「ええ、お願いします」

イ「．．．．．分かった」

レ「それよりも漸く決着が着きましたね」

イ「ああ、あんな清々した気持ちは生まれて初めてだった」

レ「私もですよ。やっぱり男の“子”ですね」

イ「何故“子”を強調したのかわからんが．．．

そうだ、あの後どうしたのだ？

2人に連れて行かれたが．．．」

レ「もちろん2人の言った通り、

シグナムと一緒に風呂に入りましたし、

ヴィータと一緒に寝ましたよ。

イリヨス．．．止めてくれても良かったのに．．．」

イ「済まぬ．．．その事については幾らでも頭を下げる」

レ「まあいいですよ．．．後で作者のどこに行きますから（ボソッ

それよりも、イリヨスって時空管理局と殺りあっていたんですね」

イ「その眩きも何も聞かない方が．．．まあ、いい。

向こうが勝手に攻め込んで来たんだ。

「我々は次元世界を管理する義務がある」とか巫山戯た事を抜かしながらな」

レ「そうだったんですか、それにしても大規模次元震ですか．．．  
ちよっとやりすぎちゃいましたね」

イ「ああ、我も民草にシコタマ怒られた．．．

反省をせねば．．．．．」

レ「そうですね、反省です。

と言う事で作者のそこに行ってきます」

イ「何故」と言う事で」になるのか．．．って行ってしまったか．．

それでは読者の皆よ、また会おうぞ」

作「と言っても暫らくイリヨスは出て来ないけどね」

イ「なんと!？」

レ「死ねよや作者あああああああ!?!?!」

作「ひぎゃあああああああ!?!?!」



第24・5話 ヴォルケンの日常・シグナム篇（前書き）

レ「さて、今回はヴォルケンリッター4人との日常篇です。

まず最初はシグナムからです。シグナム、よろしくお願いします」

シ「ああ、こちらこそ」

レ「今回は4分割されているので、まあ、軽く見てやってください」

## 第24・5話 ヴォルケンの日常・シグナム篇

このお話しは雲の騎士達の主である八神はやてが、  
闇の書の呪いによって命の危機に晒され、  
それを救うために罪を重ねる騎士達と吸血鬼の物語。  
これはほんの少しの間に繰り広げられる日常。

そのほんの僅かな幕間幸せをご覧こう

くヴォルケンの日常・シグナム篇く

シ「はあああああああ！！！！」

レ「ふっ」

まだ朝日が昇って間もない頃、  
庭で小気味の良い音を鳴らしながら  
2人は木刀を振るう。

何故こんな事をしているのかと言うと、  
単純にシグナムの運動相手をしているからだ。

シ「せりやあああああ！！！！」

レ「甘い！！」

シグナムは気迫の一撃を  
頭から一直線に振り下ろすが、  
レイは横に薙ぎ払ってシグナムの剣戟を弾く。

シ「くっ！？、まだだ！！」

レ「うおっ！？」

だがシグナムは弾かれた木刀の勢いを  
回転の力に加えてレイの脇腹に回転斬りを放ち、  
レイは防ぐも勢いを殺せず後ずさる。

レ「マズっ  
」

シ「勝機！！！」

レイが体勢を崩したところを勝機と見たのか、  
シグナムは体勢を整える暇を与えず、  
袈裟斬り、胴斬り、逆袈裟斬り、斬り下ろし、と、  
次々と打ち込んでいく。

レ「  
よっ」

シ「な！？」

だがレイは、その怒涛の連撃から逃れるためにシグナムの放った胴斬りをジャンプしながら防ぎ、レイは運動法則にしたがって飛ばされる。

当然、それは予期せぬ出来事とは違い、レイ本人が望んで飛んだのでレイは着地した後、すんなりと体勢を立て直す。

シグナムはレイが行ったその常識外の行動に目を見開いた。

レ「次は私の番です」

シ「くっ・・・」

そこから先の展開は完全に逆となり、レイの連撃をシグナムはただ防ぐしか出来なかった。

レ「　　シッ」

シ「っ！！・・・」

レイから放たれる剣戟は目視するのが困難なほど速く、シグナムは長年培った騎士の経験と、

才能とも言える見事な剣技で、  
見えない剣戟を防ぐ。

レ「 ふんっ!! 」

シ「ぐっ!!!!」

かと思つたら、次の剣戟は恐ろしく重く、  
心なしか、木刀からはカンツと小気味の良い音ではなく、  
ゴンツと鈍い重低音が聞こえる。

その剣戟は音に全く違う事なく、  
木刀を握る腕からも衝撃が伝わり、  
芯から来る様な剣戟を受けたシグナムはその重さに苦悶の表情を浮  
かべる。

レ「 ふっ 」

シ「くあっ」

そこから立て続けに来る見えない剣戟に、  
シグナムは疲労を癒す間すら与えて貰えず、  
ただ耐えるだけだった。

レ「 せいっ!!!! 」

続けてシグナムの脳天一直線に向かって、  
レイは渾身の重い一撃を叩き込む。

重い剣戟によつて削られる体力、  
見えない剣戟を防ぐ為に必要な集中力、  
一般的．．．と言つても変だが、  
達人クラスでも、この一撃で終わるだろう。

だが．．．．．

シ（　　そこだ！！）

烈火の将の名は伊達じゃない。

レ「な．．．っ!？」

レイから放たれた剣戟を、

シグナムは受けた瞬間に手首の力を抜いたのだ、  
当然シグナムの木刀は力に逆らう事なく傾き、

レイの木刀は滑る様に流れて、

シグナムは半身だけ動いて剣戟を避けた。

それによってシグナムが受ける衝撃は0となり、

レイの体勢は前のめりに崩れて致命的な隙となった。

シ「貰った!!!」

その決定的な隙を、シグナムは見逃す筈はなく、  
レイの首に目掛けて木刀を振るう。

シ「．．．．．．．．．．．．．．．．」

レ「．．．．．．．．．．．．．．．．」

とても静かな静寂が2人の世界を包む、  
その静けさは雀のさえずりが五月蠅く感じる程に。

そして2人はお互いの首元から剣を退く。

シ「引き分け・・・か」

レ「そう・・・みたいですね」

そう、シグナムに木刀を振るわれた時、  
レイも実は攻撃していたのだ。

は「2人とも、ご飯やよ」

レ「もうそんな時間ですか・・・  
そろそろ戻るとしましょう」

シ「そうだな」

はやての声を聞いて2人は  
手元に置いてあるタオルで汗を拭って、  
リビングに戻っていった。

シ「ん・・・」



その途中、太陽の光がシグナムの顔を照らし、  
シグナムは目を細めた。

シグナムは、しばらく太陽を見つめていると・・・

シ「・・・・・・・・・・・・・・・・よし」

それは何に対しての言葉だったのか、  
一日の始まりに対してか、

さっきの模擬戦の出来に関してか、  
はたまた主の八神はやてが今日も生きていた喜びか、  
その眩きは誰に聞こえる事なく朝の光に溶けていった。

は「シグナム？みんな待つとるでえ」

シ「あ、済みません、今行きます」

そしてシグナムは再び歩き出した。

シ」

なあ、今日も一日を<sup>幸せ</sup>始めよう

第24・5話 ヴォルケンの日常・シグナム篇（後書き）

レ「今回は引き分けですね」

シ「だな。いい運動だった」

レ「取り敢えずこれでシグナム篇は終わりです。

次も見てやってください」

第24・5話 ヴォルケンの日常・ザフィーラ篇（前書き）

レ「次はザフィーラ篇です」

ザ「・・・レイよ」

レ「分かっています」

ザ「シグナムもそうだが、私の話しも短くないか？」

レ「仕方ないですよ。作者の力量もそうですし、  
今回の話しはシャルとヴィータが主なのはなしなんで、」

ザ「なんか釈然としないな・・・」

レ「じゃあ、作者をちょっと殺っちゃいますか」

ザ「そうだな」

レ「では皆さん。続いて見てください」

## 第24・5話 ヴォルケンの日常・ザフィーラ篇

「ヴォルケンの日常・ザフィーラ篇」

少し肌寒い海鳴の街で、

ザフィーラとレイは歩いていた。

ちなみにザフィーラの服装は、

紺色のジーンズと灰色のシャツ、

そして黒のミリタリージャケット、

シャツにはちゃっかり、Guardian<sup>守護者</sup>の文字がプリントされている。

正史では定かか分からないが、

この世界のザフィーラはレイのお陰で、

ちよっぴりファッションに拘っていたりする。

ザ「段々と寒くなってきたな、この街も」

レ「もうすぐ冬ですからね、

はあ・・・ほら、息も白くなっています」

レイの息は空気中で白い煙となり、溶けた。

その息をはく姿は見た目より幼く、

男性も女性もドキッとする仕草だった。

ザ「そうか、主の体調が崩れぬよう、  
気を配っておかなければな」

だがそんなレイの仕草を見てもザフィーラは全く動じていなかった、  
その代わり道行く人の殆どがレイの仕草にドキツとした。

ちなみにこの2人はよくこうして歩き、

その度に街の人にはデートと間違えられて、

海鳴では結構有名人だったりする、

勿論2人はそんな事は全く知っていない。

レ「ええ、はやての体調には注意しておかないと・・・  
っと、着きましたね」

ザ「ん、そうみたいだな」

2人が着いたのは海が一望出来る公園、  
だが、この寒い時期では人も数える程しかない。

レ「それでは、始めますか」

ザ「今日も宜しく頼む」

そう言うと、ザフィーラの服装は騎士甲冑へと姿を変え、  
公園の背景はガラリと変わり、

数人しかいなかった人は姿を消した。

実はこの2人、こうして時間の合間を見つけては、ザフィーラの鍛錬をしているのだ。

勿論、鍛錬をするは究極の武技、  
六宝むぼつが一つ、過撃を修得する為に。

レ「さて、では前回のおさらいです。

ザフィーラ、私に踏み込んで来てください」

ザ「分かった・・・

すう・・・はあ・・・すう・・・はあ・・・」

ザフィーラは静かに息を整え深呼吸する、

1つ・・・2つ・・・3つ・・・4つ・・・

そして準備が完了したのか、

ザフィーラは深く腰を落として構える。

ザ「ふんっ」

ザフィーラはまるで弾丸の様に飛び出して、  
レイの懐に潜り込む。

だが・・・

レ「まだまだ荒いですね」

ザ「ふう．．．またか」

レイはザフィーラの顔の前に拳を突き出し、  
ザフィーラはため息をはきながら構えを解く。

レ「スピードは及第点ですが、  
踏み込みは全然ですね」

ザ「やはり踏み込みか．．．  
その踏み込みがどうも上手くいかな」

レ「過撃はスピードも大事ですが、  
最も大切なのが踏み込みです、  
この技の命と言ってもいい。  
走る動作Ⅱ走る力を得るのではなく、  
歩く動作Ⅱ走る力を得る、  
と言ったら分かり易いですかね？」

ザ「成る程、ただ単純にスピードを出すのではなく、  
相手に錯覚を思わせる様な踏み込みが大切なだな」

レ「ええ、相手のリズムを崩して、  
そこに付け入る、　　こんな風にしてね」



すると、レイは一瞬にしてザフィーラから距離を開け、そしてまた一瞬にしてザフィーラの近くに戻った。

レ「自分の重心を調整して、

相手に“まだ来ない”と思わせ、

重心をそのままにして相手に踏み込む。

相手は全く予期せぬ事に、

“気付いたら目の前にいた”と錯覚する。

過撃はスピードも全て引つくるめて歩法の極地なんですよ」

ザ「そうか、やはり修得するには一筋縄ではいかな。

だが、それでこそ燃えるというものだ」

何時も冷静なザフィーラと違い、

その目は高い壁を乗り越えようと、

情熱の炎を燃え上がらせる男の目だった。

レ「その意気ですザフィーラ、

さて、続きをしましょう」

ザ「応っ！！」

そこからザフィーラはレイの細かい改善点を交えながら、過撃の鍛錬に没頭していった。

~~~~~2時間後~~~~~

ザ「はあ．．．はあ．．．はあ．．．はあ．．．はあ．．．」

なんとザファイラは2時間もの間、
踏み込みの単一鍛錬を繰り返していたのだ。

ザファイラの身体からは滝の様に汗が流れて、
極度の酷使によって足はブルブルと震え、
立っているのも辛い様子。

こうして立っているのは、
意地みたいなものだろう。

レ「よし、今日はここまでです」

ザ「はあ．．．はあ．．．やっと、終わったか．．．」

レイから正式に終了の合図を聞くと、
ザファイラは地面に大の字で倒れこんだ。

レ「お疲れ様です、ザファイラ」

ザ「ああ．．．今回の鍛錬で、どこまで進んだ．．．」

レ「まだまだ全然です。」

ようやく入り口が見えた所ですかね」

ザ「ふう．．．道程は遠く険しいな」

レ「当たり前です、六宝むぼの技一つが
人1人が一生賭けて辿り着けるかどうかの域ですからね、
そんな一朝一夕で直ぐに辿り着けませんよ」

レイは優しく微笑みかけると、
ザ「フィーラの手を掴んでゆっくりと立たせる。」

レ「家に帰ったら汗を流しましょう。
熱いお風呂が待っていますよ。
それと美味しいご飯も」

ザ「．．．野菜が食いたいな」

などと、狼にあるまじき発言をしながら、
ザ「フィーラはレイの肩に掴まり、
我が家に向かって歩き出した。」

ザ

さて、

鍛錬幸せを続けなければ

第24・5話 ヴォルケンの日常・ザフィーラ篇（後書き）

レ「ふう・・・スッキリしました」

ザ「レイよ。さすがに殺りすぎではないか？」

レ「あれ？そうですか？」

ザ「見る。体が曲がらない所まで曲がっているぞ」

レ「まあ、次の話しには元に戻っているでしょう。生命力はゴキブリ以上なんで」

ザ「そ、そうなのか？」

レ「ええ、そうです。と言う事で次行きましょう」

第24・5話 ヴォルケンの日常・シヤマル篇(前書き)

レ「さて次は・・・ってコレですか・・・」

ザ「悪夢だな・・・」

シ「あの時だけは命の危機を感じたな」

ヴィ「うう、今でも寒気がしてくる・・・」

レ「私も吐き気が・・・
取り敢えず見ますか・・・はあ・・・」

第24・5話 ヴォルケンの日常・シヤマル篇

シヤマル先生のお料理教室^{ポイズンクッキング}

シヤ「~~~~、~~~~、~~~~」

シヤマルは1人台所に立ち、
楽しそうに鼻歌を歌う。

ちなみに他のみんなは主はやての定期検査に行っている為、
この家に居るのはシヤマルだけである。

シヤ「うふふ、完成です」

料理が完成したのか、
シヤマルは満面の笑みを浮かべながら、
料理をお皿に盛りつける。

その笑顔はとても嬉しそうで、
見る人全てが和む様な笑顔だった。

は「ただいま」

と、そこへ、検査が終わったのか、

はやて達が帰宅し、シャマルは玄関へ行く。

シャ「お帰りなさい、はやてちゃん。

あれ？レイ君はどうしたんですか？」

は「レイ兄いなら商店街でお買い物やで、

そろそろ冷蔵庫の中がカラになってきたから」

どうやら一緒にいたレイは、

買い物に行ったらしく、

まだ帰って来ていない様子。

シャ「そうですか、取り合えずリビングに行きましょう。

外も寒くなってきましたし、今お茶を淹れますね」

は「ありがとうな、シャマル」

シャ「それと、今日の晩ご飯は私が作りましたので楽しみにしてて下さいね」

は「へへ、シャマルが作ったんか？

それは楽しみやな」

シャ「はやてちゃん程美味くはないですけどね」

は「そんなのええんよ、

大事なのは“気持ち”なんやから」

はやては少し良い言葉を言いながら、
皆んなと一緒にリビングへ行った。

だが、これが悪夢の様な大惨劇の始まりである事を、
この時は皆、知る由も無かった。

はやて視点

は「えっと・・・シャル、 “コレ” は一体なんや？」

わたしは目の前に置いてある謎の物体を見て、
ソレを出した張本人であるシャル聞かずにいられなかった。

確かシャルは「お茶です」と言った筈や、
やけど目の前の “コレ” がお茶の訳ない。

シャ「なにつて・・・お茶ですよ」

は「あ、あははは・・・そうか・・・」

いやいやいやいやいや！！！！

“コレ”絶対お茶な訳ないやろ！？

なんか気持ちが悪くなるくらいのだ紫やし、

何故か淹れたばかりなのに人肌の温さで、

それなのにさつきからゴポゴポって不気味な音しとるし、

“コレ”何所の産業廃棄物や？

お茶？「ぐぼあ」

《シュウウウウ・・・》

跳ねたあああ！？そんでもってテーブルが溶けたあああ！？

てか「ぐぼあ」って、初めて聞いたわそんな効果音！！

絶対“コレ”がお茶な訳ないって！！！！

は「シャマルちよつと待　　「そうだ、ついでに料理も持ってき

ますね」シャマルウウウウウ！！！！」

シャマルが行ってもうた・・・

てか、この“お茶？”で既に大惨事やのに、

料理が来たら一体どれだけヒドインやろ・・・

みんな『・・・・・・・・・・・・・・・・』

それを予想したのか、皆んなの表情も暗く、どんよりと沈んどる。
ああもう！！どないしたらええんや！！この“お茶”

は「ん？」

なんか一瞬、黒いナニかが“お茶？”の中で動いたような・・・
いやいや、そんな訳ない、きつと見間違いや。
たぶん茶葉とかの溶け残り

お茶？「ぐび？」

は「い・・・いやあああああああああ！！！」

何かいる！？あのド紫の液体の中に何かいる！！しかも目が合った
！？

シヤマルこの中にナニ入れたんや？

人体錬成でもしたんか！？真理の扉開けたんか！？

てか、何でただの・・・と言っても変な言い方やけど、

お茶なのに「キャラ専用」が付いとるんや？

もしかしてド紫の液体やなくて、

アノ謎の生物がお茶なんか？

え．．怖っ！！そしてグロッ！！

は「．．シグナム、「コレ」どうにか出来ひん？」

シ「申し訳ありません、

こればかりはどうする事もできません」

うん、シグナムも対処法が分からんか、
ならヴィータに

ヴィ「コレを飲まなきゃあたしは死ぬ、コレを飲まなきゃあたしは
死ぬ、

コレを飲まなきゃあたしは死ぬ、コレを飲まなきゃ．．．」

は「ヴィータ！そんな自己暗示をかけてもダメや！！
むしろ飲んだら死んでまう！！」

危ない危ない、もうちょっとで死人が出る所やった。
でもヴィータは精神的に参つとるなあ、
こうなったら最後の誓のザフィーラや。

は「お願いや、もうザフィーラしか頼めないんや、
何とか出来ひんかな？」

ザ「．．．．．お任せ下さい」

おお！流っ石ザフィーラや！！
頼りになるで。

ザフィーラはそのまま湯呑みに手を伸ばし・・・
つて、えええええ！？

ザ「すみません主、私にはこの方法しか思い付きません。
・・・先に逝きます！！！」

は「字が違・・・でも無いけど、
ちよつと待つんや！ザフィーラ！！！」

ザ「・・・・・・・・・・・・・・・・いざっ！！！！！」

ザフィーラはまるで今生の別れみたいな雰囲気を出しながら、
あのド紫色の液体を飲み干した。

ザフィーラ・・・漢やあ・・・

ザ「*々%¥ \$ / # x ? : ; ≡ ÷ ? ≠ ° * ? @ ^ || & a m p ;
£」

ザフィーラがあのだ紫色の液体を飲み干した瞬間、
謎の言語を吐きながら、糸が切れた人形のように倒れこんだ。

は「ザファイラアア!？」

大丈夫か、しつかりするんやザファイラ!!!」

ザ「．．．．．無味．．無臭でした．．．（ガク）」

は「なにちゃっかり味の感想言つとるんや!？」

てか無味無臭つて．．．

余計に不気味やわ．．．

は「．．．みんな、ザファイラの犠牲を無駄にしたらアカン、
．．．分かるな？」

シ「はい、これ程の勇姿を見せたのです。

烈火の騎士である私も続かねばなりません」

ヴィ「．．．ぐすん、短い人生だった」

は「ヴィータ、逝く場所はきつと同じ所や、
心配せんでもすぐに会えるよ」

わたしはヴィータの頭を優しく撫でた後、
みんなと一緒に湯呑みに手を伸ばした。

いままでの出来事が走馬灯のように流れるなか、
湯呑みを口にした瞬間．．．

レ「ただいま皆さん」

救世主
レイ兄いが帰って来た。

三人称

は「レイ兄い！、良かった．．良かったよお．．」

リビングに戻ってきたレイに、
目に涙を浮かべながら、
はやては思いっきり抱きついた。

レ「わっ、どうしたん．．って、何でザフィーラが倒れてるんですか？

しかも口から泡吹いて、それにその．．液体？も」

は「シャマルが．．シャマルがあああ．．」

レ「シャマル？シャマルがどうし　「あ、お帰りなさいレイ君」
．．成る程、そう言う事でしたか．．」

そこに全ての元凶、シャマルが戻って来た。
その手に蠢く謎の物体を持ちながら．．

ソレを見たレイは、この大惨事の全容を一瞬で理解した。

シャ「あら？ザフィーラ、そんな所で寝てたら風を引きますよ？」

一体どこをどう見たら、口から泡吹いている人間を寝ていると思うのか、

シャマルは一旦テーブルに料理を置いた後、床に倒れているザフィーラを揺する。

ちなみにシャマルの料理を簡単に説明すると、皿一面に広がる謎の黒い液体の海、

動植物の一部と思われる触角が皿からはみ出し、たまに触角がピクピクと脈動している。

レ「まあまあ、ザフィーラも疲れていたんでしょう、皆さん、ザフィーラを部屋に運んでください」

シ「!？」 分かった、ヴィータ、主はやて、ザフィーラを部屋に運びましょう」

レイの言わんとした事を察したのか、

シグナムはヴィータとはやてと一緒にザフィーラを部屋に運んだ。

これで被害は最小限に留められる・・・はず・・・。

シャ「あらあら．．．行ってしまいました．．．」

レ「シャマル、貴女は一体なにをしているんですか？」

シャ「なにつて．．．料理に決まっているじゃないですか」

レ「．．．．．料理、ですか．．．」

レイはシャマルの凶行を問いたですが、

シャマルは、さも当然と言わんばかりに言い放ち、それを聞いたレイの笑顔は引きつっていた。

シャ「はい、みんなに美味しいものを食べてもらいたくて一生懸命作りました」

レ「．．．．．」

それでもレイは「ソレは料理じゃなくて暗黒物質だ！！」ダークマターなんて口が裂けても言えなかった。

完璧な悪意ならまだしも、シャマルは心の底からみんなのために料理を作り、初めてで慣れなかったのか、シャマルの小指には小さな絆創膏が巻かれている。

その心温まるシャマルの優しい想いに、レイの良心は、ただ黙する事しか出来なかった。

ならば、レイの取る行動はただ一つ・・・

レ「そうですか、なら私もいただきますか・・・」

シャマルの優しさのために、

他のみんなを救うために料理をたிரらげるしかない。

シャ「はい、沢山あるので遠慮せず食べてくださいね」

レ「たくさ・・・いえ、いただきます」

レイは「沢山」の単語を聞いて鬱気味になりながらも、すぐに平静を装って、料理と言う名の暗黒物質に箸をのばす。

皿からはみ出ている触角を取った時に、
「ぴぎゃっ」っと不気味な音がしたが、

レイは幻聴だと無理矢理思い込んで、暗黒物質を口に運んだ。

レ「ボフッ!?!・・・美味、ゴフッ・・・いいですよ・・・」

シャ「本当ですか!?!」

レ「えゝえゝ・・・ごほっごほっ・・・ちょっとクセが強いですけど
ね・・・」

咳き込みながらも必死に暗黒物質を飲み込み、
若干、涙目になりながらも、

レイはシャマルの問いに答える。

レ「シャマル．．この料理の中にナニを入れたんですか？」

どうやらこの超警級危険劇物は遅効性らしく、

後からきた吐き気と気持ち悪さに、

レイは息も絶え絶えのご様子。

シャ「えっと．．セロリと玉葱、それと太刀魚。

あ、あと湯葉のピと、ピ味噌、

秋のピ、よりピした時のピ、

それと、人のピ

ここからはモザイクでもカバーしきれませんので、

しばらくお気に入りの曲を聞き、平和とは何か、についてお考え下

さいm() m

シャ「そして最後に、美味しく作ろうという気持ちです!！」

ひと通りの材料を言い終わったシャマルは、
何故か額に汗をかき「言つてやったぜ！！」感を出しているが、
最初と最後以外は聞くに耐えない程の酷さだった。

ちなみに、八神家の食材管理はレイが行っているが、
その様なグロテスクな食材は買った覚えがない。

レ「……………うぶっ」

それを聞いたレイの顔はげんなりと沈み、
再び気持ち悪さが込み上げてきた。

それでもレイは食べた。

あの皿一面に広がる黒い死海のスープを、
時折ピクピクと脈動する謎の触角を、

愛する家族を救うために、

シャマルの想いを無駄にしないために、
レイは吐き気を催しながらも完食した。

いつから見ていたのか、

ザフィーラを運び終えたはやて達も、

角の隅っこで顔を覗かせている。

その目に希望と賞賛の光をレイに向けながら。

シャ「それにしてもあんなに沢山あったのに一人で食べちゃうなんて…」

レイ君って食いしん坊さんですね」

レ」は、はは．．．ははは．．．」

シャマルの見当違いの言葉に、

レイはただただ乾いた笑いをするしかなかった。

こうして、第1回・シャマル先生のお料理教室ボイズンクッキングは終了した。

シャ　　「じつぶぶ、お料理幸せって良いものですね」

第24・5話 ヴォルケンの日常・シャルル篇（後書き）

レ「第1回って・・・まだやるんですか？」

シ「死ぬ・・・次こそ死ぬ・・・」

ヴィ「みんな・・・さようなら・・・」

ザ「諦めるな。頑張って皆で阻止するんだ」

レ「でもこう言うのって大概阻止できな
うぶっ
ずいません。ちよっとトイレ行つてきます」

シ「やっぱりレイも限界だったようだな」

ヴィ「さっきから顔が青ざめてたからな」

ザ「・・・取り敢えず次行くか」

シ「そうだな」

ヴィ「だな・・・」

第24・5話 ヴォルケンの日常・ヴィータ篇(前書き)

レ「ようやく最後ですね」

ヴィ「お出かけ～ お出かけ～」

レ「ふふふ、嬉しそうですね。

では早速いきますか」

ヴィ「おう」

第24・5話 ヴォルケンの日常・ヴィータ篇

〈ヴォルケンの日常・ヴィータ篇〉

ただいまヴィータは、レイと一緒に散歩中。

ちなみにレイは寒さ対策として首にマフラーを巻いている。

ヴィ「ふん ふん ふんふん」

レイと2人つきりなのが嬉しいのか、
明るい鼻歌と、軽快なステップを踏む。

レ「ヴィータ、ちゃんと歩かないと転んでしまいますよ」

ヴィ「気にしない気にしない」

これも騎士の戦闘経験が成せる業なのか、

ヴィータはレイの忠告も聞かず、

お気楽な声と共に街を歩く。

レイは「やれやれ」と言いながら溜め息をはくが、

その顔は妹を見守る兄のような……

そんな暖かい微笑みの表情だった。

ヴィ「は……はくしょんっ!!……ずずっ」

レ「大丈夫ですか？」

ヴィー「んゝ・・・・・・・・」

「ただど外の寒さには勝てないのか、
ヴィータは大きなクシャミをした。」

「ヴィータの鼻からは鼻水がだらんと垂れていたが、
レイはすかさずティッシュを取り出してヴィータの鼻を拭く。
使うティッシュは、某高級ティッシュの鼻レブ。
ヴィータもそのしつとり感じにご満悦のご様子。」

「勿論ポイ捨てなんてマナー違反をレイがする訳もなく、
ヴィータの鼻を拭いたティッシュはレイのポケットの中。」

レ「寒いですからね、風邪とかに気を付けないと。
ヴィータ、私のコレを使いなさい」

「レイは自分の首に巻いていたマフラーをヴィータに巻く。
だが、ヴィータの身長だとレイのマフラーは長かったらしく、
少し余分に余ってしまったが、
レイはその余った部分を使ってリボンの形を作った。」

ヴィー「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ヴィータはそのマフラーや、リボンを確かめるように、何度も何度もペタペタと触った。

レ「もしかしてキツかったですか？」

ヴィ「い、いや、ちょうど良い．．．あんがとな」

寒さによるものか、はたまた恥ずかしさなのか、ヴィータは顔を少し赤く染めて、マフラーに顔をうずめながら答える。

レ「それは良かった．．．」

そうだ、丁度目の前にコンビニもありますし、よっていきますか」

レイ達の目の前にあるのは“7・11”と言う名のコンビニ。決して某有名コンビニ店ではなく、

英語読みの禁止は作者と読者皆んななどのお約束だ。

つと、話しがズレてしまった。

閑話休題。

レイが先に行き、その後ろにヴィータが着いて行く、と、さつきとは逆の順番でレイ達はコンビニへと向かった。

ヴィ「えへへ．．．あつたけえな、ポカポカするノ」

それに、レイの匂いがする・・・／＼／

ヴィータは先程より顔を赤くして、マフラーを大事そうに掴みながら、レイの後ろをトテトテと着いて行った。

side レイ

レ「暖かいですね」

ヴィ「あつたか」

夏の暑い日には冷房を、冬の寒い日には暖房を、いや、コンビニって良い所だと思いませんか？

ヴィ「なあ、レイ！レイ！」

レ「ん？何ですか？」

ヴィ「コレ、なんだ？」

ヴィータの手には、とてもお馴染みの、超国民的商品だった。それは・・・

レ「雪 だいふく、ですね」

そう、毎年の冬に出ている定番商品。

「おもち、もちもち雪 だいふく」
のリズムでお馴染みの雪 だいふく。

この商品を見ると冬の到来を感じますね。

ヴィ「なあレイ、あたし雪 だいふく欲しい！」

レ「ヴィータ、体を冷やすアイスというのはちょっと・・・」

ヴィ「いいんだよ、あたしん中のアイスは年中無休だ!!」

まるで、ドーン!!と効果音がつきそうな勢いでヴィータは言う。
以前だってアイスの食べ過ぎでお腹を壊したのに、
ヴィータのアイス好きには困ったものです。

レ「分かりました。ただし1つだけですよ」

ヴィ「よっしゃー!!」

ヴィータは嬉しそうにピョンピョンと飛び跳ねる。
子供ですね・・・と言ったら怒るクセに、

これでは本当に子供と大差ないですよ。
ま、言ったら怒るから言いませんけどね。

そして私はヴィータの雪 だいふくと、
肉まんを2つ買って、コンビニを出ました。

side out

ヴィ「アイス」 アイス」

コンビニを出た後、ヴィータは最初と同じように、
明るい鼻歌と、軽快なステップを踏む。

その後ろに続くレイも、

「やれやれ」と言いながら微笑む。

《…ポツ…ポツポツ…》

すると、2人の頭に水滴が落ちた。

次第に水滴の量は増し、

やがてザアアア!と音を立てた土砂降りとなった。

レ「マズっ…ヴィータ、近くに公園があるので避難しましょう」

ヴィ「お、おう!」

レイは近くのベンチに屋根が設けられてる公園を見つけ、
ヴィータと一緒に走り出して避難する。

レ「ふう．．．天気予報が外れましたね．．．」

ヴィ「くそ、めざ しテレビの嘘つきめ」

レイは雨宿りに着いて一息いれ、

ヴィータは今朝見たニュース番組に不満の声をあげる。

まあ、天気予報が外れるのは仕方のない事ではあるが．．．

ヴィ「うっ．．．さみい．．．」

雨に体を濡らされ、そこに冬の様な寒い気温にあてられ、
ヴィータは肩をプルプルと震わせて寒さに耐える。

レ「仕方ないですね、ヴィータ、それでも食べますか」

その姿を見るに耐えかねたレイは袋をゴソゴソとさぐり、
先程コンビニで買った肉まんを差し出した。

ヴィ「うん、いただきます」

ヴィータは肉まんを手にとって、
しばらくの間、その温かさで手を温めたあと、
肉まんをパクつく。

ヴィ「ほふ、ほふ．．あふい．．でも、おいしい」

レ「それはよかった．．では、私もいただきます」

どうやらヴィータは肉まんを気に入った様子。
それを見たレイも肉まんを頬張る。

ヴィ「ふう．．ごちそうさま」

レ「ごちそうさま」

しばらくの間2人は肉まんを食べていたが、
やがて肉まんも食べ終わり、
2人の世界は雨音だけが鳴るだけの、
静寂につつまれた。

ヴィ「．．．．．なあ、レイ」

レ「・・・なんです？」

やがてその静寂の世界で、
ヴィータがポツリと呟く。

ヴィ「雨・・・やむよな？」

レ「さあ、どうでしょうね」

ヴィータの呟きを、レイは雲を見ながら、
ヴィータと同じように、呟くように答える。

ヴィ「はやての病気・・・治るよな？」

レ「・・・」

ヴィータは続けて呟く。
だがレイはその呟きに答えない。

ヴィ「はやての足が治って・・・美味しいご飯を食べて・・・
あったかいお風呂に入って・・・ふかふかのベッドで寝て・・・
それから・・・それから」

レ「　　ヴィータ」

ヴィータの顔は次第に泣きそうで、
それを見たレイはヴィータを自分の胸に抱きよせた。

レ「大丈夫です。はやての病気は必ず治ります、治します。
そのために私達は頑張っているんですから。
大丈夫。ヴィータの言葉は必ず実現します」

ヴィ「レイ．．．うん、そうだよな」

それを聞いたヴィータは安心したのか、
涙を拭って笑顔になった。

レ「おや．．．どうやら晴れたようですね」

ヴィ「あ、本当だ．．．」

それと同時に雨は止み、
雲の切れ間から眩しい日の光が差し込んだ。

それはまるで、はやての病気が治るような．．．
そんな明るい未来を明示しているようだった。

レ「さて、帰りますか」

ヴィ「うん、帰ろう」

そして2人は我が家に向かって歩き出した。
こころなしか、その表情はとても晴れ渡っていた。

ヴィ「ふんふん えい」

するとヴィータは、レイの手を握った。

レ「ん？どうしたんですか？」

ヴィ「なぐんにも」

レ「ふふ、そうですね」

レイは微笑みながらも、手を握りかえす。
ヴィータは更に嬉しそうに笑いながら、
レイと一緒に我が家へ、はやての待つ家へと歩き出した。

ヴィ
」

この日常幸せがずっと続けばいいな

第24・5話 ヴォルケンの日常・ヴィータ篇（後書き）

ヴィ「えへへ。楽しかったなあ。

肉まんも美味しかったし」

レ「そうですね。また今度食べますか」

ヴィ「ほんとうか!？」

レ「ええ、でもみんなには内緒ですよ?」

ヴィ「うん、分かった!」

レ「では皆さん。

次回からやっと本篇が始まります。

楽しみにしてください」

ヴィ「またな」

第25話 襲撃（前書き）

シ「読者の皆よ。今回の司会進行は我等ヴォルケンリッターが務める」

ヴィ「よろしくな」

シャ「皆さんよろしくお願いします」

ザ「うむ、頑張るとしよう」

シ「さて、ようやく本編に入ったな」

ヴィ「長かったな・・・」

シャ「リアルでは役5ヶ月かかっていますね」

ザ「待ちくたびれた・・・」

シ「だがこれで主はやての病気は治る。皆んな、気合いを入れるぞ！」

『おっ！！』

第25話 襲撃

グイータ side

グイークそ．．何所にいんだよ．．．」

あたしは明かり消えた街の上空である奴を探してた。

闇の書のページは確かに埋まった。

レイもイリヨスも協力してくれて、今では闇の書は300ページも埋まった。

でも足りない。これじゃあ全然足りない。

はやての病気は．．闇の書の呪いは刻一刻とはやての体を蝕んでいる。

イリヨスとの一件でイリヨスの統治世界以外での蒐集は出来なくなつて、蒐集のペースは通常の半分以下になった。

このままじゃ残りの半分の埋めるのに時間が掛かっちゃう。

だからあたしはこの街でちよくちよく感じてた高い魔力を持つ奴を探していた。

こいつから蒐集したら最低でも20ページは埋まる。

レイから人の蒐集は禁止されているけど、そんな余裕はない。

あの時にレイから貰った灰色のマフラーを巻きながら、あたしは夜の街を飛んでいた。

騎士甲冑には気温から守る機能があるからマフラーなんて必要ないけどコレを巻いていると胸の中がポカポカする。

グイークたく、メンドクせーな．．封鎖領域展開」

G「ゲフェングニス・デア・マギー」

いちいち探すのもめんどくさくなって来たから、あたしは封鎖領域を展開した。

条件はそうだな．．．AAクラス以上の奴だけを結界内に残すか。これならヒットするだろ。

ヴィー．．．．．！！。魔力反応！大物みつけ！！」

うし！やっぱりヒットしたぜ！

ん？どうやら向こうも気づいたみてえだな。

1人ビルの上で待ち構えてやがる。

取り敢えず小手調べと、牽制のために一発ブチ込むか。

ヴィー．．．グラフアイゼン」

G〔了解。シュワルベ・フリーゲン〕

まずは一発。さあ、どうする！

ヴィー「ふうん．．防ぐか．．」

牽制とはいえ、あたしの一発を防ぐか．．

見た目はガキンチョだけどやるじゃねえか。

でもまだまだ全然だな．．

ヴィー テートリヒ・シュラーク!!」

な「っ．．．!?!?」

後ろがガラ空きだ!

な「きゃあああああ!!」

ちっ、あたしの攻撃に気付いて防御しやがった。
想像以上に硬いな。

ビルから吹っ飛んじやったし、追撃しねえと。

ヴィー「ん?どうやらセットアップしたみたいだな．．．」

やっぱりさっきの一撃で決めれなかったのはイタイな．．．
向こうもセットアップしてみたみたいだし、ちょっとメンドくさくなる。
だけど、その程度でどうにかなる鉄槌の騎士じゃない。

G「シュワルベ・フリーゲン」
ヴィー ふんっ「

さっきの牽制の一発ではなく、今度は本気で叩き込む。

「グイッでえりやああああああ!!」

着弾した瞬間に煙が舞い上がったけど、あたしは構わずにグラーフ
アイゼンで叩きつける。
だけど、それと同時に相手が煙から出てきた。

な「イキナリ襲いかかれる憶えはないんだけど・・・
どこの子? 一体なんでこんな事するの!?!」

「グイッ・・・」

そんな言葉に答える義理もねえし、答えるつもりもねえ。
あたしは黙ったまま鉄球を二個生成した。

な「教えてくれなきゃ・・・
分からないってば!!」

「グイッ　　っ!?!」

何時の間にかあたしの後ろに二発の誘導弾が迫っていた。

くそっ、いつ撃つんだよ! それにこの誘導性・・・一発当たっち
まっただじゃねえか!!

ヴィ「っのヤロオオオオオオオオ!!!!」

あたしは近付いてもう一発叩き込む。

ただど相手は移動魔法を使ってあたしの攻撃を避ける。

ああもう!すばしっこい!!

な「話しを」

そいつは距離をとって杖を構え．．．ってマズっ

な「　聞いてっばあああ!!!!」

ヴィ「うわあああっ!?!」

でっかい桃色の光線があたし目掛けて飛んできた。

なんてバカげた砲撃だよ!?

あと一歩避けるのが遅れてたら直撃してた．．．

ちよっと掠って．．．って帽子は!?!マフラーは何所に行った!?!?

ヴィ「．．．．．．．．．．．．あ」

帽子とマフラーはボロボロになって地面に落ちていった。

はやてとレイが造った帽子が・レイから貰った大事なマフラーが・

・

「ヴィ」~~~~~つっつ!!!!」

アイツ・アイツ・アイツ・アイツ・アイツ・アイツ・
よくも　　ッッ!!!

ブツブス

ヴィ、「グラーフアイゼン！！カートリッジロード！！！！」
G（了解！ラケーテン・フォルム！）

もう許さねえ！絶対に許さねえ！！

あたしの大事な帽子を、

あたしの大切なマフラーをよくも！！

ヴィ、「ラケーテン　　！！」

絶対にコイツをぶつ潰す！！！！

ヴィ、「　　ハンマアアアアア！！！！！！」

な「っ．．．！！！！」

そんなシヨボいプロテクション張つてもムダなんだよ！
鉄槌の騎士を舐めんじゃねえええ！！

な「きやああああああああ！！！！！！」

ちっ、浅かったか．．．
ビルの中に吹っ飛んでいきやがった。

ただどこれでアイツのデバイスは使い物にならねえ。
これでもう終わりだ!!

ヴィ「でええええええいつ!!!」

な「　　っ!?!」

また防御魔法を張りやがったな。
ただどな、粉碎と破壊が得意なあたしがこの程度のプロテクション
に負ける訳がねえんだよ!!

ヴィ「ぶち抜けええええええええええええええええ!!」

G「了解!!」

あたしの一撃はプロテクションを破り、ヤツは壁に叩きつけられた。

ヴィ「はあ．．．はあ．．．はあ．．．はあ．．．はあ．．．」

アイツ．．．結構やるじゃねえか。

それにあたしも熱くなっちゃまった。

ただどこれでもう終わりだ。

後はコイツを気絶させて魔力を蒐集すればそれでお終い。

あたしはグラーファイゼンを振り下ろそうとした時

ヴィ「っ……!?!」

突然現れた乱入者によってソレは止められた。
よく見るともう1人いる。

ヴィ「仲間か……!」

?「……………友達だ」

レイside

レ「……………遅い」

はやてが寝静まった真夜中、
私は1人ソファに座って呟いた。

イリヨスの一件以来、どうも皆さん焦っているようですね。
確かに蒐集のペースは遅くなりましたが、
毎日確実に蒐集してけば問題ないはずです。
それなのに皆さん最近朝日が登る時まで蒐集して

レ「って、皆さんなにやっているんですか……」

街を偵察しているコウモリから映像が入った。
送られた映像にはヴィータとなのはさんが戦っていた。
それから金髪の少女が現れ、更にはシグナムとザフィーラまでもが
参戦していた。

レ「全く…あれほど人から蒐集するなって言ったのに……
仕方ありませんね、私が行って事態を収集しますか……」

私はため息を吐きながら静かに家を出た。
どうやらなのはさん達がピンチのようですね。
早く助けにいかないと。

私は無限の夜羽を使って夜の街を疾走した。

~~~~~

さてと、着きましたね。

戦況はさっきよりもなのはさん達が悪くなっていますね。

金髪の少女はシグナム相手に善戦していますが経験の量が、僅かに押され始めている。

ザフィーラと戦っている橙色の髪をした女性も苦戦中。

ヴィータと戦っている少年は防御だけ。

なのはさんの胸からは手が・・・

レ「シャマツ　　ああもう!!！」

4人揃ってなにやっているんですか！まったくもう!!！

レ「皆さん！戦闘は終わ　　「ブレイカアア!!！」ぎゃああ

ああああああ!!!??？」

結界に入った瞬間、私の視界は桃色の光に覆い尽くされて、私は飲み込まれていった。



side out

「少し時間を遡って」

な「助け、なきや・・・」

なのはは夜空に広がる戦いの光をみて、体をズルズルと引きずりながら呟いた。

金髪の少女と交わした再開の約束。その約束は全く違える事なく果たされた。

本当はすぐにでも抱きついて喜びあいたかった。だが再開の喜びは戦闘の空気で露と消えた。

金髪の少女は自分を守るために空へと飛び立ち先陣を切る。

少女の使い魔も、突如現れた屈強の男性と拳を打ち合い、自分に魔法を巡り合わせてくれた少年は自分を打ち破った鉄槌の少女と戦っている。

だが相手は脅威の力を持ち、自分を打ち破るほどの相手。

幾ら友達の実力が高くても勝つのは容易ではない。

その証拠に徐々にだが友達は押され始めている。

みんなは何とか逃げようと策を練っているが結界が邪魔して逃げる事も出来ない。

その光景を見て何も出来ない自分の無力さに歯を噛みしめる。

RH「マスター。スターライトブレイカーを撃つて下さい」

すると、自分の信頼する愛機から、この状況を打破する一手が提案

される。

な「そんな．．無理だよそんな状態じゃ．．．  
あんな負担の大きい魔法を使ったらレイジングハートが壊れちゃうよ」

RH「いいえ、撃てます」

だが、その一手は究極にして最後の一手。

それゆえに体にもデバイスにもかかる負担は途轍もない。

なのは愛機の提案を拒む、だが愛機は決して意思を曲げない。

RH「私はあなたを信じています。

だから、私を信じてください」

愛機はパートナーであるなのは信じ、自分を信じると言う。  
そんな事を言われたらもうやるしかない。

な「うん．．レイジングハートが信じてくれるなら、私も信じるよ」

なのはが頷くと同時に目の前に桃色の魔方陣が展開された。

な（フェイトちゃん。ユーノ君。アルフさん。

わたしが結界を壊すからタイミングを見て転送を！）

ユ（なのは．．．）

ア（なのは、大丈夫なのかい？）

フェ（．．．．．）

な（大丈夫。スターライトブレイカーで撃ち抜くから！）

なのははみんなに念話でこの状況を打破する策を話す。

みんなはなのはを心配するが、なのはは大丈夫だと、不屈の心を以って答える。

な「レイジングハート。カウントを！」

RH「わかりました」

そしてこの状況を打破するカウントが始められる。

周囲に拡散している魔力が光りながら、なのはの元に集まり、それはまるで流れ星のようだった。

やがて集まった流れ星は巨大な球体となり膨大なエネルギーが蓄積された。

なのはは必殺の一撃を撃ち込もうとしたその時．．．

な「！？っ．．．あ．．．ああ．．．っ」

突如自分の胸から手が生えていた。  
その手は淡く光る桃色の光球を掴み、自分の中のナニかが失われていく。  
なのはは、その光景と形容し難い不快感に後ずさる。

だが、不屈の心は決して折れなかった。

な「っ……。スターライト」

不快感に顔を歪ませながらも大切な友達を守るために、なのはは杖を振りかざす。

最強の一撃が今まさに放たれる。

レ「皆さん！戦闘は終わる」 「ブレイカアア……！」 ぎゃああ  
あああああああ！！！！？？」

ところが、放たれたと同時に謎の断末魔の声が聞こえ、声の主はド  
ツプラー効果しながらキラんと、夜空に消えた。

『あ………』

それを聞いたみんなは敵も味方も関係なくポカンと口を開け、声の

主が飛んでいった夜空を見つめた。  
折角のクライマックスシーンを台無しにした声の主は悪なのか、  
それとも、偶然砲撃に巻き込まれてしまった不運を悼むべきか、  
それは．．．うん、多分後者の方だと思う。

Leiside

レ「し、死ぬかと思った．．．」

いや、わたし不老不死なんで死なないんですけどね。  
でも流石に焦りましたよ。

イキナリ桃色の光線が飛んで来たと思ったら、私は思いっきり飲ま  
れるし、

大気圏ギリギリまで飛ばされて意識は何回も失いかけるし、  
何故か、死んだ母上と再開しました。

そういえばあの金髪の少女。母上に似ていましたね。

という事は未来の私が言っていたフェイトさんとはあの子の事なん  
でしょうか？

まあ、聞けば分かりますか。

さてと、戻ってはきましたが、シグナム達は結界が壊されたので散  
り散りに逃げましたね。家に帰ったらお話です。

なのはさんはつと．．．って、今にも倒れそうなほどフラフラじゃ  
ないですか。

レ「よつと．．．なのはさん、大丈夫ですか？」

な「え？．．レ、レイ．．君．．？」

レ「はい。レイ君です。ちょっと待つてくださいね。すぐに傷を治しますから」

倒れそうになっていたなのはさんを支えて、私は有償の奇跡を使ってなのはさんの傷を治した。

そうだ、闇の書に蒐集された時にリンカーコアを色々和有償の奇跡で弄くって基本的な構造は理解したので、  
なのはさんのリンカーコアも治せるはずです。治しときましよう。

レ「よし。これでオツケーです。どこも異常はないですか？」

な「え、えと．．大丈夫です」

なのはさんは体を起こして自分の体を確かめる。  
どうやらこれといった異常は無いみたいですね。  
ま、私の有償の奇跡にかかれば当然なんですけど。

な「ありがとうございます．．．じゃなくてレイさん」

レ「あはは、レイ君でいいですよ。未来の私にもそう呼んでいたんでしょ？」

未来の私と会った今なら別にいいですよ。

な「え？それじゃあ・・・」

レ「はい。未来のわたしはなにを何してるんだ！」がはっ  
！」

突如、橙色の女性が現れて殴られてしまいました。

うん。これは首の骨が完全にイキましたね。

私でなかったら死んでましたよ。

な「ア、アルフさん！違うの！その人は」

レ「初めましての挨拶にしてはかなり強烈ですね・・・」

私は首をコキコキと鳴らしながら立ち上がる。

どうやら他の人達も集まってきたみたいですね。

レ「この場合は初めましてと言うのですかね？

皆さん知っているかもしれないが、私はレイ・D・クロムハイツ  
です。

未来の私がお世話になりました」

過去に未来の私が居て、その未来に今の私が居る。言葉にするとな

んか変ですね。

ア、「レイって．．．あんたレイかい!？」

そう言われればカナリそっくりだね。

あつと、あたしの名前はアルフってんだ。さっきは殴ってゴメンな」

フェ、「フェイト・テストロッサ。レイの言ってた過去の私ってそう言う事だったんだ．．．」

ユ、「ユーノ・スクライア．．．です。

あの．．．なんで僕の体にコウモリが群がっているんですか?」

ホントだ．．．。

街を偵察しているはずのコウモリ達がユーノ君に群がっています。

数は3〜40匹といったところでしょうか。

コウモリ達は私が指示しない限り普通のコウモリと全く変わりません。

そして今はコウモリ達に指示を出していません。と言う事はつまり．．．

レ、「わかりました!ユーノ君からは被捕食者の匂いがあるんですけどよ。きつと」

ユ、「イヤだ!思い当たる節があるから余計にイヤだ!」

と言ってもそれしか考えられないんですよ。



ユーノ君の方にも思い当たる節があるようですし。  
ま、これ以上放置するのは可哀想なのでコウモリ達を離しますか。

レ「さてと、冗談はこれ位にして・・・

皆さん、私の家族がご迷惑をお掛けして申し訳ありません」

フェ「家族って・・・まさか・・・!」

な「レイ君の言っていた家族ってあの子達の事だったの!？」

ア「あんた、あいつらの仲間だったのかい!!」

ユ「うわあああ!？またコウモリ達があああ!」

私の言葉を聞いた瞬間皆さんが身構えました。

ユーノ君は・・・何故か私の指示をコウモリ達が聞きません。

まあ、場を和ますにはうつつけなので少し放っておきましょう。

レ「そうです。家族の方にもよく言っただけで聞かせますので・・・

それと、これはほんの少しのお詫びです」

私は有償の奇跡を使って皆さんの傷を治した。

フェ「あ、ありがとう・・・」

ア「仕方ないね、今回だけは許してやるよ」

ユ「傷よりもコウモリ達をどうにかして・・・」

好い加減ユーノ君が泣きそうになってきたのでコウモリ達を私の体に戻しましょう。

ア「で、あんた達の目的は一体なんだい？」

フェ「魔法文化のない世界での魔法行使。一方的な襲撃行為。どれも軽い罪では済まないよ」

な「もしかして・・・前に言っていた病気の妹さんのため？」

おっと、イキナリ核心ですね。

ですがはやての事は伏せておきましょう。

はやての身に何かあつたら大変です。

レ「まあ、そうですね・・・」

妹の病気を治すためには沢山の魔力が必要なんです。

私達には時間があまり残されていないんです」

な「わ、わたし達にも手伝える事が　「それは無理ですね」な、  
なんで!？」

レ「それは・・・今に分かります」

私はなのはさんの声を遮り、上を指差す。  
次の瞬間……

？「　　ディレイド・バインド！！」

私の体を鎖が幾重にも巻きついてきた。

ク「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ！  
話しは聞いた。悪いが君を連行させてもらう！」

な「クロノ君！？ちょっと待って！レイ君は……」

ク「なのはも話しを聞いたはずだ。  
彼もこの事件に共犯している。  
事情を聞くためには彼を連行するしかない」

レ「……ね？、分かったでしょう？  
私達を手伝うと言う事は時空管理局に追われると言う事です。  
そうなれば管理局に捕まるか、管理局を潰すしかありません」

そう言いながら私は鎖を引き千切って影渡りを発動させる。  
この程度の拘束……友であるイリヨスの鎖に比べれば糸同然です。

ク「お、おい！待  
」

レ「それでも手伝いたいと言っのなら私達が蒐集を終えるまで待つ  
てください。

では皆さん。次に会う時が蒐集を終えた時である事を願います」

そして私はみんなの前から完全に姿を消した。

第25話 襲撃（後書き）

シ「まずは本編の2話分か．．．  
なかなか良いスタートだな」

ヴィ「だけどあの後レイにメチャクチャ怒られた．．．  
1週間アイス禁止だつて．．．」

シ「ああ、あの時のレイは怖かったな．．．  
これでもかと言う位の満面の笑みで．．．  
私も模擬戦を禁止されてしまった．．．」

ザ「私は鍛錬禁止だ．．．」

シャ「お料理禁止令出されちゃいました．．．」

『ホツ．．．．．．』

シャ「ちょっと！何ですかその安心したような表情は！？」

ザ「少しの間は命が繋がったな」

ヴィ「しばらくは安心して眠れる」

シ「では読者の皆よ。また会おう」

シャ「みんながイジメます〜」（泣）

## 第26話 お引越し（前書き）

「さて今回のゲストはユーノ・スクライア君です。

ユーノ君、よろしくお願ひします」

「よろしく。まさか、なのはやフェイトより先だとは思わなかった  
「よ

「それはこの話しの最後を見れば分かります。

ユーノ君の代名詞とも言えるモノがありますので」

「あれ？僕にそんなのあつたかな？」

「それは見てからのお楽しみです」

## 第26話 お引越し

レイside

「さてと、他に必要なものは・・・」

私は今商店街でお買い物中です。

あの襲撃の日、皆さんにはキツチリと言って反省してもらいました。管理局に目を付けられた以上、向こうは必ず追ってきますが、それ以外・・・つまり自分からは仕掛けるなと言う事で落ち着きました。

ま、そうなくても私が出向けばなんとかかしますけどね。

皆さんの影にはパスを繋いでいるので影渡りですぐに向かえます。と、今はそんな事よりお買い物です。

より良い物をより安い値段で買う。お買い物とは戦場です。

「おお、レイ君。待っていたよ。ほら、今日1番の野菜。取っておいたよ。」

すると八百屋のおばあさんが袋に入った野菜を手渡してくれました。うん。確かに今日1番の出来です。いい仕事してますね。

八百屋のおばあさん・・・ミツコさんはよくこうして私に1番の野菜を取っていてくれます。

以前ミツコさんが腰の病気で動けなくなった時に私がおぶって病院まで運んだのですが、なんでもそのお礼と言う事です。

その後によつと有償の奇跡を使って病気を治しましたけどね。

「いつもありがとうございます。これ、お代です」

「いいんだよ気にしなくても。あたしもレイ君から若さを貰っているからね」

．．．確かにミッコさんは会う度に肌のツヤやハリが良くなっているんですね。

もしかして吸われてないですよね？

「ははは。そんなもの貰わなくてもミッコさんはお綺麗ですよ」

私はミッコさんに手を振りながら八百屋を後にした。

ちなみにミッコさんの野菜は無農薬で野菜を育ててる農場から直に仕入れてるらしいです。

だから味も良いですし、値段もスーパーより遥かに安いです。

「おう！来たかあんちゃん。ほら、今朝あげられた魚だ。持ってけえい！！」

次に声を掛けて来たのは魚屋のおじさんの玄さん。

なんと玄さんの息子さんは漁師らしく、息子さんが獲った魚を玄さんが売っているんです。



「おお、鮭ですか。旬ですね。さすが玄さんです」

「だろう！ついでにヒラメも持ってけ。

ヒラメには“こらくげん”が豊富だからな。

あんちゃんの家族は女所帯だからきつと喜ぶぞ」

玄さん・・・あまり言い慣れない言葉を言うもんじゃないですよ。  
コラーゲンが平仮名になっています。

「ありがとうございます玄さん。

ミツコさんにも言っておきますよ。

玄さんは優しくて素敵な人だね」

「ばっ・・・！？ばっかやろう！

なに言ってるやがるんだ！

俺はよく鼻屑にしてくれている常連さんにサービスしただけでい！  
俺がミツコさん相手にそんな・・・」

玄さんの言動で分かったと思いますが、玄さんはミツコさんの事が  
好きなんです。

だけど玄さんはとても恥ずかしくてミツコさんに声もかけられない  
始末。

だから私をダシにサービスをしてミツコさんの気を惹こうとしてい  
るんです。

いいですねえ・・・青春ですねえ・・・恋愛に年齢なんて関係ありま  
せん。

「おやおや。どうしたんだい？そんな大声だして」

噂をすればなんとやら・・・

玄さんの意中の人。ミツコさんがやってきました。

「み、ミツコさん・・・俺たちじゃ別に」

「いやね。玄さんが魚をサービスしてくれたんですよ」

「お、おい！あんちゃん！」

これは千載一遇のチャンスです。

これを機にミツコさんと玄さんの仲を進展させましょう。

私が恋のキューピットにならねば！

「玄さんはわざわざ旬の魚をサービスしてくれたんですよ。

しかも私の家族の事も考えてくれてお肌がいいヒラメまで。

いやあ、玄さんとはとっても優しいですね。

ここまで気を配れて優しい人はそうそういませんよ」

「そうだったのかい。優しいねえ玄ちゃんは。

あたしも優しい人は大好きだよ」

「あ・・・ありがとうございます。ミツコさん・・・」

うん。まだ玄さんがぎこちないですね。  
なにかもう一押しおれば・・・

「玄ちゃんを見直したよ。」

いっつもあたしが声を掛けても相槌を打つだけだし、  
むすつと難しい顔をして。  
てっきり嫌われてるかと思ったよ」

よし！ここです！！

「そんな事ありませんよ。」

玄さんはミツコさんが綺麗すぎて声が掛けられなかったんですよ。  
恥ずかしかったんでしょうね」

「な・・・っ!?!?」

「本当かい？玄ちゃん」

「へ、へい。俺にゃあミツコさんは高嶺の花です。」

だからどう会話をしたらいいのか分からなかったんです」

会話時間9秒。自己記録更新です！

「嬉しいこと言ってくれるじゃないか。」

ただどこれからは普通に喋っとくれよ。

あたしも玄ちゃんとは仲良くしたいからさ」

「わ、分かりました。

改めて宜しく願います。ミッコさん」

玄さんがそう言うのとミッコさんは満足した様子で戻っていききました。よしよし。とりあえずは、まともに会話できるくらいの仲になりました。

「良かったですね玄さん。これでミッコさん　とおおお!？」

すると、いきなり玄さんが魚を捌く刀で斬りかかってきました!

「危ないじゃないですか!?!いきなりなんですか玄さん!?!」

「っきゃろおお!!あんだこそ何やってんだ!

ミッコさんと話しさせやがって!

危づく心臓が飛び出るかと思っただぞ!?!」

「別に良いじゃないですか。これで晴れてミッコさんとお友達に

「

「そつ言つ問題じゃねえ!?!」

マズイ．．．ただの照れ隠しが刃傷沙汰に発展してきました．．．  
これは．．．うん。逃げるに限ります。

「こら！待ちやがれ！！」

「イヤですよ。待ったら斬られますもん。  
悪いですが、ここは退却させてもらいます」

私は玄さんから付かず離れずの距離を保ちながら商店街を走り抜ける。

刀を持ったおじさんとそれから逃げる私．．．はたから見たらシユールな絵図ですね．．．

「はあ．．．はあ．．．待ちな、あんちゃん！  
最後にこいつを持っていきな！」

しばらく走っていると、玄さんはいつも通りの口調で私を呼び止めました。

足を止めて振り返ってみると私目掛けて赤い何かが飛んできました。

「よつと。これは．．．蟹ですか？」

飛んできた物体の正体はなんとタラバガニ。

関東では越前ガニ。関西、山陰では松葉ガニと呼ばれる足の長いカ

二。

肉にはタンパク質とミネラルが、卵巣には老化防止物質が含まれている……  
いわゆる高級食材です。

「玄さん……これは……」

「その、なんだ……。今日のお礼だ。

あんちゃんのお陰でミツコさんと話す事ができた。

俺のためにここまでしてくれて、あんがとな」

玄さんは頭をボリボリと掻きながら感謝の言葉を言う。

最初からそう言ってくれば良いのに……

全く素直じゃないんですから玄さんは。

「分かりました。蟹はありがたく頂いていきます。

でも私はほんの少しだけ切っ掛けを与えただけで、ここからは玄さん次第です。

頑張っ て想いを伝えるんですよ。あと結婚式には呼んでくださいね」

「任せろやい！それと最後のは余計だ！でもちゃんと呼ぶぞ！」

そう言っ て玄さんは来た道に戻っ て行きました。

刀を腰にぶら下げたまま……

警察のお世話にならないよう、祈っ ておきましょう……

~~~~~

さて、商店街での楽しいお買い物は終わりました。

玄さんから沢山の魚も頂いたので今日は豪華な食事ですね。

あと必要なものは．．．．．無いですね。

それじゃあ帰るとしますか。

「これなんて良いんじゃない？」

「うん．．わたしはこっちの方が良いと思うなあ」「

帰る途中、最初の声に聞き覚えがありました。
振り返ってみると、女の子向けのアクセサリーショップで何を買っ
のか迷っているみたいですね。

「やあ、久し振りですね。すずかさん」

「れ、レイ．．さん．．」

「レイ？．．レイですって!？」

私が声を掛けた瞬間すずかさんは驚きの表情を向け、

もう1人の女の子はまるで親の仇を見るような視線を向けてきました。

私なんかしましたっけ？

「お、落ち着いてアリサちゃん。

この人はレイ君じゃなくてレイさん。

似ているけど別人だよ！」

すずかさんは女の子を．．．アリサさんをなんとか宥める。

うーん．．．未来の私は一体なにをしかしたんでしょうか？

「そっか．．．そうだもんね．．．

アイツが大人になって現れるわけないもんね．．．

いきなり怒鳴って済みませんでした。

わたしの名前はアリサ・バニングスって言います」

「いえいえ。間違いは誰にでもありますから（本当は違いますけど）

私の名前はレイ・D・クロムハイツと言います」

「へえ〜。世の中には同じ顔の人間は3人いるって言うけど、

名前までアイツと同じなんですか。レイさんは」

「ははは。そんな畏まらなくても良いですよ。レイでいいです。

すずかさんもレイ君でいいですよ。そっちの方が呼びやすいですよ？」

レイ君と私は同一人物ですからね。
いちいち分ける必要ありませんよね。

「ところで2人は何をしているんですか？
見たところ何を買いなのか迷っているみたいですけど」

「実は友達が引っ越してくるんです。
それで何かプレゼントしようと思ったんですけど迷っちゃって・・・
フェイトちゃん何をプレゼントしたら喜んでくれるかな？」

「フェイトちゃん・・・ああ、フェイトさんですか」

まさかフェイトさんが引っ越してくるとは・・・
と言う事は管理局もこの街に来るんですか・・・
少し厄介ですね。

「フェイトの事知ってるの？」

「ええ、家族が少しお世話になりましたね」

「そうだ！それならレイ君に選んでもらおうよ！」

「それナイスアイデア！レイはどっちがいい？」

そう言っただけでアリサさんとすずかさんは2つのアクセサリを出して
きました。

アリスさんが出したのは星と月が一緒になっているキレイなストラップ。

すずかさんが出したのはイルカの可愛いストラップでした。

「別に両方プレゼントしても良いんじゃないですか？

幸い2つ共かさばる物ではありませんし、1つに絞る必要なんてないですよ」

「そっか！その手があったか！

ありがとうレイ！」

2人は私の言葉を聞いた瞬間に早速お会計を済ませてアクセサリーを買いました。

「そうだ。レイ君もフェイトちゃんのお友達なら挨拶に行こうよ」

「うわぁ．．．私に敵地のご真ん中に行けと言うのですか．．．」

余計な揉め事は起こしたくないので、ここはやっぱりとお断りしましょう。

「いえ、私は遠慮しときま」

「早くしなさいよー！置いてっちゃわよー！」

オウ シット
Oh shit! アリサさん達は私の言葉を聞く前に行っていました。
これでは断る訳にはいきませんよね・・・
仕方ありません。私も行くとしますか。

・・・絶対に一悶着ありますね・・・はあ・・・

~~~~~

と言う事で来ました、来ちゃいました。

フェイトさんのご自宅・・・おそらくは管理局の本部であろう家に・・・

「よし・・・じゃあ、押すよ・・・?」

「う、うん・・・」

2人は緊張の面持ちでインターホンを押す。

私も2人とは違う緊張感が出てきました。  
まるで今から自首する犯人みたいです。

「はい。どちら様？」

インターホンに反応して出てきたのは翠色の長髪の女性。  
この佇まい．．．もしかして指揮官クラスの人ですかね？

「初めまして、私はアリサ・バニングスと言います」

「私は月村　　すぐかと言います。すみませんが、フェイトちゃんは  
いらっしやいますか？」

「．．．．．レイ・D・クロムハイツです」

「アリサさんとすぐかさんね。それと．．．そう、貴方が．．．  
私はリンディ・ハラオウンって言います。  
少し待っててね、すぐにフェイトさんを呼んでくるから」

リンディさんは私を見た瞬間．．．ほんの一瞬だけ目付きを変えた。  
この場では私以外は気付けないでしょうね。  
その後すぐに目付きを戻してフェイトさん呼びにいった。  
さっきの一連の動作．．．おそらく相当の場数を踏んでいますね。  
やはり彼女が指揮官で間違いないです。

「アリサ！すずか！」

「それにレイ君も？」

そんな事を考えているとフェイトさんと、なのはさんが来ました。まさか、なのはさんまでいるとは・・・まあ予想はしてましたけど。

「フェイトちゃん」

「お引越しおめでとう！」

そんな私をそっちのけに2人はフェイトさんにプレゼントを渡す。はあ・・・もう帰っていいですか？

「わあ！2人ともありがとう！大事にするね！」

プレゼントを貰ったフェイトさんは嬉しそうに笑った。

うん、いい笑顔です。これでもう思い残すものはありません。帰りましょう、すぐに帰りましょう、さあ帰りましょう。

「良かったわねフェイトさん。」

ついでにお友達とお茶でもしてらっしゃい」

「あ、じゃあウチのお店で！」

「そうね。折角だから私もなのはさんのご両親に挨拶するわ。もちろんレイ君も一緒にするわよね？」

ジーザス  
Jesus . . . なんて素敵なお顔なんだろう . . .

私何か悪い事でもしました？

あ . . . 蒐集と言う犯罪をしていましたね。

それに私個人は数え切れない程の罪を抱えていました。これも因果応報なんですかね？

「 . . . ええ、是非一緒にさせてください」

私は流れる涙を堪えながら翠屋に向かった。

そう言えばJesusジーザスと言う言葉は「神様助けて」と言う意味なんです。

吸血鬼の私がそんな事を言うなんて可笑しな話ですね。

. . . 余談ですね . . . はあ . . . 鬱です . . .

side out

窓から柔らかい陽射しが差し込む絶好のお茶会日和の日。

喫茶 翠屋では2人の人物がテーブルを挟んで向かい合っていた。

「あら、このコーヒー美味しいわね」

1人はコーヒを飲みながら和んでいる女性、リンディ・ハラオウン。

だがその笑顔はとても不敵な笑みである。

「……………そうですね」

もう1人は力ない声で返事をするレイ・D・クロムハイツ。

度重なる不運によってその顔は哀愁が漂っている。

ちなみに子供達は外で和気あいあいとお茶会している。

それを見たレイはより一層深いため息をはく。

「改めて自己紹介といきましょう？」

私の名前はリンディ・ハラオウン。階級は提督です」

「…………レイ・D・クロムハイツ。ただの吸血鬼です」

だがそんな事をして帰してくれる訳ではなくリンディは話しを進める。

レイは仕方なく…………本当に仕方ないと言う感じで目付きを真剣なものに変える。

「…………やっぱり貴方は過去の…………と言うか今の時代のレイ君なのね」

「はあ．．．どうやら魔法関係者の人には私の存在は知られてるみたいですね」

「ええ、お陰でその時に起こった事件はすんなりと解決したわ。ついでに今回の事件も手を貸してくれるとありがたいんだけど．．．」

「したたか者」とはこういう人の事を言うのだろうか．．．  
リンディはさり気ない会話で主導権を握ろうとする。  
長年培った経験と場数は伊達ではない、ないのだが．．．

「お断りします」

レイが培った経験も相当なものだ。  
なにせ1800年生きてきたのだ、腹の探り合いは慣れたもの。  
ソレはもはや経験の塊と言ってもいい。  
リンディの一言はバツサリと切って捨てられた。

「あら？理由を聞いても？」

「貴女なら聞くまでもないでしょう。  
法務組織の貴女達が犯罪者の私達と協力する訳がない。したとしても必ず裏がある。」

それに未来の私は兎も角、今の私は貴女達、管理局を信頼できない。私の友達が統治している世界では「我々は次元世界を管理する義務がある」とか言って管理局が攻めてきたらしいですよ。



今は管理局も諦めて手を出していない様ですけど」

「それってまさか　　！？」

リンデイはその言葉を聞いた瞬間、レイの言っていた相手が誰なのかすぐに分かった。

管理局以外に統治世界を持ち、なおかつ管理局とやりあった存在は1つしかない。

「　　【龍王 イリヨス】　　」

そう、超S級生体ロストロギア【龍王イリヨス】

管理局が数年間もの間戦いを挑み、その全てが全滅に近い敗北。

一番酷かったモノは約2年程前に行った「大決戦」と言われる最大規模の部隊派遣。

管理局の精鋭420人と戦艦20隻以上が集まり今度こそイリヨスを討伐できると管理局は信じていた。

だがその部隊はイリヨスの前に惨敗した。

戦艦全ては無惨にも焼け落ち、局員も409人が死亡し、時空管理局史上最大の大惨事だと言われている。

まあ、リンデイ自身は余りにも身勝手な要求をした自分達管理局が悪いと思い自業自得だと思っているのだが・・・

「　　そんな事をしてくる組織なんて信じられる訳ありませんよね？」

「・・・そう・・・ね・・・確かに貴方の言う通りだわ・・・」

如何せん、その話しを今されるのは非常に不味い。

イリヨスと管理局、どちらが悪いかなんて今更論議する必要もない。管理局を信じろ、と言っている時にそんな話しを持ち出されたらこの会話の意味が崩壊する。

リンディはレイの言葉にただ押し黙るしかなかった。

「まあ、私は管理局を全く信用してませんが、リンディさん自身の事は信用するに足る人物だと思っっているので。そうでなければ未来の私が協力するなんてあり得ないですからね」

ところが一変。

レイは組織ではなく個人としてなら信用すると言った。

「それは嬉しいわね。」

でも残念、私は管理局の人間として動くわよ」

「そうですね、それは残念です」

リンディのようにさり気なく協力をこじ付けようとするレイだったが、そこはリンディも負けてられない。

一言の元にレイの要求は突っぱねられるが、レイもそうなる事はわかっていたのだろう。

「やっぱり」と言った表情で、そこまで気にしてなかった。

「まあお互い、やれる所までやりましょう。  
貴女達は私達を全力で追いかけて、私達は貴女達から全力で逃げる。  
手加減をせず、なおかつ人死に出ない程度の節度を持ってね。  
ではまた、リンディさん。この事件がお互いにとって良き結末である事を祈っていますよ」

レイはそれだけ言うとテーブルにお金を置いてお店を出た。  
リンディは「やっぱりレイ君と腹芸しても勝てないわね」と言いながらレイを見送る。

お店を出たレイはテラスで楽しくお茶をしているのは達．．いや、  
アリサとすずかに抱かれているユーノを見て．．．

と、一言呟やいて家に帰った。

## 第26話 お引越し（後書き）

「おい待て！僕の代名詞ってまさか淫獣じゃないだろうな!？」

「いえ、ユーノ君の代名詞は淫獣です。

女の子の純粹無垢な心を可愛い小動物に化けてかどわかし、  
触り、触られの状態を悦ぶ・・・

コレを淫獣と呼ばずしてなんと呼ぶのでしょうか?」

「違う！あのフェレット状態は仕方なくやるしかなかったんだ!！」

「その「仕方なく」がもはや犯罪者の言い訳ですね。

大丈夫です。ユーノ君は初犯だし、まだ子供です。  
きっと刑は軽いですよ。

社会的にはほぼ死刑と変わりませんが・・・」

「違あああああああああう!!!!!」

「・・・・・・・・強く生きてください」

## 読者の皆様にお詫び

誠に勝手ながら、9/29日を以って魔法少女リリカルなのは〜悠久の吸血鬼〜を凍結させていただきます。

最近の話は段々と質が落ちてきて、私自身が私の書いた話に納得する事が出来なくなりました。

このまま投稿する事は私の気持ちがあつても許さず、読者の皆様に質の落ちた話をお見せする訳にはいきませんので、心苦しいですが更新を凍結させていただきます。

まさかこんな形で「完結」のボタンを押すなんて本当に残念でなりません。

私の作品を見て頂いた読者の皆様に・・・  
感想を書いて頂いた皆様に・・・  
ポイント評価をして頂いた皆様に・・・  
お気に入りを選んでくれた皆様に・・・  
本当に申し訳ありませんでした。  
そして、今まで読んでいただき、ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6270s/>

---

魔法少女リリカルなのは～悠久の吸血鬼～

2011年10月1日10時00分発行